
暇な世界にさようなら

歯ぐき血まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な世界にさようなら

【Nコード】

N7753Y

【作者名】

歯ぐき血まみれ

【あらすじ】

あー、最近することないよなー学校行っても授業とかまじつまんねえし。この世界は暇すぎる。ゆいいつの楽しみといえば家でやるオンラインネットゲームくらいだよまったく。はあ、いつそのこと別の世界に神様が送り出してくれないかなあ。とか思いながら日常を過ごしてたら異世界に飛ばされてしまった。まじかよおおおおおおお！！作者はまだ未熟者ですので誤字脱字や変な点などがありましたら指摘してくれると嬉しいです。

オレの日常（前書き）

最初はらへんは主人公の日常回

オレの日常

「あーさむい。なんかなんねーかなマジで？」

隣でオレの友人がそんなことをいう

「なんとかできたらしてるって・・・」

実際なんとかしてほしいよなこの寒さ

いま携帯の天気予報的には5 らしい

コイツがさむがるのも無理はない。

「そーいやさーもうすぐテストだよなマジで」

そついやそんなこともあつたな

まあ知つたところで勉強なんかするわけがないが

「俺全つ然勉強してないからこんどやべーかも的な？」

へえ、こいつ意外に勉強するタイプなのか。

こいつは守山達也 オレこと凜道 蛭の同級生。去年高校に入学した時に前の席にいたのがコイツだ。

その時からコイツとはつるんでるからもう1年くらいの付き合いになるのか

「じゃー早く帰って勉強したほうがいいんじゃないのか？」

とりあえずテストが近いならオレとだったらしゃべってる時間なんてないはずだし

そう思ってオレはそう提案する。

「そうだなあー、んじゃ帰るわ。また明日なー」

よし、オレも早く家に帰って暖房の聞いた暖かい部屋でネットゲでもするか。

そついいながら特に急ぐまでもなくだらだらと家に帰る虫であった。

「さむっ」

自分の家についてまず最初に口から洩れた言葉がそんなものだった。

いやだつて4 だよ？外より寒いっておかしくね？

オレは制服を適当にハンガーにかけて暖房を入れつつPCの電源を入れる。

ちなみにここはもうわかってると思うがオレの家である。

母親は毎日深夜に帰ってくるか仕事が遅過ぎて仕事場で寝泊まりするしあんま家にいないのが現状だ

親父はいない。事情はしらん。

まあそこらへんは母さんが話してくれる時をまとうとは思っ

別に知りたいわけでもないしな

そんなことを考えてる間に室温もそこそこあがって暖かくなってきている。

さて、と。

そろそろINするか。

そう思いつつオレはインターネットをつけてオレがはまっているネットゲームーセカンドワールドを起動する。

スタート画面。

そして始まりの街

このセカンドワールドは3Dのアクション系だ。

いろいろな職業があり、レベルアップによってもらえるポイントをいろんなステータスにふって自分専用のキャラクターをつくれる。

ちなみにオレのキャラ名はホタリンである。

昔言われてたあだ名を使ってみた。

もっとマシな名前にしてよって？

ほっとけ

さーていつものメンバーはいないかなあ

そう思い街をぶらぶら歩いてたら後ろから人影が近ずいてくる

「やあ」

そして挨拶の声。

振り向く。

白いニット帽 服も同じく白系で統一されたディスプレイズ そして金髪

間違いない

「よう、マカロニさん。他のみんなは？」

この友だちの名前はマカロニ

日常的に狩りや素材集めを共にする信用できる仲間である。(キリッ

それにマカロニさんの物理範囲攻撃ははんぱない。

ザコモンスターの軍隊なら一撃で壊滅させられる

一部では一騎当千のマカロニとかいわれてるらしい

「まだ着てないみたいだね」

さわやかな笑顔でそう返事される

「んじゃ適当にクエストボードでもみとこっぜ」

「そうだね」

そんな会話をしていたら

「もおあんたたち着てたの？早いわね」

そんな声が聞こえてくる。

ちらっ

全身黒い龍騎士が着るような鎧に身をつつみ、頭にはティアラのよ
うなものをのせている。

そして金髪のパニーテル

「なんだコロネか」

「なんだって何よ!」

ちなみにこいつが着てる装備 集めるの大変だったなあ

ていつかわざわざ装備を確認なんかしなくても声でわかるんだけどね

こいつはコロネ。

コロネもオレのギルドメンバーの一人で職業はアサシン。相手の急所を突いて即死させたり相手から素材を盗んだりするのが主な戦闘スタイルだ。

てゆうか、普通に強い。

「んで、あんたたちなにしてたのよ」

「ああ、暇だから何か適当にクエストでもいこうかってね」

「なるほどね」

2人が会話してる間オレはクエストボードに注目していた。

このクエストボードといわれる板からは様々なクエストを受けることができる。

まあようはどこにいくか決めるところみたいなの？

「うーん、素材集めはめんどくさいから討伐系にしてくんね？」

「そうだねえ・・・おっと」

マカロニさんが何かにきずいたようだ。

オレもマカロニさんが見ている方向をみる。

そこにはよく知ったヤツラがいた

「お、アルスとリサじゃん」

「そうみたいだね」

「お、こんにちわー。ちょうどいまどこいこうか迷ってたところだったんだぜ」

「よー」

「……………」

元気な挨拶を返してくれたのはリサ

なにかと綺麗な聖騎士装備に身をつつみ、背中には長くも短くもな
い剣を二本収納している

本人いわくかなりのレアアイテムでちよーかるいよ！とのこと

みずいろの髪をツインテールに結んであり、かなり幼く見える

そして何もいわず腕を振ってあいさつしたのがアルス。

いわずもかな超無口である。

だがしかし彼の防御力は理解不能なレベルまで達している。

全身西洋の鎧を装備しており、外見からどんな人間なのかあまりわ
からない

っていうか全く分からない

頭装備も鎧なので顔もわからないという謎極まりないヤツだ

一部の間ではびくともしない絶対的な防御力から世界の境界線
ア
ー
スライン とか呼ばれてるらしい

なんとも大層な二つ名だが大袈裟な表現にはならないところがまた
すごい

ってか怖いよ

さて、これでそろったなギルドメンバー

「ところでどっかいきたいところ……」

「ねえ知ってる？」

オレが言い終わる前にリサが乱入

「この前突然北の森の奥地に空まで続く塔が出現したらしいよ！」

なんだそれ、おもしろそうだな

「え、ほんと？おもしろそうね」

「そうだね、それでその情報はどこから？」

マカロニさんの質問にたいし

「私のあたしだちが森で見かけたらしいー ほら、写真！」
と答える。

なるほど、証拠付きつてワケか。ならもう決まりだな

「んじゃ、その塔ってやつにいじつぜ」

というオレの提案に

「そうだね」

とマカロニさんと

「わかったわ」

ころねが返事し

「.....」

アルスが無言の同意

「おっけー！じゃー私が案内するよ！」

そうして、とりあえずオレたちは好奇心とかそんなもんで塔に向かった。

でも今にして思えばなんで不思議に思わなかったのだろうか

アップデートの報告もなしに出現した塔のことを。

オレの日常（後書き）

誤字脱字や感想など報告してくれるとありがたいです。

終わる日常（前書き）

今回は戦闘かいてみましたー的な

12月26日誤字発見したので訂正しました。

終わる日常

「ん、気がついたようね」

目を開ける

「なんだコロネか」

「なんだってなによ!」

ベシッ

「んで、ここはどこなんだ?」

「知らないわよ!」

ベシッ

あれ?

おかしい。

自分の服をみる。

魔法使いが着るようなベタなローブ

手のひらを握り、開く

オレはPC画面で激しい戦闘を楽しんでいたはずである

なのになんだ

この、自分そのものがゲームにはいつちやっただよ的な展開

「っていつか、ここ、ゲームの中なのか？それにしても見たことない土地だが」

周りを見渡す。森である。

北の森に見えなくはないが周りに生えている木の種類が全く違う

「だから知らないわよ！」

べしっ！

「さっきからいてえよ！なんで事あるごとに叩いてんだよオイ！」

「まったくどうなってるのよ……」

華麗にスルーが決まる

だがたしかに異常事態だ。

とりあえずその木に腰掛けながら意識が飛ぶ前のことを思い出す

あのあとオレら五人は北の森にあるタワーへと足を運んだ。

北の森はそこまで敵も強くなく、ほぼ無傷で進むことができた

そして塔が見え、息を吸い込み、深呼吸して中に入った

あ、まだ説明してなかったな。オレは職業魔法使い

別に何かに特化してるわけじゃない。

全ての魔法を万弁なく最強レベルまで強化している。

オールマイティってことかな？

だが何回も言うように特化してるわけじゃない

結界魔法の防御力がそこそこ強いレベルだが防御特化型のアルスと比べたら余裕で負ける

それにオレたちのPTはそれなりに廃人スペックな気もする

このゲーム内では名が結構知れ渡っている

ような気もしなくもないような気がする…

「モンスターがないわね……」

と、ここでコロネの発言に思考と中断させられた

「かえって不気味だよね」

コロネの問いにマカロニさんが笑顔で答える

……絶対不気味がってないだろ

まあたしかにおかしいな

「おばけとかでたりしてー」

と、リサがいたずらをする子供のような表情でいう

「そ、そそそそそ、そんなのいるわけないじゃない！」

「コロネ、お前もしかして怖いのか？」

あまりのわかりやすさについ意地悪をしなくなったのでした

「ち、ちがうし！こわくないし！ っていうか速く歩きなさいよ！
ばか！」

「ははは、大丈夫だよ ほら、もうすぐ頂上です」

そんな会話をしながら進んでいるといつのまにか頂上らしき場所
でた

正面に巨大な扉がある

うわー、あやしー

「なんかかいてあるよー！」

リサがはしって扉に書いてある文字を読む……

「うーん……漢字難しいな……とりあえず、てい！」

と、文字を読むのを1文字目で放棄し、扉を押す

「ってオイ！だめだろ！ていうかなにがとりあえずだよ！」

オレは我を忘れて思わず突っ込んでしまった

のだが

「うわ、眩しい！」

扉の開いた先から今日烈な輝きが放たれて、オレのツツコミはスル
ーされた。

輝きがだんだん薄くなり、光の中に誰かが立っているのが確認できる

光がきえ、中の部屋に入る。

そしてみわたす。うわっ、ひろ。

なんていうか……昔の神殿みたいな作りで若干暗いけど別に困るほどでもない

一番奥にまた扉

その扉の前に立つ一人の老人

NPCか？

「お主ら、新しい世界へ、行ってみたいか？」

……え？

目の前のNPCと思われるヤツがそんなことをいった

オレは振り向いてマカロニさんに尋ねる

「どういうことだ？」

「新しい世界……新しいダンジョンでも追加されたとかじゃない？」

「なるほど、ありえるわね」

「よくわかんないけど、いっつー！」

ほんとテキトーだなーおい

まあ新しいダンジョンか……悪くない 悪くないぜ！

オレは老人に振りかえり

「おう！行かせてくれ！」そう叫んだ

「ほう、おもしろい。ならばコイツをたおしたら連れて行ってやる。

」

老人の目の前に超巨大な魔法陣が展開される

そしてそこからでてきたのは……

体長20メートルは余裕である前足の浮いている二本だちの漆黒の龍

……20メートル!?

でっか

なるほど……こいつを討伐すればいいのか

龍と対峙する。

オレと龍の距離10メートル。

まずは様子見だな

「ゆけ!」

老人がそう叫んだ。

龍の口になにやら炎のようなものが見え隠れしている。

……ブレスか!

その瞬間、龍の口からとてつもない勢いで炎が噴射される。

とりあえず、様子見として炎体制の着いた結界を一瞬にして2重に
はり、その結界に防御力上昇の補助魔法をかける

こんだけ硬くすればビームくらいよゆう……

って

は？

おかしい

オレの結界は1枚でロケットミサイルは防ぎきるくらいの強度があるはず

なのに

一瞬にして結界が消えうせオレに直撃……

するかと思ったその瞬間

アルスがオレとブレスの間に回り込み彼の持つ盾で防ぐ

炸裂音

そして爆風

さすがアルスだ。オレの結界をも消しとばす威力をもろともせず
受け止めやがった！

アルスがこちらに腕を突き出して親指を突き出している

攻撃はまかせろ……。そういつてるように見える

つつかなにあの余裕。

「忍者スキル 影分身！」

うしろで技名コール

コロネの得意技影分身。コロネが次々と分身して10人ほどに分裂。そしてそれぞれがさまざまな方向に散らばり、クナイや巨大な手裏剣などをかまえ……一斉攻撃！

空中から、真正面から、左右からクナイや手裏剣などが集中的に浴びせられる

だがそのどれもが鱗にはじかれ傷一つ付けられていない

「うそでしょ……!!」

「うおりゃああああ」

リサが両剣を構え

龍の攻撃をよけて……

足に向かって猛烈な連続攻撃を放つ

剣が視覚では認知できない速さで動いているのか剣がかすんで見える。

龍の意識がリサに向けられた瞬間

「いでよ！魔剣ハルバード！ 攻撃上昇スキル発動！」

ゴオオオオオオオとマカロニさんを待とうオーラの濃さが跳ね上がっていき

マカロニさんの腕に巨大なハルバード

2メートルちよいあるあの剣は単体攻撃専用で、魔力を注ぐことで攻撃力が跳ね上がる

続いて技名コール「ストライクインパクト！」

ストライクインパクト。通常攻撃の10倍だっけ？とりあえずそこはかたく強い打撃攻撃のほうである。それに攻撃上昇スキルつかってるからきつと軽く尻餅くらい着くんじゃないかあの龍？

巨大なハルバードを高々と振りかぶり

龍の頭めがけて……

激突

そして二度目の炸裂音

だが今回はマカロニさんの攻撃によるものだ

そして続いて爆風

龍が衝撃に耐えきれず前足を着く

龍が立っていた場所を中心に放射線状に地面にヒビがはしり、小規模なクレータを作る

砂煙が舞い、マカロニさんが飛び下がり、コロネもリサも戻ってくる

砂煙が張れ……そこに現れた龍の頭の鱗にヒビが入っていた。

グギユウウウウウウウウ

龍がぶちぎれたとばかりの咆哮を吐きだす

なるほど、つまりあのヒビが入っている場所がいま一番もろい

そこを集中攻撃すれば……

「マカロニさん！リサ！」

「そうだね」

「おっけい！」

どうやらアイコンタクトで理解できたらしい。

しびれを切らしたように龍がものすごい速さで突進してきた

「重力魔法グラビトン！」

オレの重力魔法グラビトンは相手にかかる重力を増やし、動きを制限するというものだ

龍は攻撃主がホタリンだときずくと、固まった姿勢のままプレスを
はく

すかさずアルスが盾で防ぐ

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「範囲攻撃上昇スキル発動！」

これでマカロニ含むトリサの攻撃力が飛躍的に上昇

ついでリサの攻撃

「双剣使スキル 百烈斬！」

やく5秒間で100ちよつとの斬撃を放ち龍の頭部に命中する

よし、頭部の鱗がもうほとんどついてないうえに血が滴っている

いける！

そしてマカロニさんがハルバードを肩に担ぎ

「ジャツジメント……」

マカロニさんが技名をしゃべりながらジャンプし……

もはや鱗がはがれ血まみれの龍の頭へ

「インパクト！」

大爆発にもいた衝撃がオレの身体を虫ケラのようにふきとばす

砂煙が張れ、そこにいたのは

ハルバードを振りおろした後のようなマカロニさんと そこに立つ龍

静寂。

スウッと龍の頭から縦にラインがはしり

全身から血を吹き出しながら無数のポリゴン状となって消えていった……。

「よっしやあああ！」

「やったわ！」

「イエーーーーー！」

「あはは、かっちゃったね」

「……。」

いやー一時は死ぬかと思っただぜ

オレは皆とハイタッチしているところで、さっきの老人がきた

「なるほど……うむ、よろしい。ではむこうにある門をくぐるがい

い。」

オレたちは門をくぐりぬけた。

中の部屋はさっきの部屋のように広くなく、そこらへんの学校の教室よりちょっとせまいくらいの広さ

その部屋の中心の空中に停滞し、なおもゆらめきながら輝く光

転送ゲートみたいだな

このセカンドワールドというゲームには転生ゲートというものがあ
り、

街の中央やダンジョンのボス部屋の後などにあり、街に戻ることが
できるうえ、他の街にも行けるという

非常に便利なしろものである

でもこの転生ゲートの輝きかたハンパナーな

まぶしいって

「最初の輝きはこれね」

コロネがいう。なるほど

そしてオレ達5人は順番に光の中へと飛び込んで行った

そしてそこで意識が途切れる

回想終了

「あーなるほど、老人の言ってた新しい世界って別世界のことか？」

コロネに問う。

「やっぱりそうなるよね……」

「もう意味わかんないわよ！」

「まあ落ち着けてオイ」

グシッ

「いやだから痛いって！」

「とりあえずはやく仲間と合流しなきゃ……」

そういうわけで、適当に森をさまようホタリンとコロネであった。

私達の初日（前書き）

とりあえずこの2人から始めます

私達の初日

「あー、なんか迷ったっぽいな。オレら」

となりでのんきなことをいつてるバカはホタリン

赤髪で全体的に長く、前髪は左右に分けているが右目が隠れて見えない

最初はチャライ印象を受けたがそうでもない

まあ、どーでもいいけど。

っていつかのんきすぎるでしょ！

「もぉー疲れたわよ…。なんとかしなさい」

「できたらしてっって」

はあ…

ほんとほこイツ面白がってない？

「そついえばちあ」

「なによもつ」

どうせロクでもないことだろうと私は思った

「腹、へっつてない？」

あー、そういえば私昼飯抜いたんだっけ

「まあ、それなりに……」

「なんかさー、この森結構深いと思うんだよ。食料調達とかしたほうがいいよね？」

うわー。

なんかすごい軽いノリみたいな雰囲気であと数日かかんじゃねみたいなこといつてる……。

でも、それもそうだ。

もしかしたらそれくらいかかるかもしれない

「そうね……。どこかに食べ物……」

周りをきよろきよろしながら歩いていると草村からイノシシのようなモンスターがでてきた

なんか、気持ち悪い……

皮膚の色が紫なところがまた……これは無理ね

絶対まずそ……

「おお、うまそうなヤツ！」

え？

「え、まさかあんたアレ食べるつもり!？」

「おう ファイヤー！」

イノシシもどきが炎に包まれて

……灰と化した。

……。

「やべ火力しくった。」

「なにやってんのよ!」

ホタリンの頭を殴る

ベシッ

「ちよ、いてえって。なに？もはや癖にでもなってる?」

となりで何か言ってる気がするけど無視する

はあーもう、次出たら私がしとめよう

そんなことを思っていると2回目のエンカウント

「お、発見!」

さっきの失敗など忘れたかのようなホタリンのテンションに半ばあきれつつ

「こんどは私がやるから」

獲物にクナイを投げる

今回もイノシシのようなヤツで、おそらく頭が弱点だろう。そう思
って額を狙う。

額に吸い込まれるようにクナイが突き刺さり ドビュシヤ!という
少々むごたらしい音と血しぶきがとびちり、その場に倒れる

「うおー、こえー」

べっつ

「とりあえず、なんかもう暗いからそこから入んで寝よつぜ」

ふと空を見上げる

みあげた空はいつのまにかそろそろ夜を迎えようとしている。

すこし開けた場所に移動するホタリン

「ここら入んでいいか。」

と、いいながらさっきのイノシシを木の枝を器用に組み立てて火あ
ぶりにしながらいう

準備はやつ！

そして落ち着きすぎでしょ！

え？何？実際森で迷ったことでもあんの？

昔からだけどホタリンはマイペースすぎると思う。

「お、うまそうじゃね？塩がほしいよなー。……うお、うめえ！」

とか思考を巡らせているとホタリンがそういつつ肉をほおばるホタリン

私も食べる

「お……おいしい。」

「だろ？オレ才能あるかもしれない」

丸焼きに才能もなにもないと思うんだけど……

「てゆうかさー、オレら本当に別世界ってやつに来たのかな」

食事中にホタリンが独り言のように呟く

「わからないわよ。でも、それが一番納得できるわ」

「オレさー、実は楽しいんだ」

え？

「いやほら、むこうじゃ学校でも友達あんまりいないし、勉強もめんどくさいし、毎日帰り道にあー別世界とかいきたいなーとか思ってたさー」

なんか、意外だった。

ホタリンの性格上むこうでもエンジョイしてそうな感じだったけど

「まあオレとしては一日の楽しみがネットゲームをしてる時くらいだったんだよ。でも今はちがうだろ？こっちには親友がいるし、戦えるし、だから、今もお前といれて楽しいぜ」

なんか恥ずかしいな…

べ、別に嬉しいとか思っ
てないわよ？

「どうした？ほっぺが赤いぜ？」

「も、もとからよ！」

がしっ

「痛いっ！」

でも、それは私も似たようなものかな

わたしことコロネは中学生のころ仲間外れにされて自室に引きこもる毎日を送っていた。

毎日毎日のように自室にこもり続け、ネットゲームでひたすら敵軍を薙ぎ払い続けた。

ずっと単独狩りをしていて、レベルもプレイヤースキルも上達し、スキルも強くなっていき、まるで廃人プレイヤーのようだった。

ってというか廃人だったな私。

そんなぼっちプレイを続けていたある日、私にPT勧誘の声がかかった。

それがほたりんだった。

当時のイベントでボスが強いと聞いたが、おそらくそれだろう

私もソロでは倒せなかったのでPTすることにしたのだが、その日から毎日が楽しくなっていったのである。

「おい、どーしたばーっとして。熱でもあんのか？」

と、一人昔の記憶を懐かしんでいたら突然そんな声とともに額に手がのびてくる

「ばかっ ないわよ」

伸びてくる手を払いのける

「ああ、なら別にいいんだけどね」

そう話してるうちにだんだん意識が睡魔に支配されてくる

「あー、そろそろ眠くなってきたな」

「そうね」

「んじゃ、寝るわ。オヤスミ……」

そついい彼は上半身を木に預けた姿勢で寝てしまった。

私も寝るかな……

普通なら知らない森で布団もないのに寝るなんてできるものではないな
かったが

この時ばかりは心地よく眠ることができた。

「神様、本当によろしいのですか？あのもの達で」

「いいんじゃないよ。おぬしも映像は見たであろう？」

「ええ」

「あの龍はむこうの世界でS級に属するドラゴンじゃ。つまりトゥッ
ブクラス。大丈夫、彼らならきつとやってくれるじゃろ」

「だと、いいんですけど……」

はじまりの街（前書き）

最近、やわらかい歯ブラシ買いました。

はじまりの街

翌日、オレらはまた歩き出す。

「ねえ、あとどれくらいかかるとおもっ？」

「さあー」

んなこときかれたってねえ……

「まっすぐ歩いとけば……って、おお！」

なんか人が通るような道を発見した。

これ、街とつながってるって感じがするぜ

「これ、もしかして街までつながってたりする？」

隣にいるコロナも同じことを考えたようだ。

「そうじゃね？とりあえずこの道をまっすぐ進もう」

「……そうね」

よし、順調順調。

「今がだいたい朝9時くらいだから……」

「なんでわかんのだよ」

「オレの勘！」

「……はあ」

なんだそのあからさまにがっかりした顔は

オレの勘は結構当たるぞ？

「まあ、昼時には街に着いたほうがよくな？　メシくいたいし」

「でもお金とかはどうするの？」

あー、そうか。すっかりわすれてたぜ

「どーすっかなあ……」

金がないと飯食えないじゃん……

などと悲しんでいたらコロネが

「あれ？あれって人じゃない？」

よく見ると20人くらいの男の人達があるいている

オレ達は歩いて近づいていくことにした

ことにしたのだが……

どうやら山賊の方たちだったらしい

「動くな！」

「はいはいもーわかったからうつせーな」

「ナメてんのかゴルア！」

短気なヤツは苦手なんだよなオレ・・・

「野郎共！」

「お、おやびん！」

山賊の輪の中に2メートルはありそうな大男が入ってきた

「お前らしいもんもってそうだな。荷物を置いてけ。そしたら命は助ける」

「私達荷物なんてもってないわよ？」

「あ？ゴルア口答えしてんじゃねえゴルア早く出せゴルア！」

子分みたいなヤツが叫ぶ

そこでオレはあることに気付いた。

なんだ、メシくらい食う金 手に入るんじゃね？ってね

「あのさー、聴きたいんだけど」

「いってみろ」

おやびんさん公認である

「そつちこそ、なんか売れるものもってない？あつたら譲ってほし
いんだけどさ」

「……。」

おやびんがなんか納得したように言う

となりでコロナがこいつ何言ってるのよ！！！！とでも言いたそうな
顔をする

「どうやら殺されてエミたいだな……。野郎共！かかれえええええ
！」

そう、つまりこいつらをブツ倒して、こいつらのもってるもんなに
か奪って街で売っちゃおう的な

まあ、予想通り襲いかかってくる盗賊達

子分全員がそれぞれコンボウや剣やナイフを構え、一斉に飛びかか
ってくる。

「ちょ、どうするのよ！私こんな大人数無理！」

「いいからいいから！重力魔法グラビトン！」

ズウウウン

対象はもちろん子分。重力を3倍くらいにする

続いて……

「雷魔法サンダー！」

範囲はもちろんさつきと同じく子分たちに設定する。重力魔法で身動きが取れなくなったところで電撃魔法を浴びせてしびれさす。これで子分共はかたずいた。

「きゃ！」

短い悲鳴が聞こえる

「へっ！ 調子こいてんじゃねえよ兄ちゃん！」

いつのまにか親分がコロネの後側から抱きつく。

「動いたら命はねえぜ！」

あー。

あいつ、死んだな。

コロネは潔癖症らしく、知らない人とかに触られるのをひどく嫌う

「殺ス」

うわ切れた

「…!？」

気がついたときにはコロナはおやびんの背後に回り込んでいた

だがもう遅い

バタツ

倒れる

一瞬だなあ……。

……死んでなきやいいけど。

「なんか、ごめんな」

「え？ なにが？」

「んまあ、いいや。なんか探してくれ。一応山賊なんだからなんかもってるだろ」

「なるほどね」

そう思い一人一人のポケットやら袋をのぞかせてもらう

「あーいいのもってねえなコイツら」

「そうね……あ、ねえ、この袋なんかどお？」

そういうコロネは一人の山賊の腰についていた腰巾着をオレの渡す

じゃら という効果音になる

これはまさか……

「開けてみよう！」

「そうね。金貨とか入ってたらわざわざ売りに行かなくてもいいし
ね」

中身は予想通り数枚の金属でできたコインだった。

「よしじゃあ昼までに街にいこうぜ！」

「そうね」

と、その時今まで感電して気を失ってた子分の一人が気がついたらしい

ついでにいろいろ聞いておくか。

「おい」

「は、はいなななんでしょうか！」

「街ってどこ？」

「むむむこの方向にああ歩いて半日くくくくくくくですすすすす…
…っっていうかおやびん！」

親分にかけより

「うそだろ……おやびんが負けるなんて……」

そう眩き気絶った

あの人結構強かったのかな？

……瞬殺だったけどね

にしてもすごい早業だった。コロネだけは敵に回さないようにしよう。

「なによ……」

「いやなんでも？とりあえずあつちに歩いて半日ってことは走れば余裕だな」

そう思つてオレは自分の重力魔法グラビトンを応用して重力操作を発動し自分にかかる重力を軽くする

そして風魔法ですばやさあげる。

重力魔法は結構使い勝手がいい。オレの得意技みたいなものかな？

コロネはなににもスキルを唱えない。まあこいつは素でめっちゃ早いしな。

「じゃ、出発すつかあー」

「ちゃんと付いてきなさいよ」

そうして2人はものっそいスピードで森の小道を走るのであった。

半日つつつたからそれなりにかかると思ったがどうやら誤算だったようだ

30分でついた。

「さあーで、ついたついた」

そこには超巨大な門があり、周りは高さ30メートルほどの塀にかこまれていて勝手に入れない

そしてその門の左右に兵士の格好をしてランスと盾を装備した2人のいかにもな格好をした門番が待ち構えていた。

「すみません、中に入りたいんですけどー」

コロネの問いに対し

「見ない顔だな……まあいい、通れ。」

いいのかよ！

見ない顔っていったのにあんがいあっさりいってしまった。

門をくぐると……

「うわ、広！」

という言葉が口から洩れた。

しばらくぼーっとする

「とりあえず、店……めんどくさいから適当なところで買っか」

「まず宿じゃでしょ？ 昼ごはんも付いてそっだし」

おお、それいいかも！ ついでに寝る場所も確保できんじゃん

とりあえず宿を探すことになった。

「すみません。宿ってこれ1枚で何日くらい休めますー？」

宿屋っぽい雰囲気のものなりに豪華そうな建物のカウンターにいるおばちゃんにオレは尋ねる

「銅だったら1枚で1泊だね」

腰にかけてある腰巾着をみる

さつき数えてみたら銀が2枚で銅が2枚あったところからするとこの宿でだいたい22日分らしい

22日か……十分だな

「全額で22日分らしいぜ कोरोネー。どうする？もうここに住んじやうっ。」

「何言ってるのよバカ。仲間探しはどつするのよ！」

「んー、じゃあ一応ここ拠点に動こうぜ。この街結構広いし、いろいろそろってるだろ」

「それならまー……。」「

「じゃおばちゃん、とりあえず1週間くらい貸してくれ」

そういったあといろいろ部屋についての説明を受けた

「あいよ。105号室があんたらの部屋だ。荷物とかおいてきな」
鍵をわたされる。

階段を上がり……おお、あったあったここがオレらの拠点か

玄関を開け、短い廊下を進みリビングっぽいところにはいる。

リビング広いな。

縦横5メートルってところか

「へえ、結構いい感じの部屋ねこい」

कोरोネに同感だ。

日当たりも良く、窓から気持ちいい日差しが入ってくる。部屋の中にテーブルがあり、ベッドが4つほどついている。なんでベッドが4つも?と思ったがご家族づれとかのためにでも用意してあるんだろう。と一人で納得する。

ちなみに風呂とトイレもばっちりである。トイレが和式の水洗トイレだったことに胸をなでおろす。

洋式はなんかおちつかんのである。

ふう。

一息つく

「めしだな。」

おばちゃんいわくもうすぐ昼飯が届くとのこと。

メニュー表を渡されたが、「おまかせで!」という返事をしたのでなにがくるかわからない。でもこういうのって何が来るかわからないからワクワクするワケで

「失礼します。」

玄関をノックされたあとそんな声が届く

「うお、きた! どうぞ〜」

なんかテンションがあがるのである。

返事後、メイドさんが入ってきて、皿などを持ってきてテーブルに並べてくれる。

「では、失礼します」

運ばれてきた料理は……

黒木和牛を思い出させる分厚いステーキにサラダっぽいのが添えられてある。

うお〜うまそう。

一方コロネのほうにはサカナのフライのようなものが並べられており、白ご飯、味噌汁のようなものが並んでいる。

和食かぁ

「さて、いただきましたっす」

「いただきます」

うまい！昨日くったイノシシのあれとか比べ物にならんくらい上手い！

「おいし〜……」

コロネもそう呟く。

しばらく無言で食べ物に口を運び続けながらコロネがこんなことを

言い出した

「みんな大丈夫かなあ……………」

「それもそうだな…………。でもまあ大丈夫だと思うぜ？強さ的に」

オレ達がもともとしていたセカンドワールドというネットゲームはファンタジーな世界で剣や魔法を使って冒険するといったアクション系RPGなのである。

そしてレベル上げについてだがそれが相当マゾ仕様となっていて、レベルは最高100らしいけど69から70にするときは本気で頑張って30時間かかった。流石に死ぬかと思った。

まあ、いまのところセカンドワールドで一番レベルが高い人が92だそうだ。まあ、レベル80以上なんて数えるほどしかないんじゃない？

たしかプレイ人数が5万人とかだったはずである。そこそこ人気ゲーなんだな。

それにオレはレベル75　コロネはたしかレベル73とかいってたっけ

つまり結構すごいのである。

リサはもうちょっとでレベル65とかはしゃいでたな。マカロニさんは75。オレと一緒にである。

アルスはまだ知らない。結構長い付き合いなのだがまあともかくい

るんなどころが不明なヤツなのだ。憶測だがオレより5くらい上なんじゃないかと思う。

それにレベルとは別にスキルレベルというものがあり、たとえばマカロニさんが使うストライクインパクトはレベル83。使えば使うほどレベルが上がっていく感じである。

そしてオレらPTはそれなりに有名だ。アルスに関しては知らないもののほうが少ないんじゃないだろうか。

なんせほぼすべてのステータスポイントを防御にふっており、HPもありえないレベルまであるらしく、どんなに強いボス戦でもHPが7割を下回ったことはないらしい。さすが世界^{アルス}の境界線^{ライン}。

つまるところ、オレ達全員上級者なので戦闘能力的な意味では心配ないだろう。

「強さ的に・・・ねえ。まあみんな問題なく強いのは知ってるけど、私はリサが心配なのよ」

あーなるほど。それには同感だ。

なんたつてあいつは幼い。

最初あったとき小学生かと思ったけど一応中学生らしい

変なおじさんとかに誘拐とかされないだろうか。

「まあ、マカロニさんかアルスと一緒にいてくれたら大丈夫じゃね
？」

「そうだけど……」

「とりあえず、自分達の心配だな。これから買い物いこうと思うんだが一緒にいこうぜ」

オレの誘いに

「そうね」

と、短い返事

銀貨1枚だして銅貨が3枚帰ってきたのでいま現在銀貨1枚銅貨5枚である

そういうわけで、買い物のために街を回ることにしよつと思つ。

56

「はあゝあ」

あくびがでる

「おい、まじめにしろよ」

門の反対側に立っている門番係りの上司のジエイドさんに注意される

「そんなこといったってですよー。暇なんですよ。こんなとこくるわけないじゃないですか。例のヤツ」

例のヤツとは最近噂になっている全身鎧に包まれた鎧の剣士のことである。

聞く限りどんな攻撃も通用しないとか。

まあとりあえず不気味だからそんなヤツみつけたら報告しろだと。

「ガタガタうるせーな。門番つーのはそんなもんなんだよ。文句垂れるようじゃこの仕事はやってけねーぞ」

門番なんて立ってるだけで楽かと思ってたんだけど

立ってるだけってのも大変だなあ

はじまりの街（後書き）

和式っていいですね。

街でぶらぶら（前書き）

街の名前とか背景をそんなに書いてなかったんでいろいろ書いてみました。

街でぶらぶら

とりあえず街を探索することになった。

「うおー人が多いー。うお！」

となりでホタリンがなぜかハイテンションである。

つていうか、アレ？ あいつどこいった？

と、思ったら右側に見える店で

「おっちゃんそれ何円？ まじうまそー」

よだれが垂れそうなアホッ面で店員のおっちゃんとしゃべってた。

……迷子になっても知らないんだから

「円？2つで銅1枚だけ。まいど！」

「センキューー！コロネ、うまそーだぜこれー」

私の心配なんか気にもとめてないような雰囲気ですっちに歩いてくる

まあ、当然といえば当然か……

「んー？ ふおーふいふあ？」

隣でホットドックみたいなのをくわえながら「んー？ どうした

？」「と聴いてくる

っていつかなんでわかったわたし。

「いや、別に？ それにしても人が多すぎるわね……店も無駄に多いし。なにかイベントでもあるんじゃない？」

「ふぁー、あうほごー」（あー、なるほどー）

っていつか食べ終わってからしゃべりなさいよ！

「……ん……んあ、やっと食い終わった。はい」

そう言われて、さっきのホットドックっぽいのを貰う。

結構おいしい……

礼を言わないとね。別に嬉しかったとかじゃなくて、いやもちろんうれしかったけど礼儀としてね？

「あ、ありが……」

途中まで逝ったところで気づいた。あれ？

あたりを見回す。

どこいったアイツ！後で絶対叩く！

と、思ったらこんどは道の横についてあるベンチで暇そうにタバコにみえる棒をくわえながら新聞を読んでいるおじさんとしやべって

いた。

「まったく、ちょっとはひとみしりしなさいよ」

「あのさー、聞きたいんだけどさーおっさん」

「ああ？なんだいポーズ」

「今日なんか、イベントでもあんのか？」

「あー、さっそく聞きたくなっただってわけね。」

「なにこの無駄な行動力。」

「おいおい冗談だろうポーズ。あんた知らねーってのかい？明日はここでこの前召喚された勇者様が出発するんだろっが。ほら、ここにもでかどかどか書いてある」

「そっついおじさんが新聞も持ち上げてホタリンに見せる。」

「なんか、貴重な情報そうだ。とりあえずホタリンの所へいこう。」

「なんの話してんのよ！勝手にいなくなっただけ」

「ベコッ」

「まあ最初から聞こえてたけど、めんどろなので途中から来ましたよ。的な展開に持ち込む」

「まーいいじゃんいいじゃん。てゆーかみてみるよこの記事。」

そこにはでかかど『二代目の勇者降臨!!!』と、書いてある。
なになに……1か月前魔王を倒すために召喚された勇者様がついに
出発!ということでアルデート国で出発式があるもよう。

ここってアルデート国っていつのか。

「おっと、彼女かい？ポーズ。おじさんうらやましいぜ」

「ちょ、ちがいます！ そんなんじゃないですまだ！」

「まだ……ねえ」

ニヤリ……と笑うおじさん。あーなんか腹立ってきたー。殴っていい？ 殴っていいよね

「いや、落ち着けてまじ。こわいよ」

ホタリンに注意された。あれ？わたしって結構表にでちゃうタイプなのかな？

「まあー、おじさんいろいろ教えてくれてセンキューな！」

「元気でなー」

別れを告げて、ふたたびぶらぶら。

ってゆーかここほんとに広いわね……こいつ迷子にならないように気をつけないと

……つてどこのお母さんよわたしは

それから何時間が歩いていたらギルドという文字が書かれた看板が立っている大きい木造建築を発見した（日本語でギルドとかかいていたわけじゃないけどなんとなくそう読めた。通訳機能でもついているのかもしれない）ので入ってみることにする。

中はちょっと、いや酒やら汗やらいろいろな臭いが混じっていて変わった臭いがした。

テーブルや椅子が並び武装したむさくるしい人たちがまっ昼間からお酒を飲んでいる。

文字通りギルドってことね。あのクエストとかつけられるような

とりあえずどーするのかホタリンにきいてみ……ようと思って横を見たらすでに彼は私の隣にはいなかった。

あーもう、うるちよろしすぎでしょ

「なあーお姉さんここってギルドでしょ？クエストとかつける的な」

……。

……敬語ぐらい使いなさいよ！

「はい、ここで未登録の方は登録して、すでにご登録しているお客様はむこう側にあるクエストボードに張ってある紙をこちらに持ってきてクエストを受託します。ご登録なさいますか？」

「うんするするー、こっちの人と一緒に」

「かしこまりました。ではこちらの紙にご記入ください」

そついい紙を渡されたので、二人して書く。

名前はー……ころね

得意武器が……なんだろう。一応ナイフってことで

出身地？どうしよう、わたし達アルデートしか知らない。

「ねえ……出身地どうしたの？」

「ああ、適当で良いだろう。すんごい田舎で昔ほろびたとかいって
け」

うわー、テキトーすぎる。

まあ、いまのところそのてを使うしかない

そつ思い、私はテキトーに思いついたアルゼンチンと書いた。

「あの一、書けましたー。」

そつ言つとさっきの女の人が紙を受け取り……困った顔をする。

「あの一、すいません。なんて読めばー……」

そこで私は気づいた。

文字は読めるけど書けない！

「いや、すいません私遠い国で育ったものでまだこっちの言葉は書けなくて……」

と、とつさに思いついた嘘をいい、女の人に言葉で伝えて書いてもらおう。

ホタリンは隣で何やらゴソゴソしている。

っていつか紙白紙のままじゃん！

「ちょっと、何やってるのよ……！」

と、聞こえるか聞こえないかくらいの音量で聞く

「いいからいいから……よし」

何かの準備が整ったかのような返事をされる

「オレ、この前手をケガしちゃって……書けないんすわ。書いてもらえますー？」

そついうホタリンの右腕にはいつの間にか包帯が巻かれていた。

なるほど……

こついうときだけ無駄に頭がキレるところは素直に尊敬するわ

「かしこまりました。まずはギルドについての説明をさせていただきます。ギルドにはF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、という段階に分かれています。いまはお客様が一番低いF級からのスタートになります。ランクが高ければ高いほど強いモンスター討伐や入手困難な素材収集と難しくなりますが、報酬もそれに合わせて高く設定してもらっていますし、普段達いることのできない禁止区域にも入れるようになります。次に上げ方についての説明ですが、1つ上のランクを10回クリアできれば1つ上、2つ上のランクを5回クリアできれば1つ飛んで2つ上、3つ上を1回クリアすればさらに1つ飛んで3つ上のランクに上がることができます。どこかわからない場所などおありでしょうか？」

と、女の人が淡々と述べる。

別にわからない点は無かった。きっとこの人の説明が上手いからだろうか。

隣を見る。

……。

「あ、ああ悪いやなに謝ってんだオレ。ん？あ、いや何でもないよ？別に。え？説明終わった？わかんないところは別になかったぜ？ほんとほんとありがとう！」

絶対寝てたな。

「そうですね。それでは説明は異常となります。では、私はこれで。」

そういい、カウンターの奥へ消えて逝った。

「あんた、寝てたでしょ？」

「ああ、ほんのちょっとな。ちょっとだけだよ？ まじ。F級からスタートなんだろう？ 余裕余裕」

いやそこ始めのほうだし。

うん、こいつ始まってすぐ寝たな。

「はあ……わかんないところはわたしが宿で教えるから。いい？」

「ああ……なんかわるい」

なんか ってなんだろう。

あー、なんか日も暮れてきたな。夜ごはんもそろそろ運ばれてきそうだし帰るとするかなー

「そろそろ、暗くなっただし、帰ろうぜー。あー腹へった」

「あんた昼あんだだけだべた上に間食もしてたじゃない。」

「そーゆーお年頃なのさッ」

はあー、まあいいや

そういえばコイツ何歳なんだろう。

性格的に16歳くらい？

とりあえず、わたしと同じ年齢という設定にし、勝手に納得する。

さてと、帰ろうか。

そう心の中で呟き、帰ることにした。

帰るときはちょうど夕日が沈み始めるところで、レンガ作りや木造の家がいい感じに赤く染まり、非常に綺麗だった。そういえばこの街って中世ヨーロッパみたいな感じだなあ。

あたりを見回す。

街の北側にはかなり大規模な城が立っている。大きさはというと東京ドーム1個分くらいあるんじゃないかと思う。まあ東京ドームなんて見たことないけどさ？

あー、なんか綺麗だな

なぜか懐かしさに似た感情が湧きあがってくる

「あー綺麗だな」

となりでホタリンが言う。ホタリンもわたしと同じところをかんがえていたらしい

「あの人」

うん、前言撤回。

バシッ

「いってえ何すんだよいきなり！」

「べ、別に？ ほら、もう宿見えてきたわよ」

「お、おう……」

頭をさすりながら返事をする。

改めてみるとこの宿屋、大きい。

それに今気づいたけど二階建てらしい。それに木製だ。煙突から煙が立っているのはあそこらへんに料理する厨房らしきものがあるからだろう。

昨日来たばかりだというのに、すでに自分の家のようになじんでいた。

その後夕飯を食べ、布団につく。

はあー、今日も疲れたし早めに寝よう。

つてことで早めにお風呂に入ってベッドでゴロゴロしていると

「お前もつ寝るのか、まあ今日は結構動いたし、オレも眠たいんだけどね」

ほたりんもとなりのベッドに入る。

静寂

だが、いまのコロネにとってはそれが心地よかった。

「あー……」

起きあがる。

ねむれねえええええええええええええええええええええええええ

疲れたのに眠れないってよくあるよね え、ない？ あそつ、すま
ん。

横をみる。

寝てやがる。 まあ当然か

いつもなんかツンツンしてるけど、寝顔結構かわいいじゃん

さあーて、と

外にでる。

この宿屋にはめっちゃ広い！とまでは言わないが普通 よりは広い
くらいの庭がある

んなどこでなにすんだよオイって？ ツチツチツチ それは実験さ！

……誰にしゃべってるんだか

とりあえず結界魔法を発動させる。

この魔法は薄っぺらいけど硬い魔法でできた壁を作ることができる

それをどうにかして形をかえて腕を包むようにさせる。

そして地面を殴る。 てい！

痛くない！ っていうかなんか地面が割れてるし

次にグラビトンを発動する

重力が発生するのは目の前。それを結構の出力度合いでする

するとオレの体は吹っ飛ばされたように吸い寄せられる

やはりな……

ゲームの中じゃただの防御魔法としてしか役割は無かった。重力魔法だって相手の移動速度を少し下げることくらいしか使い道がなかったはずだ。こっちに来てから使い方の応用が利きやすくなってやらあ。

ということとは……。

その後、いろいろやってたら朝になった。

「ふむ、今後の戦闘が楽しみだ」

だがホタリンは眠くなるどころかテンションが上がっていたのだっ
た。

世界について（前書き）

徹夜明けってなんか頭がまわらないですね。

世界について

あー……

眠い……眠すぎるぜ！ うおおおおお

やば、おかしくなってきたやつた テヘッ

現在昼くらい

だったっけ？

知らんわ！ 太陽がでてれば昼なんだよ！ え、そうなの！？
そ
うかも！

「あ、あんた目の下のクマがすごいけど、何してたの？昨日」

「いやあ、魔法がやばくって、テンションが上がったのさ。7秒ほど」

「え、魔法がやばいってなに？ しかもテンションが7秒上がった？
っていうかほんとに大丈夫？」

あー、あごひげがせつない……

自分のアゴをさする

……！

「あごひげが生えてねえ!!!」

「あんたちよつと大丈夫？ 寝てきなさいよ！ 勇者様の出発式とか面白そうだから見ようぜとか言ってたけどそれじゃー無理でしょ？」

「え？まじでー。なんか感動……」

つていうか眠い！ 眠すぎる！ だがそこがいい！ え、いいのかわよ！ いいんだよ

「どこに感動する要素があるのよ！とりあえず始まるのは昼4時からいっほいしそれまで寝ときなさい！」

なんか……目の前にモヤがかかっている……

「……。」

そのモヤがだんだんと人型になっていき

「……どうしたのよ、目の焦点あってないわよ？」

これは…2年前に死んだ……

「おばあちゃん!？」

「誰がおばあちゃんよ!！」

ガッン！

なんかわかんないけどひどい頭痛で意識を失った。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

今、街中でぶっ倒れたホタリンを引きずってベッドに寝かせたところである

まったく意味がわからないわ

なんかいつてることが支離滅裂でしゃべってる途中も目の焦点があつてなかったような

つていうかなによ！ 誰がばあちゃんなのよ！ 失礼しちゃうわね！

腹いせにベッドの下のシーツを和室っぽい部屋の床に引いてあったタタミにすり替えてやったわ。 はは、目が覚めたときに顔にタタミのあとを思っ存分つけるがいいわ！ あははははは！

はぁ……

私も、寝たほうがいいだろうか。

とりあえず部屋で武器や装備の手入れでもしようかな。

「武装解除」

ジュイーン

一瞬光のエフェクトが発生して消える。 中身はインナーである。
なんかあの、タイツみたいな

あとから気づいたけど、装備品はすべて名前を呼べば装着できて、
はずすときは「武装解除」っていえば消える。そこらへんはゲーム
と同じである。

どんな装備にも付属している袋。

これが便利だ。今までのゲーム上のシステムでは50種類収納でき
1種類につき999こまで持ち運び可能だったのだがまさかこの袋
にもそんな感じになっているのだろうか。

だったとしたら助かる。おまけに小さいから邪魔にならないし

そんなことを考えながら手入れをしていたら案外すぐ終わってしま
った。

さて、なにしようかな

うーん……

迷った結果ギルドにでもいっているいろいろ情報を集めようということ
になった。

こんなに大きな街ってことは結構栄えている証拠だ

ならばそこに立っているギルドなんて設備も他の街よりしっかりし
てるはずだし、お城があることから情報とか豊富そうだ。

まあ、ほかの街なんて知らないけど道をあるく。

昨日ホタリンと歩いていたから家の周りはいたい歩けるようになってる。

そこでみつけたギルドに入る。

だが意外にもガランとしていた。

「どういたしました？ お客様」

左ななめ前のカウンターから昨日お世話になった受付嬢がこちらを心配そうなかおをしている。

よくみると青い髪で青い目のどっちかという綺麗な顔立ちをしている。なかなか美人である。

「あの一……？」

しまった、見つめていたようだ。

「あー、すみません。 っていうかなんでこんな人いないんですか？ 酒とかで盛り上がってるかと思ってたんですけど」

そう、つまりあのむさくるしい人たちなら結構クエストとかやっつけているんなとこにいきそうだからと思っでそこを狙ってきたんだけど、どっつやらそれは無理っばい

「あー、それはですね。昨日みんな勇者様を見にいくとかいって盛り上がってましたし、民衆にでもまぎれてると思います。なにか、お困りでしょうか？」

おお、鋭い。いまこの人しかいないし説明も昨日で聞き取りやすかったのでこの人に頼むことにする

「あー、わたし文字が書けないことからわかっているとありますがかなりの田舎ものなんです。この鎧は母の形見でー。それで、いろいろ世界について知りたいから聞きに来たんですけどー……」

なんで母の形見って嘘言っただけか？

だってこの装備外見的にすごい立派なんだもん

田舎者って言ったって説得力にかけちゃうじゃない

「そうですか。私でよければ説明しますよ。今お客様もいないですし」

「あ、すいませんお願いします！」

ああ、なんていい人なんだろう

さっき嘘ついたことに罪悪感を感じてくるじゃない

それからわたしはこの人にいろいろなことを教えてもらった。

それをまとめてみると、こうなった

この街は北国アルデート

絶対王制で、武力もかなりある

それでおおまかにあと3つの国があり

魔法が主に栄えている自由な西国ウイステラス

独自の文化を築きあげ、おもにカタナという剣を使い手とする剣士が多い東国ジャッパーン

平和を愛する南国ハイワード

それぞれそこそこ独立してるし交流もあまりないからそれ以上はあまりわかりませんとのこと。

そして戦闘については、気と魔力が全てらしい。気はおもに剣士や接近戦が筋力強化などにつかったりするっぽい。魔力はそのまま魔法であるがうちのバカが使う魔法とはちよつと違った。まず決められた呪文を唱える。それで頭の中で魔法陣をイメージすることによって魔法陣が発生。それでやつと打てる。かなりの上級魔法使いは無詠唱で魔法を発動できるらしい。じゃーうちのバカって魔術師として結構強いほうなのかあ

あとこの世界には天界と魔界が存在するらしく、天界は神様が、魔界では魔王が統一している。天界はあまりこつちの人間界に干渉してこないけど魔界はその限りではなく。たまに魔物を送り込んできたり街を潰そうとして滅ぼそうとしているかららしい。なんでそんなことをするのかというと魔王はこの世界を支配したいらしい。世界征服……ぷっ 子供みたいね

ちなみにその魔物の群れとかクエストの対象になるらしい。

ギルドというのはかなり昔できた制度らしく、金と引き替えに依頼をこなしてもらおう。これではただの便利屋だが、仕事をこなしていくうちに強くなっていった冒険者は国から依頼されたクエストなどを受けることができる。依頼主が依頼主だけに金額ははんぱない金額な上、国のほうも助かるというワケで結構できた制度だなあと一人で納得。

まあ、そんな感じだった。

「ありがとうございますましたほんと助かりました！」

深々とお礼をする。だってめっちゃわかりやすかったんだもん

「いえいえ、私のほうも暇でしたので。べ、別にお礼なんて……あの、また気が向いたらいらしてくださいね」

「はい、絶対きますね！」

そついい、ギルドを後にする。

空を見上げる

結構長い間ここにいたようだ。あいつも起きてるかもしれないし戻ろうかな

そうして宿屋の自分の部屋まで歩いて帰る。

何時くらいだろう今。

お城のほうを見る。

なんかお城から街の外までつながっている大通りの両側に人が張り付くように集まっているのが見えた

なるほど、そろそろご登場ということか

勇者って召喚されたのよね。 ってことは日本から来たとか……いや、ありえないか。世界なんて無数にありそうだし

そんなことを考えているうちに家に帰りつく。

……。

まだ寝てるし！

いつまでねてんのよ。

ジー……とホタリンの顔を覗き込む。 気持よさそうに寝息を立てている

そして、いきなりホタリンの目が開かれた

「う、うわぁー！」

びっくりしたー！ いきなりおきんなっつーの！

「ん？どうしたんだ？コロナ。そんなエロ本を読んできるところを親

に見つかったときみたいな顔をして。　　ってあれ？　なんでオレ寝てるんだ？　たしかに外に出たはず……」

なにそのたとえ！　意味わかんないし！

「覚えてないの！？　あんたすごかったんだからねッ！」

「え、何が？」

マジで覚えてないのかしらこいつ

まあ、いいや

説明するのもめんどーなのである

「てかいま何時くらい？」

窓から空を見る。

「うーん　3時くらいじゃない？」

「そろそろじゃねー？　出ようぜ外」

外に出ると、街の人数もかなり増えていてかなり歩きづらい

そんなときお城の前の大きな門が大きな音を立てて開き……　大きな声が聞こえる

「みなさん！これより勇者様の出発式を始めたいと思います！勇者様、とその仲間達の出発する歴史に残る日です！どうぞ盛大な拍手

を!！」

民衆がファーッと盛り上がり拍手喝さい

「うるせー、ちょっと人少ないところからみようぜ」

「そつね、ここじゃよくみえないわ。 でどこで見える気?」

そつ、この街はほとんど1〜2階建であり見渡せる場所はお城くらいなのである

「まかせろ」

そついうと彼はなにやら呪文を唱えだす。

「魔法障壁!」

するといつもは板のような形状なのに今回は四角い感じになっている
徹夜で魔法がやばいとか意味わかんないこと言ってたけど、練習で
もしてたのかな?

で、どつしろと?

「この上に乗るんだよつ」と

彼につられて上のほうにのる。 ……そして

「うおりゃああああ!」

正方形だった形の魔法障壁が縦に長く伸びていき、たちまち柱のようになっただ

周りから見ればなんか2人が10メートルくらいの空中に立ってるように見える

「っすごー！」

「どっやったの？ あんたいままでそんな使い方できてなかったでしょ」

「それがさ。こつちの世界きて応用しやすくなっただ。ってゆーか隠密使ってくれね？ 今のままじゃ変に目立つしだ」

「そっね」

隠密……とは、私が使う忍者スキルのうちの1つで自分の気配をものすごく薄くすることによって気づかれにくくなるのである。

っていうかこれわたししか効果ないじゃん

「あんたはどうすんのよ」

「オレ？ オレはこっするぞ」

そっいい唱えだす

「幻影魔法イリュージョン！」

もわーん という風にホタリンの姿が変形し……

「うーんそうだな……あ、あれでいいや」

遠くに飛んでいるワシのようなカラスのような鳥を指差し

「チェンジ！」

と、唱えると……ホタリンが鳥になった！！！！

「あんたそんなこともできんの!?!」

「この幻影魔法はプレイヤーvsプレイヤー戦でしか使わないから知らないよな。これはたとえばファイヤーボールを投げたとしてそれが相手には揺れて飛んでくるように見えるとかいう、まあ五感のうち視覚を惑わす魔法なんだが、こっちはすげえよなまったく、オレはまったくよ？」

なんていうか、うん　すごいと思う……

幻影魔法で変身しようという考えがまず普通じゃないけど

コイツ実は頭がいいのかもしれない。

という大変失礼なことを考えていたのだが民衆が盛大の盛り上がりだしたので思考を放棄し、勇者のほうを見た。

世界について（後書き）

ちょっと世界について説明いれてみました。

ほかにわからない場所や説明してほしい場所がありましたら言っ
てくださいね

勇者について（前書き）

作者が暇すぎたので1日に2話目を投稿

そしてそろそろ他の人たちの話もかいてあげたいなーなんて

勇者について

ふむ、次はどこへいこうかな

僕はマカロニ

この前こっちの世界に落とされたみたいなんだよね

僕的にはこういう展開嫌いじゃないし、前あるネット小説ページに登録してちょうどこんな感じの物語を書いたこともある。

そしてここは西国ウイステラスのとある宿屋で状況整理。

最初の1日で武器や周りの街並みから文明の発達度を調べてみたけど、中世ヨーロッパ的な印象だ。けどどうしても水洗トイレがあることだけは理解できなかった。

これは昔日本人が転生してきて文化を流した とでも考えるのが普通だよな

そして、このウイステラスは魔法が大変栄えている国であり、魔法の使えない僕はかなり珍しい存在だったらしくなにかと目立った。

あんまり目立つのは好きじゃないんだけどね

んで、ここじゃ目立つし、仲間も見つからないようだから他の街に引っ越そうと思っているところなのである

ギルドのクエストでモンスターの群れを一掃したらかなりお金がもらえたのでそこらへんの街の地図とか買って見たのだ。かなりの額

になるかと思ったが幸いこの世界には大きな国は4つしかないらしい。

うーん どうしよう

東国ジャッパーンはそこそこ田舎という情報を持っている。昔の日本みたいに田んぼとかあるのかなーとか勝手に印象を決めつける。

南国ハイワードは平和を愛する街とか聞いている。ここでもいいのだが、僕はこの前興味深い話を聞いた

うーむ

と悩んでいるところ

「北国アルデートが召喚魔法で勇者を召喚されたんだって！」

「いや、知らなかったのかよ！」

「悪いか！　しかしあの国も無茶するよなー」

という声が耳に入る。

勇者召喚？　そして無茶？　勇者召喚するのになんかデメリットでもあるのだろうか。

「こんにちは、すみませんがその話僕にも聞かせてくれますか？」

「おう、いいぜ。　北国アルデートにこの前勇者達が召喚されたのね。」

「え？ この前なの？」

さっきつっこまれてたほうが聞く

「ちょっとだまってる。お前がいると説明の邪魔になる」

つっこまれた青年が「わるい……」とブルーな感情を垂れ流しながら返事する

つていつか今さっき勇者『達』つて……

「てことは複数召喚されたつてことかい？」

「ああ、そのとおりだ。なんか知らないけど召喚魔法が暴発して、1人の予定が5人召喚されたらしいぜ」

暴発……

巻き込まれた人に心の中で「どんまい。」と言う

つていつかなにやってんだ アルデート。

そしてなんでそんな暴発するような国にまかせたんだ？

つて思ったから聞いてみる

「でもなんで召喚したのが他の国でもなくアルデートなんですか？」

「なんかな、召喚するための魔法陣はアルデートのごく一部の人し

か知らないらしい。1代目の勇者もアルデートで召喚されてるんだぜ」

「へえ、貴重な情報ありがとう。いろいろためになったよ。またどこかで」

「ああ、そっちな」

彼らに礼を告げ、僕は再び地図を見つめる。

北国アルデート……ここから南国ハイワードと同じくらいの道か。まあこの際南国ハイワードに行くより北国アルデートにいったほうが何かありそうだ。

勇者召喚に興味を持ってホタリンあたりがいそうだし。

よし、決定だね

そう言っ僕はアルデートに向かって歩き出す。

脚に気をまとわせる。これでかなり早く動けるはずだ。

地図を持っているのでショートカットで一直線に進んでいた。正直10分でつくと思っていたがなんか1時間もかかっていた。

この地図、距離感おかしいのかもしれない。まあ買った店が店だったしなあ……

店を思い出す。

路上の横で布を地面に広げて、フリーマーケットみたいな感じで布の上に正座して物を置いていた

宝の地図　とか　死ぬまで生きられる壺　とか。

とりあえずついたことだけでもいいでしょう。

さて、門をくぐる

中に入ると、ウイステラスと人口密度がまるで違う。

当然か。　出発式真近だし

続いて周りの人の服装など

なるほど。　文明はウイステラスとあんまり変わらない。

人の服装的に魔法使いとか戦士とか私服の人達が入り混じっていて自分のこの白い感じの服装でも目立たなそうので安心する

とりあえず街並みを見る。

続いて地図を眺め、何度か視線を街と地図の間を往復させる

買った店的にあまり信用できるものじゃないけど、一応さっきだつて街に着いたし、他に頼れる地図もないからしかたがない。

ここがここだとするとあれがここで……うむ

まっすぐいったところが宿屋か。

多すぎる人ごみを避けながら、宿屋を目指す。

人ごみはあまり好きになれないかな。っていうか好きな人のほうが珍しいよね

数分歩いていると宿に着く。

地図的には走って1時間書いてあるんだけどなー……

この地図、距離はめちゃくちゃだけど位置はだいたいあってるみたいだ

地図によると2階建てで木造な感じがいい感じで煙突がカッチョイイ宿屋なんだぜ！という説明が書いてある

なんだこのノリ感。嫌いじゃない

すると木造で2階建ての煙突が印象的な宿屋が見える。

煙はでていない。ご飯とかも作る時間帯じゃないからあたりまえだろう

カッチョイイかどうかは……

……。

中に入るとまず右側にカウンターのようなものがあり左側はちょっとした空間になっていてなんかロビーみたいだなと思った。

「あらいらっしやい」

カウンターからおばちゃんに話しかけられる

「どうもです、ここに泊まりたいんですけど、1日でだいたいどれくらいです?」

「1日銅1枚だよ」

ヤケに安いな……部屋とか結構ぼろいのかな?

ていうかそんな値段で赤字にならないのだろうか

「なんだい、泊まるか泊まらないかはつきりしな」

僕の思考はおばちゃんによって中断される。あまりの安さに固まってしまっていたようだ。

「すみません、泊まります。っていうかお安いですね」

「ああ、安さだけがうちの売りだからね」

その後部屋についての説明を聞く。

鍵を渡される。

「あなたの部屋は104号室だよ」

「ありがとうございます」

えつとこの廊下の向こう側がえーと……ああ、ここが
中に入ってみる。

まずは廊下。なかなか綺麗である。

進んだら広いリビングに出た。日当たりがいらしく窓からいい感
じに日の光がさしこんでくる。

安さだけがとりえって言ったからボロいかと思ったけど全然大丈
夫じゃないか

そしてベッドが4つ。

なんで4つ？ と思ったがここは城下町。クエストで疲れた戦士達
もここに泊まるのだろう。

よく見たら武器立てなんかもあるし。

そして床はフローリング。

なんか小部屋があるから開けてみたらなかは和室だった

ってタタミ！？

なんかいろいろなところに和風な感じがあって和むのである。

やっぱり和風が一番じゃね？

今日も、疲れた。

別に移動しただけなんだけどね

そう思い窓から外を見る。

1階だから景色は微妙だった。

っていつか見える風景は広いとはいえないような広さの微妙な庭のみだ。

眺めるものっていうと……特にない。

しいていうなればてんと咲いている花の蜜を吸っている蝶を狙っているカマキリのような格好をしている虫のくらいである

それになんか結構空が暗くなっている

そのとき

「失礼します」

そういい、メイドのような服装をした女性がはいつてきた

そういえば夕飯時に食べ物届けるとか言ってたけど、それかな？
メニュー聞かれたからヘルシーなやつでお願いします っていつといた。僕はあんまり肉とか食べないんだよね。

とどいたのは食パンっぽいの（なんか五角形だった）と青いジャムみたいなやつが入っている容器と、サラダだった。

ヘルシーがいったっていったけど、これ朝食だよな？

10分ほどで食べ終わる

あー、食った気しねー

今日はもう寝ようかな……。

そう決意し、なんとなく早めに寝ようとした僕であった

はぁ……

なんかあんまり眠れなかった……。

なんか物音が聞こえたから窓から顔を出して覗いてみた結果

何者かが地面を殴ったり突然前に吹っ飛んだりしていた

暗くて顔が見えなかったけどとりあえず危ない人には近づかないのが一番である。

結局朝まで続いていたから僕が寝たのは朝だ。

よし、こんどこそ寝る。

勇者の出発式に寝過ごさないだろうか。とも思ったが民衆の騒ぎ声でどうせ起こされるだろう

まあ今もすでにうるさいんだけどさ

だが、どっかの変人のせいではほとんど徹夜となってしまうたマカロニは周りの民衆の声なんて気にもならなかった。

勇者について（後書き）

次回は戦闘回にしたいなーとか思ってみたり

波乱の出發式（前書き）

12月24日誤字発見致しましたので修正しておきました！。

波乱の出発式

「ふむ、もうすぐだな。魔物の数はどうだ？」

望遠鏡を見たままそう命令する

「はい、こちら準備OKです」

「うむ。流し込む場所間違えるなよ？」

あと少し……あと少しだ……！

「うむ、勇者殿。先代の勇者に恥じぬよう頑張ってくるんじゃぞ」

「ああ……。」

国王にそんなことを言われる

今日は出発式、魔王を倒しに行くためのな

……どうしてこうなった！

思いです

あー、なんかよくわからんがデート場所に彼女がなかなか来ないから待ってたら上から変な光線を食らった。UFO!?

かと思ったがちがうらしい。気が付いたら見たこともない場所이었다。というかどこだここ、ダ マ神殿？ そして周りには数名の魔術師らしき格好をしたものたちとじいさん1人

そして最初に聞いた言葉はというと……

「ようこそ、我が世界の救世主、勇者様。」

「は？」

ちょっと待て、この目の前のじいじいと言うことからしてオレは世界を救う勇者様。つまり召喚されたってことか。いや、まて落ち着くんだオレおかしいこれは夢だ。

「なあ、殴ってくれ」

「ぶんっ！」

一瞬にして視界が暗転する

ってかいまこのじいじい躊躇なく殴ったよな！ キれるよ！？ 俺キレちゃうよ！？

っーか痛えよ。やっぱり夢じゃねえのな。はあーもうめんどくせええええ

なんでおれやねん！

オレは生涯平和に生きるって誓ったのに！ 誰につて？お母さんにだ！ 今意外だとか言った奴でてこい！ぶん殴ってやらあ！

「おいこの野郎、元の世界に返しやがれっ!」

オレの問いに対して

「んなら魔王の首でも取って来い。元の世界に戻るにはそれがないと無理なんだってマジで」

あれ?こいつさっきまで敬語じゃなかった?なんでいきなりタメなの?ってというか魔王?なにそれおいしいの?ってというか

「どうしても倒さないとだめ?」

「うむ。」

オレにそれ以外の選択肢は無いらしい。

「大丈夫。お前みたいなのがあと4人くらいいるから」

はいまたきたタメ口! ってというか他にも召喚されたヤツいるのかよ!

それから1カ月後に出発するからそれまでに特訓しておけとのこと。

はい回想終わり。

ったくめっちゃ理不尽じゃん? オレかわいそうすぎる。っていうかだるっ

よし、早いところ魔王倒しちゃって帰ろうそして平和な日本に帰っ

てのんびり暮らそう。

そうしてオレはあいた門の真ん中にたち、静かに歩く

周りの民衆が「勇者様!」「魔王倒してください勇者様!」「きゃーかつこいい!」などと口々に叫んでいる。うるさい。うるさい。うるさい。てまじ鼓膜破れたら慰謝料払えよ?

そして半ば途中まで歩いたところになにか鋭い気配を感じた。

「どうしたの?ケンジ」

うしろで不思議そうな顔をしているアリアに聞かれた。

アリアの他に魔法使いラング、刀使いムラサメと魔物使い(ピーストテイマー)リリカがオレの仲間として一緒に行動している。

こいつらも全員別世界から召喚されたとか。

召喚されすぎじゃね? この世界。つーか自分の世界の問題くらい自分の世界で解決しろし!

まあそれはともかく、お互い理不尽にも召喚されたもの同士、話もあうし、こつちの世界で唯一楽しい時間を過ごせる仲間達だった。オレにとって心の支え的なもんだな

「ねえ、きいてる?」

「ああ、わりい。むこう側に何か感じるんだよ。ほら、ちよつどあそこらへん」

前方を指差す

次の瞬間、その空間が裂けた。

は？ いや自分でいっててなんだが、なんだそりゃ

だがたしかに避けている。まるで口のように。

その口がどんどん広がっていく。につれて中から膨大な魔力を感じる。なにか、魔物の群れがこっちに突進しているような感覚が…。

「おい……くるぞ！」

空間の口が大きくなり大きくなり……やっと成長が止まる

直径100メートルほどの円状の口。中身は真っ黒くて見えない。不気味だ。

次の瞬間……恐ろしい数の魔物がなだれ込んできた。

は？ちょっとまてよ

「ケンジ！」

気づいた時には魔物の群れに突っ込んでいた。

このままじゃ周りの民衆が巻き込まれて死ぬ。オレはこの世界のことはどうなってもいいけど、目の前で大勢の人が死ぬなんて光景は

絶対に見たくない。なにその矛盾。いや今はんなこたあどうでもいい。それに止められるなら止めたい！ あれ、オレ案外いい奴？
なんちつて

群れにむかって剣を水平にふりつつ叫ぶ

「輝け！ Xカリバー！！！」

魔剣Xカリバー どうかでいいことあるような名前だ。

このXカリバーは王家の家宝とかって聞いたけど性能はすっげえことになってる。

名前叫んで振ると光の刃が飛んでいく。そして破壊力はなんていうか、パネエー

そんなわけでオレの剣の刀身が一瞬光り、巨大な斬撃が群れへ吸い込まれて、大爆発を起こす。

それでも群れはこちらになだれ込んでくる。だからオレは剣を振る。振る。そして振る。

だが、どれだけなぎはらっても魔物の数が多すぎて流れ込んでくる後は民衆。流れ込ませないようにめちゃくちやに斬撃を放つが、あまりにも数が多すぎた。

6割ほど後側に流れていくのを横目で見つつ、オレはもっと修行を真面目にしとけばよかったと後悔した

「え、なにがそんなに悪いの？」

コロネが聞いてくる。

「なんたつて見てみるよ。出口をふせぐように口が開いてやがる。この街見たところあの出口意外は出口がないからいまこの街の民衆は逃げ場がねえ。つまりふくろのねずみってやつだ。」

「なるほど……」

「とりあえず、今はなだれ込むのを止めるしかないな。あの勇者御一行達だけじゃ無理だろ」

と、勇者達を見ながら言う。

どうやら5人組らしい。

勇者っぽいのが光の眩しい斬撃をめちゃくちゃに放ち、サムライのような人がすんげえスピードで舞うように敵を蹴散らしつつ、魔法使いが炎魔法を使いながら戦っている。あともう一人魔法使いっぽい人が素手で殴っている。補助魔法使いか？

だがそれでも魔物の数が多すぎて3割ほど倒しきれなくて、民衆を襲っている。

だがあれだけの量を7割も倒しているなんてさすがだ

オレはコロネと一緒にその流れ込んでいる場所に降り立つ

「おいおめえらあぶねえぞ！さがってる！」

なんか勇者っぽいヤツに怒鳴られる。なかなかのイケメン。死ねばいいのに

「うるせー！オレらがお前らの取り残した分倒してやるっつってんだよ！」

「ふっ、死んでもしらねえぞ赤髪！」

そついい勇者の野郎は再び群れの中に突っ込んでいき光の斬撃を放ちなぎ倒す。

とりあえず役割分担である

「コロネ、あっち側を頼む。オレはこっちやつから」

「うん、わかったわ。無茶しないでよね！」

そついいコロネがむこうがわへ消えていく。

さあーで、久々に本気で戦いますか！

敵軍を見る

何やらオオカミっぽいものやらブタっぽいものやらイノシシっぽいものやらシカっぽいものやらライオンっぽいものが入り混じった群れである。

まず魔法障壁を両腕を囲む形で展開し筋力上昇の補助魔法で運動能力を上げる

そして群れに飛び込む

真正面のイノシシっぽいのを殴り飛ばす。イノシシっぽい顔面が砕けて血しぶきがあがる

ぐるっ。

だが我慢だ。

左側のやつに左アッパーを食らわしつつ、右側から襲いかかってくるトラっぽいやつひっかき攻撃をかわし右ストレートをプレゼントする。

殴り、見切り、殴り飛ばしてよける。

そんな動作を繰り返す。

だが数は一向に減らない。　　というかむしろこっちの残滅速度が遅すぎてむしろ増えているようだ

「く……おおすぎるって」

こうなったら昨晚必死で考えた“合成魔法”とやらを使うしかない
ようだ

「冰雪魔法アイスロック！」

地面に腕を当てて技名を叫ぶ

オレの手が触れた場所からどんどん地面が凍っていき、魔物達の脚をとらえる。

半径50メートルほどの敵軍が動かなくなる

続いて

「岩石魔法サモンロック！」

空中100メートル付近に直径10メートルくらいの巨大な岩石が召喚される。

これはゲーム内ではいわおとしみみたいな感じでしか使えなかった。まあ今もあんまりかわんないけど

そして

「火炎魔法フレイムベール！」

これは対象を炎に包んで火だるまにするというもの。ゲーム内では相手の体力をジリジリ減らすものだったが今回の目的はそれではない。

岩石に向けて発動し、空中の浮遊物は赤く燃え盛る

「重力魔法グラビトン！」

その岩石にだけ重力の力を10倍ちよつとかける。

重力魔法は範囲が狭いほうが集中するから対象1つくらいなら10

倍くらいいける

そして一気に10倍もの重力にひっぱられた巨大な火だるまの岩石は隕石のような勢いで落下していく

魔物達は危険を感じ取ったのか必死にあがくが脚が凍りついていて逃げ出せない

動けない魔物達の群れに吸い込まれるように流れていき……

ドアアアアアアアアアアアアアアアアア

衝突と同時に大爆発を起こす。

これはオレが作った魔法であり隕石を作りだし落とすとすというもので時間はかかるが広範囲にすざましい攻撃をすることが出来る。よし、メテオストライクと名付けよう。

間髪いれずに次々と魔法を浴びせる

「風魔法ハリケーン！」

とりあえず砂煙とかで見えなかったんで竜巻を起こして吹っ飛ばしてみる。

そこにはさっきの群れはあとかたもなく消えていて、残ったのは小規模なクレーターくらいだった。

よしー！

だが魔物の群れはまだ出てくる。もっと倒さなければ……

「はあああああああ……!!」

体中の魔力をみなぎらせる

「水魔法ウォーターエクスペローション！」

呪文を叫んだと同時にオレの前方に横長の全長10メートルはあるうかという魔法陣が表れてそこからハンパない量の水が流れ出ていく。

前方の敵がみるみるうちに爆発的に召喚された水に飲み込まれていく。

だがそれだけでは終わらない

「電撃魔法サンダーエレクトリックショック」

前方に向かって雷にもたすぎましい電圧を持った光の光線をうちこむ

それが水流に触れた瞬間

バチッ！という音とともに

目の前の光景が爆発的な光によって遮られ……

つづいて炸裂音

つまりこうだ

水魔法ウォーターエクスポーションは簡単に言うと水流を爆発的に作り出すことができ、前方ほぼ全部を範囲として水で飲み込むことができるが、実際そこまで攻撃力が高いわけではない

そこでオレは電撃魔法サンダーエレクトリックショックを発動したのだ。

これは敵単体にすぎましい電撃を浴びせるというものだから当然全体攻撃には使えない。

この2つを合わせることで水流に電流が走り広範囲に電撃を浴びせることを可能にしたのだ。

そして光がやみ、目を開けるとそこには……

あたり一面黒コゲになった魔物達が転がっていた。

よし、なかなかの効果だな

恐るべし、合体魔法。

だがこんどは口のような空間からプテラノドンのような巨大なトリの魔物が100匹ほどこちらに飛んでくる

空中か……厄介だな

「重力魔法グラビトン！」

3倍ほどの重力をかけて、動きを鈍らせた後

「結界魔法バウンズオブガーケレッドプリース！」

結界魔法バウンズオブガーケレッドプリース。広範囲を囲むのに便利な上、外と中の魔法的干渉を一切うけいれない

つまり内側からビームとか出しても届かないし外側から破壊光線とか食らっても届かない

それでトリの魔物を正方形の透明な空間に閉じ込める。

魔力が持たいたないのでグラビトンを解除

だがこれは結界魔法。自分達の身を守るための魔法である。

なんで敵を囲むかって？まあみてみるよ

そのバウンズオブガーケレッドプリースで鳥の群れを囲み……

「火炎魔法ザ フレイム……からの重力魔法ザ ブラックホール！」

火炎魔法ザ フレイム これはある一点にマグマにも近いほどの高温の炎を召喚することができる魔法である。ちなみにザ というシンプルかつTHEがつく魔法は超上級魔法であり威力も消費魔力も半端なかったりする

その超高温の炎を結界空間の中心に召喚する

え、あの結界は外と中の魔法的干渉を受け付けないんじゃないのか

って？

それは結界にぶちあたって無効化されたときの話だから問題ない

中の酸素奪って殺す……わけではない。

それでもいいけどそれじゃ時間がかかるだろう。

だから、重力魔法を唱えた。

こっちの世界じゃ初めて使うこの重力魔法が ブラックホールはその空間全てのものを中心にもすごい引力で引き寄せるといったものである

そしてその圧力に負けた結界は無理やり心中に圧縮され小さくなっていくにつれて、中で勢いよく燃える高温の炎はいきおいを増していく。

空間が圧縮されていくにつれて空間内の酸素濃度が飛躍的に上昇するからである。

そしてその結界が限界まで収縮した直後……

今回3度目の大爆発

爆風が砂埃を起こすが魔法障壁で防ぐ。

やったか……？

砂煙が落ち着き、さっきまで空中を飛んでいた魔物達はあとかたも

なく消し飛んでいる。

よっし！ これもイイ！

「うう……」

その時、視界が一瞬ブラックアウトする

軽いめまい、か。

……魔力、使いすぎたか。

まああんだだけ上級魔法を連続で使えばそらそうなるだろうな。

亜空の口を見る。

ちょうどその時魔物の群れが途絶えた。いや、流れ出るのが止まった

やっと、か

左側を見る。

5人の勇者含む人たちがなかなかの連携プレイで戦っている。さすがだ

右側を見る

ころねも頑張ってるじゃんすげえすげえ

あと少しだ！

だがもう上級魔法を行使するほどの魔力はなさそうだ

しかたない……

自分の両腕を魔法障壁で囲み……

「冰雪魔法アイスフォーム」

魔法障壁で包まれた自分の腕を凍らせる

このアイスフォームとは下級魔法で、氷の刃っぽいのを作れるんだ
がこっちでは結構自由がきく

だからオレは目をつむりイメージする

長く、鋭い、氷の刃を

目を開ける。

オレの両腕はヒジから先が氷におおわれていて、ちょうど手首から
先が鋭い氷の刀のようになっていた……

そして……！

全身の筋肉強化の補助魔法を発動

これは魔法使いが接近戦をするときに役立つ数少ない魔法の1つで
ある

「うう……」

やばい、こんなに魔力使ったの初めてだ。ぶったおれそう。

だがそんな弱音を頭の外へ押しやり群れに単身で突っ込んでいく。

前方に飛びかかってくるイノシシっぽいのを左の刃で下から斬り上げ、続いて刀を上から振り下ろして上から飛びかかってきたイヌっぽいのを両断する。そして流れるように右の剣で横にいるやつを薙ぎ払う。

双剣はあんまり使い方は慣れていないが、リサの剣さばきを思い出して必死に見よう見まねで切り刻む。

上から下へ、右から左へ、流れるような攻撃を意識する

だが意識が朦朧としだしてきた

くそ！あとちよつとなのに！

「うおるあーららららあああ」

最後のラストスパートをかけるように両方の剣を振りまくる。

目の前の敵の動きがゆっくりに見えてくる

思考が加速していく。

攻撃を避け、ときには受け流し、時には迎えうちながらスキをついて刀身で切りさく

だんだん他のことが考えられなくなっていく

もうすでに魔物の姿しか視界には映っていない

あと少し……あと少しで……

ここから先の記憶は残っていない。

波乱の出発式（後書き）

テスト期間突入なう。

あー。

仲間との再会（前書き）

えーっと戦闘続きになりました

戦闘とか読み飛ばす派のみなさまがた申し訳ありません…。

12月26日誤字発見致しましたので訂正しておきました。

たがり剣を振るう女の人と目にも止まらぬ速さで刀を振るう剣士と魔物をばんばん倒しつつ魔法使いの格好をしている男性が殴ったりけったりの肉弾戦をしている。

それでも約3割ほど残っている

だがその残った魔物が街を破壊……しているわけではない

さらによく見ると2人の男女が戦っている

あーもう、遠すぎて見えない。視力落ちたかな？

バッグからウイステラスで買った双眼鏡を取り出し、覗く

そして思わず

「ホタリン！？ そしてもう一人はコロネ！」

と声をあげてしまう

ホタリンは今まで見せたこともないような魔法を使いながら群れを一網打尽している

コロネは鎖手裏剣を巧みに操ってなぎ倒していく。

だが、二人ともかなり必死に見える

このままじゃいつまでもつか……

「よしー！」

僕は決意する

あの二人に加勢すると。

むこうはほたりに任せてわたしはこっちをする

うわーすごい数

両腕にナイフを構える

そして群れの中へ

イノシシとかブタとかそんなに強そうではない魔物の集まりのようだ

イノシシの腹にナイフを突き刺し、引き抜きつつもう片方のナイフで横からくるブタの首を切る

あまり強くない。っていうか余裕だ。しかし数が……

「秘剣 鎖手裏剣」

わたしの発言で腕に直径2メートルほどの手裏剣が召喚される

これはただのブーメラン式の手裏剣とは違い、鎖に魔力を送ることで微調整ができるようになってる。

それを右手でもち、後に大きく引き、前に投げる

巨大な手裏剣が回転しながら敵をなぎ倒しながら途中でゆっくり曲線を描くようにカーブする

そして鎖に若干の魔力を

回転速度上昇。次におおきく回りながら戻ってくるように軌道をイメージしつつ流す

すると鎖手裏剣は送った命令に従うようにカーブに入ったところから回転速度が上昇し、カメのような魔物を切り裂く

そう、回転速度を上昇させたのは途中でこのカメのような魔物ではじかれたときにそこで攻撃が止まってしまつのを防ぐためである

鎖手裏剣は広範囲に複雑な攻撃を仕掛けることができることから一見広範囲の敵を倒すのに便利なように思えるがそれはちがう

硬すぎる敵がいた場合そこではじかれると終わりなのだ

はじかれた場合は鎖を引いて戻すことになり、とりに行くのにかなりめんどくさい

そしてなにごともなく敵を切り裂きなぎ倒しつつ自分の所に戻ってくる

そのとき、後に何かの気配を感じ戻ってきた手裏剣を手にとらずひよい、とよける

後から断絶魔の声

人ではない、獣である

なるほど、前方に攻撃してるところを見て後にスキがあるとみたよ
うだ

だが残念である。わたしが手裏剣をよけたことによりその巨大な刃
が魔物の腹に突き刺さり、血しぶきを上げつつ地面に鎖手裏剣ごと
突き刺さる

どうやら後にも注意しないといけないようね……

前を見る

うわー

まだ全然減っていない。っていうかペースが遅すぎてむしろ増えて
る？

よし、使うしかない

「忍者スキル影分身」

ニンツと腕を合わせる

自分の影のような分身がわたしから黒いカゲの分身体が出現

そして真っ黒だった影にだんだんと色がやどり……わたしそっくり
になる

このスキルは覚えたばかりのころ2人が限界な上、分身が黒いシークレット状態で、プレイヤーvsプレイヤー戦で簡単に見分けられてあんまり使えなかったっけ

だがいまではこのとおり、分身がそっくりさんである

それに10人程度なら簡単に操れるようになってる。

さて、分身でもしたことだし、やるか。と両腕にナイフをもちながら思う

最初のように前方に上段からの斬りつけ、左手の逆手にもったナイフで左から右に一閃に薙ぎ払う

下から右手のナイフでナナメに斬りつける。

目の前にライオンのようなものが突進してくる。

わたし一人ならナイフで防ぎようもないわけで吹っ飛ばされる未来が待っている

だがいまは私以外にもいる

視界の左端からものすごい勢いで巨大な手裏剣が回転しつつ飛んできてライオンを2分割する

ちなみに今のは鎖手裏剣よりすこし弱いブーメラン型手裏剣である

こういう分身戦では鎖を使うと絡まったりして邪魔になるから使わないことにしている。

そして分割されたライオンを無視し、また横からきたのを切り裂く
そうして10人ほどのコロネたちは次々と魔物の集団をなぎ倒して
ゆく

弱い魔物達を倒しながら亜空間を見やる

わき出てくるザコい魔物達はホタリンのほうに流れ込んで行っ
てい

なんでだろう

ホタリンあの数大丈夫かな……

あいつ集団相手は苦手だぜーとか言ってたけど

と、思いホタリンのほうを見る

すると……

「はあああああああ………！」

と、まるで体中に魔力でもみなぎらせているのかと思わせるような
雄たけび

そして……

「水魔法ウォーターエクスページョン！」

津波にも似た量の水流がものすごい力で前方にながれ、魔物達がほとんど飲み込まれて……

「電撃魔法サンダーエレクトリックショック」

バチツ……ババババババババババ……しゅー……

前方の水に使った魔物達がすごい光に飲み込まれ、水と一緒に感電し、水が蒸発し魔物が黒コゲになっている

心配は……いらなそうね

すると途中から亜空間の中から黒いドラゴンが1匹、それに続く小さな黒いドラゴンが出てきて……

うっそ、こっちにきてる！

ゴアアアアアアアアアアア……

こっちに飛翔しつつ方向

そしてすこし遅れて小さなドラゴン達も叫ぶ

ビャー

そして巨大なドラゴンがもう一回吠える。

ゆけと。そう命令してるように聞こえた

周りの小さなドラゴンがいつせいにこっちに襲いかかってくる

あのドラゴン達はさっきの魔物のように簡単にいかないだろう

一度分身を解いて様子を見よう

と、分身を解除する。まわりの分身たちがスウ……と音を立てずに消えていく

そのとき、ドラゴンの口にかすかな光が……

火炎ブレス!?

というわたしの予想は外れた

ギユウウウン

ほっぺたを光がかする

続いて後方で

ダアアアアアアアン!!!

え、今光線吐いたの!?

まずい、火炎ブレスならある程度よけられるけど光線は出が早すぎるから口が開いた瞬間によけるしかない

それをこんなたくさん……

「あーもう!」

右側で小さいドラゴンが口を若干光らせて口をあける

急いで後へ回避

さっきまで私がいたところに光線が直撃して爆発を起こす。

続いて上を見るとすでに口を開けた小さいドラゴンが……

まずい！

目をつぶる。

食らった。そう思った。が、そうならなかった

なぜか。それは……

「あぶないところだったねコロネ」

彼が防いでくれたからである。

「え、マカロニさん！　なんでここに！」

「話はあとでだよ。とりあえずこの小さいの片づけなきゃね」

そついいマカロニさんが攻撃力上昇魔法を発動したのか全身を青いオーラに包ませる

そして腕を天にかざし、叫ぶ

「来い！ 爆剣エクスプロージョン」

彼の手がいきなり出現した灼熱の炎に包まれてそれがどンドン形をかえ……炎がじゅわつと音を立てて消える

腕には刀身がギザギザな形をした攻撃的な印象の全体的に赤い色をした剣が収まっている

「危ないから離れて」

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「ウェーブショックインパクト！」

剣を逆手に持ち地面に突き刺す

スウー……と周りに空気の揺れを波紋状に広げ

小さいドラゴンだけが何か巨大なハンマーでホームランされたかのごとき勢いで吹っ飛んでいく。

その小さいドラゴン達の目は今何が起こったのか理解を求めている
吹き飛ばされたあとマカロニさんを中心に半径10メートル地点の
地面に激突し、体が半分ほど埋まる。

これは彼の得意としている物理範囲攻撃の上級スキルで、何度も連続して使うことができないらしい。

そして、攻撃対象を指定することができる

彼がこの技を選んだのはきつと私を巻き込まないためだろう。

つと、危ない危ない。爆風で後に飛ばされるところだった。

ふと、マカロニさんを見る

なにやらまだ何かするようだ。

地面に剣の先っぽを突き刺したまま叫ぶ

「はじける！ エクスプロージョン！」

と、突然地面の下から重低音が響き……

マカロニさんを中心に半径10メートルほど、ちょうど小さいドラゴン達が埋まったところらへんを中心に轟音とともに爆発

え、なにあの技。 わたしみたことない。

と心の中で呟いたはずだが心を読んだのか彼が口を開く

「これはこの剣の特殊効果。半径10メートル地点しか攻撃できないから使いにくいしあまり知られてないんだよ。だから使うの初めてだなあ」

という説明を聞いてなるほど。と思った。そもそもマカロニさんの技は インパクト で統一されてる気がする

という思考は

ギシャアアアアアア

という怒りと悲しみを含んだ大きな黒いドラゴンの咆哮により中断される。

仲間だけで行けると踏んだが予想外の展開によって全滅したことが気に食わないらしい

そりゃそうだよな

っていうかむしろ一斉に来てくれなくてよかった。

最初から全員でかかってきてたらわたしやられてたよ。

そしてドラゴンが口を開き、かすかに輝く……。

まさかこのドラゴンも光線……！？

「あぶない！ マカロニさん！」

「え……」

と叫んだころには光線が吐かれていた

さすがの反射神経で体を少し傾ける

初見で回避するなんて、すごい

光線がマカロニさんの左肩を貸すって後方の建物へ激突

刃が回転しつつ翼の膜にあた……りそんなところで体を半回転させよけられる。

鎖に魔力を注ぎ込み、その場で円を描くようにあやつり再度攻撃

その場で空中旋回　そして軌道を下にずらしながら回転速度上昇

ガッン！

ドラゴンのアバラ部分にあたり、数枚の鱗が破片を飛び散らして墮ちてゆく

振り返りながらドラゴンが爪の鋭い腕をわたしにむかって振り下ろす

体を少し横にずらし、ギリギリでよけて常時ポケットにいれてあるクナイで腹の部分を突き刺す

だがクナイが折れる。

はやりこの程度じゃ突き破れないか

つづいてドラゴンが腕を振りまわした勢いを殺さず生かしてシッポでわたしをたたきつけようとしならせる

これは……あたるかもしれない

思ったが視界の端にマカロニさんの姿をとらえる

「ショックインパクト！」

と叫びつつハルバードを右から左にフルスイングしシッポが交わる。

ドアアアアアアン

発生した高圧度のエネルギーが逃げ場を求めて回りに飛散する

ものすごい爆風とともにわたしはマカロニさんとドラゴンから距離を取る

シッポを戻し、口を開く

マカロニさんはスキル発動後の硬直で動けない

やばい！

「召喚 旋空手裏剣！」

龍の口部分に間に合いますようにと天に祈りをささげつつ手裏剣を投げて……

口部分にあたり光線の軌道がわずかにそれ、マカロニさんへの直撃をまぬがれた

「たすかったよ……」

「お互いさまでしょ」

だがしかし、これ以上続くといつか光線をもろに食らうだろう

「よし……」

その時マカロニさんがなにか決心したように言う

「いまからどこでもいいから集中攻撃してくれない？」

「え？」

「次の技で仕留めるから。……はあああああああ！」

そういい、全身に力を溜めこむマカロニさん

とりあえず特に打開策もないので言うとおりにする

ドラゴンにかけよる

わざとスキの多いモーションでクナイを投げるふりをして攻撃をさそう

予想通りにツメで切り裂こうとする

それをひょい、とバックステップでよけて発動する

「盗賊スキル影分身」

スウーと10人ほどの分身を作り、それぞれクナイや手裏剣を持たせてわたしは旋空手裏剣を手にもつ

よけられたあとのスキだらけのドラゴンの一番攻撃しやすい場所に攻撃をうちこむつもりだ

右腕を大きく振りおろしている格好で、今こちらに右肩がむき出し
になっている

あそこだ！

分身達を使い、手裏剣やクナイを一斉に投げる

一点集中である

ガガガガガツンガンガツグサツグサグサグサ

前半の数個の手裏剣ははじかれたものの、その後のクナイで鱗がは
がれおち、最後に投げたわたしの旋空手裏剣で完全に皮膚がたちき
れて血が流れ出る。

「おっけい！ マカロニさん！」

「わかった！」

マカロニさんが後からこっちに走ってくるのをみやりつつドラゴン
を見ると

ギシャアアアアアアアア

と叫びながら口に光がとまり……

熱い熱戦が吐かれる。わたしの左胸を狙って

わたしの心臓部を貫く……という未来はこない。

爆風

ドラゴンの血まみれの右肩にハルバードが接触
半ばまで突き刺さったところで切れなくなった

が、勢いは止まらない

ハルバードが威力をました

おそらく魔力を流したのだろう

再びすごい力でおされるドラゴン

地面に放射線状にヒビが入り

ドラゴンの脚元が陥没する

周りの地面が割れ、ところどころ隆起し……

大爆発！

……

静寂

砂煙がはれる

そこに満足げな笑顔でハルバードを肩に担いだマカロニさんと壮大
にへこんだ地面の中心に無残にも屍と化したドラゴンだけがのこっ

て
い
た。

もどる平和（前書き）

全開は作者が戦闘に暑くなりすぎて街のほづの情景描写がすっかりぬけてましたね

っつことどで今回すこしのせておきます

もどる平和

「ほう、なかなかじゃの……」

「そうですね」

隣で金色の髪に透き通るような白い肌の持ち主のセイラが頷く

わしの秘書で天使じゃ

「わしのいったとおりじゃろ？」

「そうですね……」

今2人で街の状況を映像で観察しているところなのじゃが

突然魔物が流れ込んできている

セイラを出勤させようか、とも思ったが大丈夫のようじゃ

5人の勇者たちにも驚いた

が、わしはわしが送り出したヤツらに注目した

あの赤髪の少年が次々と魔法を合体、合成させて新しい魔法を行使している

わしが黒い龍で最初に試したときはあまり活躍してないように見えるが

どうやらあの少年はオールマイティみたいじゃの

そしてその横のほうでニット帽の少年とポニーテールの少女がドラゴンと闘っているのが見える

あのニット帽の少年は最初の戦闘でかなり活躍しておったな。

少女のほうも変わった武器を器用にあやつって戦っている

魔物の群れ、それもあれだけの数が流れ込んでいるのにもかかわらず、ほとんど民衆のほうに到着するまでに倒されている。

いくら5人の勇者たちが前で戦っているとはいえ、簡単なことでもないだろう

赤髪達の後に運よくたどり着いた魔物はギルドの冒険者らしきおっさん達が武器で倒している

一方戦力にならない一般市民はというと彼らの後側に避難し

口々に応援しているようだった。

「うおおお魔物だああ!」「ブツ殺せええええええ」「がんばれお兄ちゃん達!」「あ、ニキビつぶれた」

ほっほ、もはや英雄扱いじゃの

がんばれがんばれ

おお？ 群れの勢いがようやく途絶えてきたようじゃ
彼らならなんとかやってくれそうじゃ。

目が覚める

ここは……

オレはたしか出発式を見ていて魔物の群れが……

そうだ、オレは戦っていた

だがいままでオレは寝ていた……え？

周りを見る。オレとコロネが泊っていた宿である。

そのとき、玄関から直接つながっているはずの廊下とリビングを仕切っている扉がひらく

「目が覚めたのねホタリン」

「ん、オレ戦ってなかった？ え、夢オチ？」

「ちがうわよ！ あんたが魔物の群れを倒しきった後力尽きたように倒れたのよ！ 心配したんだからね！」

そういわれてみれば、と思う

魔力使いすぎて吐きそうになって、氷魔法で作った両剣で戦って……

……そこまでしかおもいだせねー

まあ、疲れてたんだろう

思考を放棄する

「ああ、心配してくれてサンキューな」

「うん。生きてたならよかったんだけどね」

ニコ と笑う

だからオレも親指をグツとつきだして笑う

そのとき誰だかしらないがもう一人入ってくる気配を感じたので扉のほうを振り向く

「やあ、目が覚めたようだね」

え、え？

「マカロニさん！　なんでここに……！」

驚いた

そりゃ、おどろくよ？　普通

生き別れになった兄弟が何事もなかったようにただいまーって言う

てくるようなものだぜ

「ウイステラスで勇者出発式なんていう興味深いイベントがあるっ
てきたからね。他に行くあてもないし寄ってみただけど、なん
かすごいことになったね」

なるほど、彼も彼でがんばってたんだな

それに、すごいことになった ということについては同意である

っていつかあの群れなんだったんだ？

と思ったから聞く

「ああ、予想外だったよな。っていつかいきなり空間が裂けて魔物
の群れが滝のように流れてくるとか意味わかんねえ」

「そうね……勇者の出發を狙ったようなタイミングだったわよね」

コロネがつけたす

「うーん……街の人たちにも聞いた通りだね」

と、マカロニさんが意味ありげににやける

「なんか、しつてたりすんのか？」

「魔王がいるのは知ってる？」

突然マカロニさんに質問される

「うん、知ってるわよ」

「え、まじかよ」

あれ？ 知らなかったのオレだけ？

「僕的に魔王のしわざかなあって思うんだよね」

「でも、なんであのタイミングでやったのかしら」

それもそうだよな

「手荒い挨拶……とかだったら笑えねえよな」

「あははは、そうだね」

うん、なに笑いながら同意しちゃってんだマカロニさん

「まあ何はともあれ、終わって良かった……わたし死ぬかと思ったもん」

とコロネがほっとしたようにいう

「あのドラゴンつよかったよね。でもホタリンもよくあの数倒せたね」

「え？」

マカロニさんがドラゴンなんていうから気になる

「途中からこっちにドラゴンが来て、そのほかの魔物が全部そっち
いったのよ」

あーそういわれれば、なんか途中から数が増えたような……

でも今そう言われるまで気づかなかった……

「ってまじかよ!!!」

「あんたの闘い方じゃ気づかないかもしれないわね……」

そんな感じで久しぶりに会ったマカロニさんとコロネと楽しく談笑
をしていたらドアをノックする音

「失礼します」とメイドさんばい人が入ってくる

そして3人分の食事が皿にのっている

あれ？　ここって2人登録じゃなかったっけ？

「僕が頼んどいたんだよ。　僕の方は隣の部屋に持ってきといてね
ってね」

え？　となり？

「どっぴいっぴいとっ」

とコロネもきく

「ここは105号室だよ。僕もこの街で宿をとっていたんだけど、たまたま同じ宿でさらに偶然にも104号室でお隣さんだったんだよ。」

笑顔でさらっという

いや、なにその確率！　すげえ！　超すげえ！　ワァーイ

3人で食事をすませ、さあ暇だどうしようかと考えていたところ、ちょうど手持ちの金がそろそろ少なくなってきたのを思い出し

「そっだ、なんかクエストいかな？　金がやばいんだよオレら」

と提案する

「ほんとだわ……」

サイフをのぞきつつ100円玉かと思っていた金が実は50円玉だったときのような複雑な顔をしながらつぶやくコロネ

「じゃあ決まりだね」

という事でギルドに向かうことになった

「おおお！　英雄達が入ってきたぞおおおおおおおお！」

入った瞬間そんな声が炸裂した

ギルド内の冒険者たちが一斉に振り向く

「え？ 英雄？ なんじゃそりゃ」

「とぼけんなよ兄ちゃん！」

がっちりとした肉体に重そうな鎧を着けたスキンヘッドの屈強そうなおっさんという

「あんたたちの活躍っぷりすごかったぜ！ あんたらものんでけよ
！！！！」

「おうおうおう！ お前らものめ！」

とかいいながらビールのようなものをさしだされる

え、オレ未成年なんすけど。ってこっちじゃ関係ないか

それに、なんか楽しそう！

後を見やる

コロネが仕方ないわね。とでもいうような顔をし

「あはは、いいんじゃない？」

とマカロニさんも笑う

よしそんじゃあ飲みますかア！

イエーイ！

飲み明かした後マカロニさんにお金を借りたのはいうまでもない

もどる平和（後書き）

次話からアルスラへんを描いていききたいと思います

俺達の初日（前書き）

今回からはアルスの番です

俺達の初日

ここは……どこだろう。周りを見る。森のような場所、いや森だ。北の森とは違う。熱帯に生えるような植物が生えている上、木の形が北の森のそれとはそれとなくちがう。と感じる。

そして気づく。いま自分は森の中に投げ出されている。それはいい。だがしかしこの感覚はなんなのだろう。それになんだか胸が窮屈だ。まるでゲームに吸い込まれたようなこの感覚。いまだきこんなこと起こるはずない。と思っていたのだが、まさかな……。

腕を見る。

ゲームのキャラクターが装備していた闇色鋼ノ鎧シリーズである。ほかのステータスが下がるかわりに自分の防御力にその数字の数をプラスさせることができるこの鎧は自分にぴったりの能力だ。

最初の初心者だったところによくわからないまま振り分けて当時防御になんか全然ふっていなかったな。

だがそんなことはどうでもいい。まずはこの状況を抜け出さないといけない

簡潔にまとめるとこういうことになる

森の中に1人 ゲームキャラクターの姿になっている 地図もない

仲間もいない

……。

選択肢としては - - - - -

1 このまま森で生活する

2 このまままっすぐ歩き、森をでる

3 適当に歩いて、出会った人に道を聞く

さて、と思う。

1 番の森で生活する。は悪くないと思う。思うがこの状況は速く仲間にあっただほうがいいと思う。それに森で暮らすには食料や飲み水、雨風を防ぐ場所。いわば洞窟のような場所が必要となる。

1番は没とする。

2番のまっすぐ歩く。はどうしようか。まっすぐ歩いていけば森は出られると思うが自分の脚ではどれだけかかるかわからない。リサヤコロネのように素早ければその方法でもいいのだが……

だが3番も望みの薄い選択肢である。こんな森の中に人なんているのだろうか。いてもきこりや魔物を退治（これは低確率）しにきた冒険者くらいだと思われる。

まっすぐ進んでいるうちに人にあうかもしれない。

そうして自分は最良の選択を選ぶことにする。いつまでもこんなところにはダメだ。行動しなければならぬ。この場所にとこつてうずくまるなど愚の骨頂なのだ。

適当に歩く場所を決め、歩く。

歩いていると林檎のような果物がぶら下がっている木があった。とりあえず大事な食料として確保するのが普通。ということでの木まで歩き、取ろうと手にかけたとき

「グルルルルル………」

なにやら獣のうなるような声が聞こえる。なわばりにでも入ってしまったのだろうか？ その獣を見る。オオカミのような魔物だった。オオカミは総勢4匹のあまり多くは無いが一匹の時より確実に厄介な数で自分を囲み威嚇している。

このまま別に無抵抗でも無傷のままでもいられそうであるがそこになつている林檎は硬いわけではない。俺は林檎を守るべくオオカミを退治することに決めた

「武装解除 グレイトシールド」

自分の巨大な盾が光に包まれて……消滅する

俺が装備している盾の能力は自分の攻撃力をほぼ0まで下げてしま
う代わりに、ほかの盾よりも桁違いの防御力を発揮してくれる。最
初らへんに少し上げてしまつて後悔した攻撃力を無駄にしたくない
俺のための武器といつても過言ではない。

そして盾を解除したことにより消えていた攻撃力が戻る

といつても攻撃力に自信をもてるといつたら嘘になるだろう。

それにこれといつて使える武器など持ち合わせていない。1つだけ
持っているがそれは緊急時以外使うことは無いだろう。

だから素手で殴る

「……………」

バゴン！

オオカミAが飛びかかってきたのでかまわず頭部を殴る。そしてへ
こむようなつぶれるような感覚が腕を伝わってくる

ゲーム中では簡単に殺していたが、いざ素手で殴り潰すとするとか
なりいやな感触が伝わってくる。吐きそつだ。だがオオカミは俺に
吐く暇すら与えてくれないようだ

後から気配……

気づいた時には頭部をオオカミにくわえられていた

普通の人が見たならかなりホラー&グロテスクなジャンルの1つとして怖がられるような光景であるが、しかし。そんなやわ

な攻撃、痛いどころかかゆくもない

頭元で何か硬いものが碎けるような音がする

オオカミの歯が碎けたのか。と俺は無意識のうちにそう思う

ふりかえり左腕を振りかぶり、殴る

オオカミがすごい勢いで吹っ飛び、木にぶつかり木片が吹き飛ぶ

絶命。

ちら とほかのオオカミを見やる。おびえている。仲間2人が死んだ上攻撃がきかない以上俺はおびえられる対象でしかないだろう。

オオカミ2匹は覚えてるよ！ とでもいいたそうにワンワン！ と犬のように吠えて逃げていく

まるで負け犬の遠吠えだな。

フフフツ……と。我ながらうまいことを言ったことにすこし笑ってしまう。俺のツボは自分でもよくわからないなと思う。自分のことなのに自分でもわからないとは変な感じだ。さて、林檎を取るか

そのとき そういえば、とあることを思い出す。ゲーム内で使っていたアイテムポーチの性能はそのまま使えるのだろうか。使えたら嬉しい限りのことだ。なんせ1つのアイテムを999こしまえらうえ50種類もしまえるのだから最大収納数は999を1000として考えて1000×50＝50000となりそれから最後に999から1000にしたときの1を引き……

49950も収納できることになる。

小さい上に収納スペースがこんなにもあるなんて、ドラ衛門もビックリだな。でもあれが持っている4次元ポケットとやらは無限ではなかっただろうか。

おっと、思考が妙な方向にずれてしまった。

林檎を袋にいれ、歩き出す。

どれくらい歩いただろうかよくわからなくなっていたころどうやら人の通るような道を見つける

「……………」。

左右を見る。どちらに進めばよいのだろうか。うーむ。と一人で考えていると何やら物音が聞こえてくるのに気づく。耳を澄ませると

……………

ドスンドスンドスンドスン

きゃー！！！！

何か巨大な生き物が走っている音に女性の悲鳴。

ふと右側を見る。

「たすけてえええええええ、ってアルスじゃん！ たすけてえ〜！！！！」

「ゲルアアアアアアアアア」

リサが巨大なティラノサウルスのようなものに追いかけている。軽くフメートル。訂正だ。巨大ではない。ティラノサウルスはこれくらいだったと聞く。とりあえず、この状況下は選択肢をわざわざ考えるまでもない。ティラノサウルスが走っている前を逃がっているリサの遙か前に俺は直立する。そしてさっきまでしまっていた盾を召喚する

「召喚 グレートシールド」

ジウウウウウン……という効果音とともに光がわき出て盾の形を作り出し出現する。と同時に俺の攻撃力は0になっってしまう。だがこの状況では攻撃力なんかいらないだろう。俺が攻撃力を必要とするのはソロ活動の時かパーティに攻撃役がないときくらいだ。いや、攻撃役がないパーティなんてパーティとは呼ばないか。

リサが俺とすれ違う……瞬間

「まかせろ」

「う、うん！」

そしてリサがオレを通り越してすこした場所で立ち止まり振りかえる。と、同時にティラノサウルスが走ったエネルギーを上手く利用しつつ体を半回転しながらしっぽをしならせ、俺をたたきつぶさんとばかりに狙う

盾を構え、接する瞬間力を込める。

バアアアアアアアアアア

発生したエネルギーが周りに行場を求めて爆風となり周囲に発散する

あの威力だと普通は俺が吹っ飛ばされて砂煙が漂う中クレーターの底でぐったりしている光景を想像するだろうがそんなことは俺がこの防御力を持って否定してやる。

「グルア……………」

俺は吹き飛ばされるところかびくとも動いていない。

逆にティラノサウルスとはいうと、俺の盾にしっぽが押し返されてバランスを崩しかけている。

「今だ」

と俺はリサに今が攻撃するいい機会だと忠告する。俺が声をかけるまで固まっていたことから

「わ、わかってるよ！」

という返事は説得力がまるでない。

しゅぱんつ と地面をける音を残して瞬間的にティラノサウルスの頭部へ飛び上がり

「双剣スキル 百列斬！」

ティラノサウルスの頭上に迫ったりサの両手に持つ光に包まれた神々しい剣が空気にとける

いや、とけているわけではない。早すぎてそう見えたのだ

俺はいつも全線でボスの攻撃を受け止めているからパーティ戦でリサの戦闘はあまり目に入らないうえ、こいつと二人で戦うのはこれが初めてだった。

だからその攻撃速度に俺は驚いた。

音速よりも早く振られる剣から斬撃が繰り出され、頭部に集中的に激突していく

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザ

体を大きくのけぞらせたティラノサウルスはバランスを崩してしまうしるにみつともなく倒れる。バツタンという表現が一番しっくりくるのではないだろうか

大きく倒れたティラノサウルスは頭部に連続攻撃を食らったうえ倒れたところにちょうど巨大な岩がありそれに後頭部を強打激したらしい。気絶している。

「ありがとうアルス！ たすかったよー！」

俺が茫然と立ち尽くしていると元気のいい声でそう叫びながら抱きついてきた

いくら俺でも中学生に飛びつれてしまつては少なからず、いやおそらくぶつとんでしまつたろう。と思つたがまつたくその考えは外れ

ることになる。飛び込んできたリサのほうで鎧に顔面をぶつけて「あいたっ！」などと言っている。このキャラってこんなに硬くて重かったっけ。

「……………」

とりあえずなんていえばいいのだろう。助けたのは礼を言われるほどのことだろうか。ていうかあの程度一人でも倒せるんじゃないか？

「え、どうしたの？」

「一人でも倒せただろう」

聞かれたから思った質問を簡潔に述べる。俺は脳内でしゃべりまくるがあまり口が上手いほうではない。リアルのほうでしゃべろうとすれば途中で噛んだりすると見苦しいのであまりしゃべらないようにしている。それを無口ととらえられるようだが別にわざわざ気にすることでもない

「いやー、あんなでつかくてこわいの一人じゃ無理だよー」

怖かった……か。たしかに俺が間に入ったことにより味方がいる安心感によって攻撃する心の余裕が生まれた、ということだろうか。なら納得がいく。でも、怖いって……

「そうか」

と、そのときティラノサウルスが立ちあがる。

めんどくさいヤツだな。とも思ったが立ちあがった直後、こちらに

背を向け、逃げていった。今日のところはこのくらいにしてやるつとでもいうような目でこつちをみていたところからまた襲ってくるかもしれない。それに、特にダメージを与えられたわけでもなさそうだ。

そんなことをしている時さつき俺がリサを発見したところから左側つまりティラノサウルスが走ってきた逆方向から人の声が聞こえてきた

「大丈夫か！ お主ら！ はやくこつちへ！」

振り向いた場所に木の影に隠れるような形でこちらをみている老人にそう促される。俺は別にいくあてもないしついて行ってもいいのだが……

とりあえずリサの反応で決めようと思う。もしかしたら怖がつてるのかもしれないし

「うん今行く！」

という俺の心配を嘲笑つかのようにあつさりと返事するリサ。だめだコイツのことはあんまりわかんない。

長居は無用。その老人の後をついていく。けもの道をかき分け、歩いた先は……村があった。

「村長おかえりー！」 「おう村長そんなにあわててどうした！」

などと大人の田舎者のような格好をした人たちが駆け寄ってくる

「いやいや、ティラノーンの走る足音がした直後悲鳴を聞いてな、危ないと思ったから助けに走ったのじゃが、そこにいたのがこやつらじゃ」

「……………」

あのティラノサウルスのような爬虫類はティラノーンというのか

「どうも！」

とリサが元気よくあいさつ

この老人オレらが襲われているところから危険だと思ったようだ。

だが真実は違う。売られたケンカを買い、さらに追い返したのだ。

正直にそう話そう。と思ったが

ちよつとまで。と頭の中でもう一人の自分のような存在に言われる。

（お前、第3の“途中で会った人に道を聞く“をクリアしたじゃないか。それに村にも連れて行ってもらえたから一石二鳥 だとは考えないのか？）

なるほど、この状況もまた悪くないわけか

それにリサはあまり話を聞いていないようで気づいていない。悪口に聞こえるかもしれないがリサのあほっぽさに救われた。

「ありがとうございます」

「とりあえず宿を貸してやってあげてくれ」

「おう、わかったぜ。お前さんがたこつちにきな」

勝手に宿をとらせてもらった。悪いので断ろうとしたのだが……

「うん！ おじさんありがとう！」

という無邪気かつ幼げな要素を含む輝かしい笑顔で同意されれば誰だってその後「いや、宿はいいです」などということなどできないだろう。俺はそこまでKYではない。

「ここだ。もう暗くなってきたから休みな」

なんとなくか、これからどうなるのは展開がよめないことに若干の不安を感じた俺だった。

俺達の初日（後書き）

誤字脱字修正しました。ミスが多くてすみません……

はじまりの村（前書き）

誤字脱字訂正しましたー

他にもあったら指摘お願いします

はじまりの村

案内された宿は木造の1階建のもので4つ部屋があるうちの1つを使わせてもらう。

部屋はというと、大きな部屋が1つでベッドがちょうど2つあり、窓が1つあったがカーテンがかかっているのでどれくらい日が入ってくるのかよくわからない。そして真中にテーブルがあり、他には特に何も無い感じであったが、そのシンプルさが逆にいいのかもしれない。とりあえずテーブルに座り、向かい側にリサが座る。

「なんかアルスと一緒になんて初めてだね！」

事実だ。俺は1人でいかか5人でいかかのどっちかだ。

「だな」

「え……アルスってもっと渋くておじさんな声かと思ってた」

「どんなだ……」

これでもまだ18歳なのだが……

「なんでアルスってそんなに無口なの？」

そう無邪気に聞いてくる。別にしゃべりたいこともあるわけでもないし、何を話せばいいのかわからないというのが正直なところだ。それに俺なんかしゃべってもおもしろくないだろうに。というかこいつは俺と会話したいのだろうか？

「しゃべったほうが、いいのか……？」

「しゃべったほうがいいよー そのほうが楽しくなるって！」

楽しい……か。普段は1人か5人だから俺が何も言わずとも周りに迷惑はかけまい。だが今は2人だ。人と一緒にいるのに全くしゃべらないというのはいささか気まずい雰囲気醸し出しているのかもしれない。だから

「努力は……する」

といった。いきなりしろといわれてできるものでもない。

「がんばってねー」

と、返事が返ってくる。

そして沈黙

「……」

「……」

ちよつどその沈黙をうち破るかのよつにリサのほつから

ぐうー………というかわいらしい音が聞こえる

「腹、減ったのか？」

と、聞く。

「う、うん……」

恥ずかしそうにうつむくりサ

夕飯までまだありそうだし、俺はあまり腹が減っていない。だから俺は自分のアイテムポーチに手をつっこみ、赤い林檎のような果実を取り出し、差し出す

「食え」

「あたしに？」

不思議そうな顔をされる。嫌いなのだろうか林檎は。

「嫌いなら………すまない」

と、しまおうとすると

「いや、好き！ 林檎は好き！ けどアルスがそんなのくれるなんて初めてだったからさ」

「そういえば、そうだな」

緩やかに会話が進む。進むにつれて感じたことのない気分になっていく

俺は、会話を楽しんでいるのだろうか……？ わからないな。

「夕飯までは持つだろう」

「うん！ ありがとう！」

林檎をおいしそうに食べたリサはいろいろしゃべってくれた

現実世界でのことや友達との出来事。ほかにもたくさん

ずいぶん、楽しい人生歩んでんだな。こいつは……

ふと、自分の過去を振り返る。

「……………」

暗。

「ん？ どうしたの？」

「すまない、ちょっと自分の過去を思い出しただけだ」

「アルスの過去きかせてー」

俺の過去……か

俺の過去なんざ聞いて気持ちのいいものではないだろうに。だがここで無視をするのも悪い気がするので一応返事はする

「いやだ」

「ええ！ なんで！」

予想に反して食らいつついてくる。この話はあまりしたくないのだが

……
「いろいろあるのね」

「ふん」

ようやく話題から離れてくれたようだ。

そんな感じにしゃべっていたら女の人が料理を運んでくる。

その料理は大変質素なものであったが、素材の味というヤツだろうか。とてもおいしかった。リサも「おいしー！」などと言っていた。顔がほころんでいることから本当にうまいのだろう。そして俺らが食べ終わったところで

「食べ終わったお皿とか、もっていつときますねー。あとお風呂あるんでどうぞ」

顔を見合わせる

「だってさ……アルス。ここお風呂あるらしい」

「そのようだね」

「お風呂はこの廊下をまっすぐ行ったところにあります。どうぞ」
ゆっくり」

とりあえずここのお風呂というものはどういうものなのか疑問に思うので見に行くことにする。廊下を歩き、言われた通り進むと外にでる。間違えたのかと思ったがそうでもないらしい

そこは石で囲まれたような形で並んでいてその中に大量のお湯と思しき液体。そこから湯気が立っている。この近くに火山でもあるのだろうか。どうやら天然の露天風呂といったところだろう。なるほど、と思う

リサはちよつとのんびりしてからいくとか。たべたばかりで動きたくないのだろうか。

女湯や男湯などの旗がないことから混浴と見える。

「武装解除」

全身の装備が溶け、インナーとなる。それもぬぐ。

湯につかる。温かい。湯気が出過ぎて周りがよく見えないがそれだけ暖かいのだろう。

四肢をのばす。……。体中の疲れを吸い取られているようだ。実際そうなのだろうか。筋肉が温められて緩んでいるのをそう感じると聞いたことがあったな。それにしても今日は初めて戦ったうえここまで歩いてきて休憩なんてとれていなかったから疲れていて当然だろう。と思いにふけっていると

「アルスー はいるよー」

リサの声が建物の扉のむこうから響く。俺のほかには客がいることなど考えていないのだろうか。今は別に俺一人しかいないから問題はないが。扉が開きこっちにくるのだが妙にきよきよしている。その後不思議そうな顔をして湯につかってきた。

武器を出してみよーと思う

「えいつ 聖剣ノビルスソード！」

きらーん という音がしたあと光輝くあたしの愛剣が出てくる

「うわー、きれいー！」

いろいろ出してみたけど、画面でみるよりかっこいい！

よし、そろそろ風呂でもはいろっかなー アルスもはいつてるかも

と歩きながら考える

そういえばお風呂で鎧はさすがにきかないよね……中身はどんな人なんだろう。アゴヒゲが渋いダンディーなおじさま？ それとも工事現場でタオルを首に巻いてタンクトップ姿で木材を運ぶお兄さんののかな？

と、想像しながら

「アルスー はいるよー」

あたしはワクワクしつつ扉を開ける。 到着！

うわ、広い！ 露天風呂じゃん！ イエーイ！！

さて、アルスはどこかなあーっと……

きよろきよろあたりを見まわしたけどアルスらしき人がない
ただ湯船に1人つかっているのみだ。どこにいったんだろう……

と、不思議に思いながら湯につかると声をかけられる。

「どうした」

「実は一緒に来た人がいなくて……アルスっていう人しりませんか
ー？」

「お前の目の前にいるだろう」

え？ え??

「ええええ！」

「ど、どうした。なんか変なこといったか？」

「いや、意外だなあって思ってたさ……」

鼻でギリギリ息ができるくらいまで沈みながら見る。

銀色の髪の毛を背中くらいまで伸びていて、目も銀色をしている。
それにあたしの思っていた渋いおじさんや肉食系なお兄さんの想
像の正反対な女性のような綺麗な顔をしている。

あれ？ なんか丸いものが見える

もふ

「ええええええええええええ！！」

「こんどはどうした」

「女の子なの！ アルス！」

「いや、うーん……そうだけどちがう」

え、どゆこと！？

えーっとそうだけどちがう……って、ことは

「男の娘？」

「それも間違っではないけどちがう……」

「じゃーなんなの？ アルスちゃん」

「詳しく聞きたいなら話すけど。あとちゃんづけはやめてくれ。な
れてない」。

「う、うん」

「とりあえず、上がるうか」

そうしてお風呂を上がり、さて服はどうしようと思ったけど、なに
やら宿の人がタオルやらいろんなものを貸してくれるらしい。つい
でにはかまも貸してもらった。

アルスは普通に女物を渡されてたけど、何も言わずきてた。説明するのめんどろくなのかな？

そして部屋につき、お互いそれぞれのベットに寝転がったところで、アルスは話し始めた。

はじまりの村（後書き）

次話は回想回にしようかなあーなんて思ってみたり

俺の過去（前書き）

誤字脱字おかしな点などありましたらご指摘願います

12月3日誤字修正しました

12月6日スカイプの友だちにて「姉が死を簡単に受け入れすぎじやね？」といわれましたので微妙につけたしました。

俺の過去

「過去から話すから、長くなる」

「うん、お願い」

俺の家は母子家庭で親父とは離婚したらしい。小さすぎるときだったのであまり顔は覚えていなかったからどうでもいいのだが……

それで小さい時から無口なほうで静かな性格だった俺はあまりクラスにもなじめずいつも一人だった。

俺は一日の大半を小説を読んだりゲームをしたりして過ごしていた俺の母さんが再婚し、新しいお父さんとなる人物には1人娘がいるらしく名はたしか香ときいた。年は俺より2歳うえだったと聞く。当時中学3年生だった俺から2歳離れているから姉は高校2年生というところだ

増えた家族と暮らすようになり、いつも仕事で母が遅かったためかなり静かだった暮らしがかわり、母は仕事をやめ父親は普通に仕事をし、7時くらいに帰ってくるうえ、姉もふえたのでかなり騒がしくなってしまうた。

最初のうちは姉という存在に戸惑い、話しかけずらい雰囲気だったのだが……

「こんにちわー守君 君すっごいかわいいね！」

姉はちがったらしい

初めての会話がこんなもので始まるなんて予想外すぎた。というか抱きつかれて苦しい

「へー、アルスってかわいいんだ！ あつてみたいな！」

「かわいいかどうかは知らん。続き話すぞ」

「おけー」

姉にべたべたとひつつきまくられる毎日を過ごしているうちに距離感も縮まり、かなり親しい中になった。長年一人だったためかそれからの毎日がかなり輝かしく思えた。

姉は高校に入ったときからバイトをしていてためたお金でパソコンを1台持っていたらしく、興味深いと思った俺は姉にさわっていいか聞いたところ快くうなずいてくれた。

というかむしろ姉のほうから見せてくれた。外にでないで家で本やゲームばかりしていて周りのことにも疎かった俺にいろんなことを教えてくれたのである。

そんなある日姉にすすめられたゲームがセカンドワールドというも

のだった。俺はゲームボーイアドバンスくらいしかもっていないかったのでネットゲームの3Dグラフィックに心底関心した。感動あるいは感激といったところか。かなり大げさに（そう見えたらしい）喜んだ俺に感動して姉は俺に自分のデータを使わせてくれた。名はアルス。なぜ男みたいな名前なのかと聞くとき好きなRPGゲームの勇者の名前なんだよねと言ってくれた。そしてキャラクターは当然だが女だった。銀色の髪に銀色の目の美少女。まさにファンタジーな感じであるがそれでもそのキャラクターが姉に似ていた。

その日から俺と姉は一緒に1つのキャラを育てるという感じになった。

月日がながれ、キャラクターのレベルもかなりあがり攻撃力もあがりプレイヤースキルもあがりたりしていた。当時のアルスのステータスは火力に偏った振り方をしていて大剣を扱っていた。そんなこんなで楽しかった日々が過ぎていく。

だが平和は突然奪われる。

姉は高校3年生、大学に受検するために塾に通っていて、午後9時くらいだっただろうか、いきなり振りだした大雨によって帰れなくなった姉に傘を届けに迎えに行った。姉は「大丈夫大丈夫ー走ってかえるからー」などと言っていたが風邪をひくだろうと思ったのだ。家から塾は約1キロほどの距離にあり、かなり車も通る道路をいくつか超えた場所にあるから信号はちゃんと守らないと危ない。

すたすたと左手で傘をさし右手に傘を垂らしながらあるいていた途中、信号が赤だったので待っていたところ真正面から人影がこつちにはしつてきている。高校の制服に身を包んだ女性。姉だ。

「守ー、いいっていったじゃんー」

走りながらそう言う姉に声をかけようとした。「風邪ひくと思って」というつもりだったがちょうど青になった信号を走ってわたる姉に大きな影が迫っていてそれどころではなかった。

大型トラック。

大雨で滑っているのだろうか。盛大にスピンしながら姉にせまり……

姉が無残に羽飛ばされものすごいスピードで転がりながら、コンクリートの塀にぶつかりとまる

オレは急いで駆け寄った。信じたくなかった。姉がはねられて血まみれになることなんて……

運転手に激怒するより姉を病院へ連れて行かねばという思いがまさり俺は両手の傘を投げ捨てひ弱な体なりに姉を抱きかかえ病院まであるく。近くに公衆電話があれば救急車を呼んでいたのだが運がわるくここ周辺には設置されていない。

病院は幸いここから500メートルほどいったところにあるのでそこまで歩く。こうしているうちに姉が出血で死に近づいて行く。そう思うだけで俺は泣きそうになったが我慢しようとする。姉に「男は泣いちゃだめだ!」と怒られたことがあるのを思い出した。のだが今の状況じゃどうしようもなかった……

歩く。ひどくながい道のりを。1秒1秒過ぎ去っていくのがひどく絶望的に感じられる。

「守……………」

姉が俺の名前を呼ぶ。その声音はひどくよわよわしいものだった。

「姉ちゃん……………もうすぐで病院……………だぜ」

必死に背負った状態で歩きながらそう答える。

「みてよ……………こんなありさまじゃ……………しんじゃうね……………」

「んなわけねえだろ！」

まるで全てに諦めたようにフッフと笑う姉

「私が死んだら……………げほっげほっ」

血を吐きながらひどく不謹慎なことをいう

俺の服はもはや血まみれだ。

「しゃべんなんて！ 死ぬって！」

そう言ったのだが……………

「お姉ちゃんのもの……………全部あげ……………る……………ね……………」

「いいから！ しゃべんなんて！」

血を吐きながら出てくる言葉の意味もよく理解せぬまま俺はしゃべるのをやめるように叫ぶ。しゃべるたびにせき込み、血をはく姉の

姿を俺はもう見ることはできなかった。

あとすこし……あと少しで病院に……

病院まであと少しなところで姉はひどくよわよわしい声でなにかを
いった

「ごめん……ね……」

おい、なんだよそりゃ！ なにがごめんねだ！ 諦めてんじゃねえ
よ！ 諦めてんじゃ……ねえよ……

「どうしました！」

病院から看護師らしき人に声を掛けられるが俺には説明する余裕な
くてなかった。

姉から伝わる胸の鼓動も止まっていた。

結局死んでしまった。俺は姉1人を守ることができなかった。大事
な人を守ることができなかったのだ。

そんな中半ばは自暴的になりつつ鬱状態になり、部屋にひきこもり姉
のパソコンでアルスを使い装備を戦士用のアーマーから鎧に変え、
防御力にステータスをふりまくった。ゲームだろうがなんだろうが
目の前のものを守る存在になりたいとでもあのころの俺は思った
のだろうか。そんな思いからアルスというこのキャラクターはもの
すごく防御力のある硬いキャラになっていった。その後も攻撃力を
0にまで下げてその分防御力を飛躍的にあげる盾などを作り今の段
階のアルスになった。

そんな中ソロ狩りをしていた時たまたましりあつたホタリンやコロネやマカロニやリサと知り合い、こつちの世界に流れ着いてしまったというわけである。

だから俺は男であるがこつちの世界では女ということになってしまったのだ。

あたしは何もいうことができなかった。

「泣いている……のか？」

そういわれ気づく、自分の頬を雫が流れていることに

「すまない……話さなければよかったな」

と、アルスは無表情でいうがあたしには無理だった。

顔を隠して泣いてしまう。そのときアルスが自分のベッドからあたしのベットにきて……抱きかかえてくる。

「肩……かしてやる」

あたしはアルスに抱きつき肩に顔を埋め泣いたまま寝てしまった。

びっくりした。ああ、これは本当に。こんなに泣くなんて思わなか

った。こんなことになるなら最初から「姉のデータだからだ」とだけ言っておけばよかったと後悔している。向かい側のベッドの上で顔を隠して泣くりサを俺は見えていられなかった。ベッドから立ち上がりりサのベッドに乗り、その小さな体を抱き寄せる。

「肩……貸してやる」

そういうと何も言わずりサも俺にしがみついてきて肩で静かに泣き始め……そのまま寝てしまった。

……今日くらいは一緒にねてやるか。

抱かれる期待（前書き）

すみません最近字数が少ないですね……

作者はアルスと比べるとホタリンはすごくかきやすかったんだなあ
ーとか思ってたたり

抱かれる期待

目が覚める。窓からちよつどいい具合の日が差していることから朝だということがわかる。さて、起きるか。と上半身を起こそうとするがなにかにつかまれているようだ。顔を動かすとそこにはリサがいた。抱いたまま寝たのを思い出す。気持ちいい寝顔をしている。起こすのもわるいような気がするので俺はそつとりサから抜け出しベッドから脱出する。きていた袴はかまを脱ぎ、つぶやく。

「装着 闇色鋼ノ鎧」
タークステイル アーマー

瞬間自分の体が一瞬黒い光に包まれ、光が消えたころにはいつもの鉄鎧が身体を包んでいる。なぜ着替えたかというと、村人は俺のことを鎧姿しか知らないはずだと思ったからである。なんというか、説明したりするのがめんどうなだけなのだが

さて、と思う。特に起きてもすることがないな……街への道のりなどの情報がほしいところだ。事態としては危ないところを助けてもらったようなものなのだ。ここにも長居はできない。早いところ礼をいい、街までの道のりをきいて今日中には出たいところだった。

まずは地図かなにかないものだろうか……

そう思いドアを開け部屋を出る。店の人がいたので聞いてみようと思ひ、近づぐ。

「おはようございますー。あ、昨日の方ですねー。どうしました？」

「地図……とか」

「あーはいはい。ちょっとまっててねー……………つと、あつたあつたコレコレ、はいどうぞー」

地図とかないですかと聞こうとしたのだがいい終わる前に理解したらしい。カウンターのほうに小走りで走っていき棚をこそそとあさくつたあと一枚の地図らしき紙を持ってきた。

「どうも」

部屋にもどり、机に地図を置き椅子に座り、見る。そういえばこの村ってなんていう名前なのだろうか。聞いとけばよかったなと思つたが地図に現在地と書かれた場所がありエリエールと書いてあったのでここはエリエール村ということになるだろう。とするとここから一番近いのは…………アルデートだな。この村がある森はかなり広いようだ。

「ふあ…………あれ、起きてたの？ アルス」

地図を眺めていたらリサが起きてきた

「いい天気だね……………なにしてるのーアルスう」

そついい駆け寄ってきて地図を見る。しばらく凝視したあと「ああ、これ地図か！」という。寝起きなのだろうか。いや無論寝起きだろう。すこしして「なんで地図なんて見てるの？」といわれるので応える。

「村を出るためだ」

「ええっ　なんで！」

「事態的に見れば助けてもらった上一泊さしてくれた。これ以上世話になるわけにもいかないだろう」

「ああ、そうかー……そうだよー」

とりあえず荷物をまとめ……いや、まとめる荷物はないか。このポーチがあるからな。それに何も出してない。そして二人で宿の人に泊めてくれたことに対して礼をいい玄関を出る。昨日来た時はあまり余裕がなかったのでよく見なかったがこの村はそれなりに広いようだ。まあ今からだとところだし別にどうでもいいのだが……とその時

どこかから悲鳴が聞こえる。耳を澄ます……オオカミのような鳴き声が聞こえる。

「アルス！」

「ああ」

リサと一緒にかけよる。するとそこには予想通りオオカミのような魔物が10匹位の群れで村の真ん中まで突き進んでいた。その中で1匹だけ頭に角の生えた一回り大きいヤツもいる。ボスか？　だがしかし、俺は集団戦は向いてない。リサのほうに向いているだろう。だからここはリサにまかせようかと思った。もうすでに動いているしな

「召喚！　双剣ライトツインソード！」

ぴかーん という音とともにリサの腰の左右に同じ大きさの鞘が召喚される。その鞘には60センチほどの刀が収納されているようだ。周りを見る。村人も非難はたらしい。周りには誰もいない。が、よく見てみると家の窓などからちらちらと見ているようだ。

敵意を察知したかオオカミのような魔物がリサの方向に振り向くが

「……！」

いつのまにか鞘から出した双剣によって切り刻まれていた。

「うえ……気持ち悪い……」

リサが鞘に剣を戻しながら返り血を浴びて気持ち悪がっている間に小さいオオカミたちに囲まれる。

そのオオカミ達が一斉に飛びかかる瞬間……

リサが左右の鞘からでる柄を握り……一瞬霞んだように見え……それだけだった。

「双剣スキル 瞬殺しゅんころ」

そう呟いたとほぼ同時にリサを囲んでいたオオカミがすべて……体中から血しぶきを上げながら地面に落ちる。

……早い。今のは恐らく両方で居合い斬りを使っただろうが早すぎて剣をどう振ったのかさえ認識することができなかった。

一人だけになってしまったボスオオカミがリサに突進してくる。ものすごいスピードだ。あの速さのまま頭の角で突かれたら普通の人は死ぬレベルだ。が、しかし、当然そんなことにはならなかった。

リサがボスオオカミの上にジャンプし空中で回避。そして一回転する瞬間両方の剣を鞘からだし、音速にも近い速度で振る。

「双剣スキル エアースラッシュ 空斬撃」

白く、か細い斬撃が2本飛び……命中。

リサの着地と同時にボスオオカミは身体に2本の斬撃を受け、首と腹を一刀両断され……その場に倒れた。

「ふう、よこれちゃったや」

「お前……強いな」

「へっへーん」

満足そうな顔でいうが服が血まみれなので少し怖い。それにしても相変わらずリサの速度は尋常ではない。ステータスをほとんど素早さに偏らせつつ発動速度の速いスキルばかりをレベルアップさせていたようだが、まさかここまでのスピード戦が可能になるとは……おそらくリサはセカンドワールドでもトップクラスの双剣使だろうな。

と、その時周りの家の扉や窓があき、口々に叫ぶ

「すげえよあんちゃんたち!」「強い!」「すごい!」「うおおお
おお」「かっけえええええ」

は？ なんだ？

俺とリサが不思議がってキョトンとしていると村人が集まってきて
「もしかしたら……」「きっとできるわ……」「絶対出来る……」
「もうこいつらしいかない……」などという。なんだよ、まったく
意味がわからないな。

その中に村長がいたので俺が聞くことにした。

「な……」

「ねえ、みんながいろいろ言ってるけど、どういこと？」

またしてもリサにとられた。もういいや。なれた。

「いや、実はの……最近超凶悪なティラノーンが出没しているのじ
ゃよ」

「ティラノーンは凶悪だろっ」

出会った瞬間しっぽで潰されかけたぞ俺は。

「そうなのじゃが、その中でも白銀色の希少種が出たらしいのじゃ
よ。この前も村が滅びたという情報が流れてきておるのじゃ」

そりゃ、やばいな。

「それで、お前さんがた、その白銀のティラノーンを倒してくれな
いだろっか」

「……………討伐隊とか要請すればいいだろう」

「この前街から20人が討伐しに向かったのじゃが全滅してもうた……………このとおりじゃ！」

「ああ！ たのむ！」 「おまえらしかいねえ！」 「村の平和を守ってくれ！」 「まじ頼む！」

老人が頭を深く下げると同時に村人も口ぐちに言う。 ふむ……………20人がかりで全滅、か。そりゃ強そうだな。オオカミ10匹ごときでこの騒ぎなこの村など5分で壊滅してしまうだろう。だが、うーん、と考える。要請もダメなうえこの村じゃ対策しようがない。今頼めるのは俺らだけなのか。ここまでお願いされては断れないよな。さすがに。

「ああ、わかった」

「え、いいの！ アルス断ると思ってたよ」

「泊めてくれた礼だ」

「ああ、なるほどねー。じゃ、いこーか」

俺が承諾したと同時に村人は口ぐちに感謝の言葉を叫びまくる。本当にびくびくしてたんだなテイラノーンに。

「たのんだぞ……………お主ら……………」

ことは速いほうがいい。それに別にすることもなく暇だ。今からで

も倒しに行こうかなと思ったわけだ。だが俺とリサは話しを聞いただけで主にどこに出現するなど聞いていないことにきづく。まずは出現場所を聞かなければ倒しに行けない。と思ったのだが

「え…………そのやばいテイラノーンって…………あれ？」

その必要はないようだった。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

なぜなら村の近く、視覚で簡単に確認できるほどの距離でその雄たけびが大地を揺るがしたからだ。

進化する凶龍（前書き）

12月10日誤字見つけたのでなおしました。

進化する凶龍

悲鳴が上がる。村全体から。

村人が大地を揺るがした原因に気づくやパニックに襲われる。無理もないだろう。この村人よりも絶対に強い討伐部隊が20人もたばになっても倒せなかったモンスターが目に見える距離にいるというのだからな。というか近いな……気配とかまったく感じ取ることができなかった。

俺は冷静に相手の特徴を把握する。身体は白銀の鱗におおわれている。太陽の光が反射して神々しくさえ見える。体長は………30メートルか。俺がみたやつより3倍ちよつともある。攻撃力は計り知れないだろうな。フツツ、久しぶりに楽しめそうだ。

「みんな！ にげて！！」

リサが村人に避難するように言っているがすぐに正気を取り戻したらしい。次々にヤツの反対側に逃げていく。

「グルオオオアオオオオオオ」

咆哮しながら地面にしっぽをたたきつける。威嚇のつもりだろう。しっぽが接触した地面が大爆発を起こす。大爆発を起こした後そこから地面にヒビが入っている。攻撃力はなかなかだな。

すると森から体長2メートルくらいのかわいいサイズのテイラノーが30匹ほど森の茂みからでてきた。さっきのは相図だったのか？ それにしても群れで行動か……あの小さいのはリサにまかせよう

「リサ、そつちはまかせた」

「うん！」

そついい、小さいテイラノーンの群れに突っ込んでいく。そのリサをめがけて白銀のテイラノーンがしっぽを振るうが……。

ドオオオオオオオン

俺が間に回り込んで素手で止める。

「テメエの相手は俺だ」

そついい俺は白銀のテイラノーンをリサ達が戦っている場所から少し離れた場所まで誘った。

「双剣 ライトツインソード！」

ぴかーん という音とともに召喚される鞘と剣。この剣は他の剣より軽さを重視して攻撃速度を上げるためだけに強化しまくった剣である！

ただ、攻撃力が頼りないけど、なんとかなるよね！

群れの中央に移動して、挑発する

「かかってこいやー！」

指で空気を仰ぐ

すると目に見えて怒気が上がる。

怒りは攻撃力を増すが攻撃を単純にさせるものだ……って聞いたことがある。だれだっけ？

まあ、いいっか

真正面から1匹が突進してくる。左に回避し……柔らかそうな部位、つまり腹のあたりを狙う。

グシャ！

綺麗にヒットする。短い剣の先っぽがティラノーンの腹に赤色のラインを作り、血液が噴き出す。よし、腹はそこまで硬くないことがわかった……腹を狙っていいー

と思ったが後にいつのまにか移動していた他のティラノーンがしっぽを振るってくる。

そのしっぽごとを切断しようと左の剣で上から振り下ろすも……

ガスッ

という音とともにお互い反動によって反対側へ押される。

どうやらしっぽは硬いっばい……

左右からしっぽが振るわれる。それを上に飛んで回避。からの空中で一回転してスキルを発動して着地する。

「双剣スキル 空斬撃」
エアースラッシュ

さっきまであたしがいたところで血を噴き出して力尽きる。その着地を予知していたように左からの突進。

かするほどギリギリでよけ、お互いすれ違う間に刃を腹に3回ほど突き刺す。

よし、やっと4匹……って、全然へってないじゃん

他のティラノーンがあたしを囲む。約10匹。よし、しめた！

左右の剣をいったん鞘に戻して、両腕に魔力を流し込みそのまま剣に流す。

「はあああああああああああ」

あたしの身体を黄金色のオーラが包む。

かまわずティラノーンがつつこんでくる。

上から前から左から右から後からななめから……とにかく全方向

だが、そんなもの関係ない

思考を集中させる。時の流れが減速し、目に見える全てのものがゆっくりと動きだす。

「双剣スキル 瞬殺斬」
しゅんざつぎり

両腕から物理法則を、筋肉から生み出されるエネルギーの限界量を軽く無視して剣が鞘から引き抜かれる。

その両腕は黄金色に光っていて、音速よりも早く動いているのだろう。おそらく光の速さに近いんじゃないかな……？

そして前後左右上下全てに剣を無造作にふるう。

時の流れが戻る

あたしの周りのティラノーン達が何かに吹き飛ばされるかのごとく周囲に吹き飛び、血の海を作っていた。

うえ……

よし、これで15……匹かな？

あとのこり半分。いつきに倒そう

両方の剣を鞘に戻して、再度魔力を鞘の中に溜めこむ……

これは鞘の中に魔力を溜めて、抜いた瞬間その魔力エネルギーを剣のせてふつとばす技なのさ！

だから溜めただけ強くなるんだよね

あたしの身体を包むオーラがどんどん濃くなり……それが腕を伝い鞘の中に凝縮されていく。

鞘が膨大な魔力を吸収している。

その危険性を本能が察知したのかティラノーンがすごい勢いで突進してくる。

それも全員がだ。

だがそれは、あたしにとっては都合がよかった。

よし……いける！

この技は全員が一斉にかかってきてくれたほうが効率がいいからなのだ

「降り注げ

ギガスラツシャ

」

ちなみにこの技は双剣に魔力を流し込んで発動する双剣スキルの最上位スキルなのである。（普通の双剣スキルは漢字なのだが上位はカタカナになっている）

空中へ高くジャンプし群れの真上から攻撃する

剣を抜き、自分でも見えない速度で剣を振るう。黄金色に輝く剣から黄金色の斬撃が振るうたびにティラノーン達に襲いかかり、身体を裂き、空気を揺らし、大地を削る。

無数の斬撃があたしから放たれ……前方のティラノーンの群れを無残に降り注ぎ、砂煙の中へ飲み込まれてゆく。

だが、あたしは攻撃をやめない。

砂煙が舞う中さらに斬撃を降らせ、しまいに大爆発を起こす。

ダアアアアアアアアアアアアアアアア

砂煙が晴れた。そこだけが更地になっていた。

よし、おーわり

アルスの手伝い行かなくちゃ

腕でしっぽを止めた後ジャンプして顔面に飛びこんで思いっきり殴って挑発させたあとにリサが戦う場所から離れるようにして走り出す。

ドシンドシンドシンドシンドシン

一歩脚を踏み出すたびに地響きができる上、歩きながら大きな足跡を作っている。

もう、いいだろうか。

ゆっくり振り返り、白銀のティラノーンと対峙する。

まずは攻撃力の検証

思いっきり身体をしならせ、しっぽをもろすごい勢いでたたきつけてくる。

左腕の手の甲で思いつきり迎え撃つ

ゴオオオオオオオオン

という金属同士がぶつかり合うような（というかそのままだが）音が周りの空間を支配する。

俺の脚元が陥没し、隆起する。

そして左腕の甲の部分の鎧にはヒビひとつはいつていない。

盾、いらないかもしれない。

こんどは脚をあげて踏みつぶさんとばかりに迫ってくる。

右腕を上につきだす。

ティラノーンの脚がアルスをとらえ……腕にふれ……そこでとまる。

ティラノーンがいらついたように何度も踏みつけるがびくともしない。

次の攻撃をよけて反撃してやろうか。

再度脚が迫ってくる瞬間、左側に飛んでよける。

踏みつけるのに使った反対側の脚に強烈な左ストレートをくらわして両足を開いた状態にしてから後に回り込んで背中に思いっきり右ストレート

全身を鎧に覆い頭に兜のようなものが出現したのだ。

なめらかなしつぽにも先っぽに固まりが付いているハンマー状のも
のが付いている。

白銀だった表面はどす黒くなり、さらにさきほどまで感じられなか
った魔力がテイラノーンを包んでいる。

そして最後に……20メートルほどの両手剣。

そこにいたのはさっきまで戦っていた白銀の恐竜は

闇色の鎧を全身にまとわせた武装した龍となった。

第二形態というやつだろうか……

どこのラスボスだよ。

「あ、あれは！」

村の宿でお手伝いをしている女性が叫ぶ。

「なんじゃ」

と同じ方向を見るとその部分だけどす黒い雲に覆われていた。

その下には……

武装したティラノーンがいた

……なんじゃあれは！ きいたこともない！

「そう言えば聞いたことがあります……まれに生まれる希少種には魔力を扱えるものがあると……でもあんな扱い方ができるなんて……」

「じゃな……」

良く見るとアルスが対峙している。

ちょうどそのとき

「ねー、村長さん！ アルス知らない！」

おや、あの鎧男の連れか。

「あそこじゃ、でもいつてはだめじゃ」

「ええええ！ なんで！」

頼んだ本人が言うのも変な話ではあるが。おそらくこの娘じゃ無理じゃろっ……

「あれをみるのじゃ」

「え………？」

少女は指差した方向を見るや、一瞬戸惑った。

「おぬしじゃ勝てないかもしれないぞ？」

が、しかし少女は笑顔で言う

「でも……いかなきゃ」

そしてアルスのほうに走って行った。

やばい、この威圧感、計り知れないな……

と俺は意外に冷静に判断する。最初の1発はよけたほうがよさそう
だ。

すると武装したテイラノーンが巨大な両手剣を大きく振り上げて…
…上から地面にたたきつける。

それをよける。よけたのだが……

地面に激突した瞬間大きすぎるエネルギーがその空間を吹き飛ばし
大地に地割れを幾つも刻んでいく。たたきつけた場所がへこんでい
る。小規模な隕石だなもはや。

俺は爆風に耐えながら武装龍を見る。

目があつ

次は、あてるぞ -

そう聞こえた気がした

くそっ！

「召喚 グレートシールド！」

左腕を天に向け言う。

腕に巨大な盾が召喚され、同時に俺の攻撃力が下がり防御力が上がる。

武装龍が咆哮しながら右から左に薙ぎ払ってくる

その剣に向かってなけば突進するがごとく勢いでぶつかり……

剣と盾が触れ合った瞬間俺を吹き飛ばすがごとく爆発が起こる。

が、耐える。

後を見ると俺を伝って流れたエネルギーが大地を割っている。

……。

強度を試すか。

左に振り切った両手剣を今度は右に薙ぎ払ってくるがそれをしゃがんで回避。剣をふりきる前に接近して盾を解除する

「解除 グレートシールド」

攻撃力の戻った自分の腕で思いつき振りかぶり、武装龍の腹に向かってうちこむ

金属がぶつかり合うような重低音

そして効果は……ないようだな。

しかし、詰んだな。こちらは攻撃がきかない。がしかしあちら側の攻撃力じゃいつか押される。

と、そのとき。

「アルスー！ 助けに来たよ！」

振り返る。リサだ……よかった。攻撃役がほしかったところだ。

「それにしても……すごい迫力……」

「だろ」

「攻撃はまかせて！」

「ああ」

短い会話で戦術が決まる

俺が盾でリサが剣。

ならば必死に守りきるのみ

リサがすごい速さで突進し武装龍の真正面に躍り出る。そしてライ
トツインソードを握り占める。

武装龍が気づき、巨大な両手剣でリサを一刀両断するといわんばか
りの速度で斬りかかるが

「召喚 グレイトシールド！」

俺の盾によって攻撃が途中でとまる。

スキだらけの顔面に向かってリサが技を発動する。

「双剣スキル 百裂斬ひゃくれしきり！」

空中に浮いたまま無数の斬撃を繰り出し、頭部を集中的に狙う。

激突するたびに小規模な爆発を起こして、顔が隠れていく。

そして……傷という言葉すら大袈裟といえるような傷がついた。

つまり鱗数枚だ。

「うそ……」

武装龍が両手の内右手を柄から離し、殴りかかってくる。

それを俺が盾ではね返す。

「どつしよつアルス……きかない……」

「一か所を集中攻撃してくれ」

「うん……………」

「スキは俺が作る」

地面に着地するや再度ダッシュし空中にリサが瞬間移動のごとく出現してスキル発動

「双剣スキル 大斬波^{だいざんぱ}」

2本の小さい刀を同時に上から力強く振る。

巨大な光の刃が頭めがけて放たれて……………激突。

そして爆発。よろめく武装龍。

剣を握り直した武装龍が下からなめにリサをたたききらんと振るが
必死に俺が食らいつく

「はっ！」

ダアアアアアアアン

しかし俺は忘れていた。

しっばも武器だったことを。

武装龍が剣をはね返された際に起きた逆方向に走るエネルギーを上
手く活かして身体を半回転させて左からせまったハンマー状のしっ
ぽによって俺は地面にたたきつけられる。衝撃によって砂埃が立つ。

「きゃー！ アルスうううう！」

砂埃が激しくて視界が不自由だな。……油断してしまった。次から
要注意だな。

だがこれくらいどつてことない……つてあれ？

自分の身体を見る。まずいな……鎧がところどころ砕けている。と
くに腹の部分がひどい。さっき直撃したのが腹なのだろう。さらに
血が滴っている。

……うそだろ？

くっそ……

砂煙の隙間から武装龍を見る

さっきのリサの斬撃で頭にラインが走っているのが見える。皮膚を
断ち切ることもできそうだな。

だがしかし……このままじゃもたない。

使うか……あの……技を……

あの技とは、昔姉が使っていた戦士系のスキルなのだが、消費魔力
があり得ないのでどうしても勝てないときだけつかうんだぞ！つて

言われていたがそれ以来勝てないことがなかったので使っていないか
ったものだ。

しかしあの技はあれ以降つかったことがないうえに魔力消費量的に
発動できるのは1回きりだ。ここで発動していいのか？ はずした
らどうなる？ 当然しぬだろう。

くそ……どうすればいいんだ……どうすればいい！

その時、どこからか声が聞こえた

『守……』

この声は……姉？ いやそんなはずはない。ここは別世界なはずだ。
ありえない……

『守……！』

が今度はしっかり聞こえた

(姉ちゃん？ 姉ちゃんなのか？)

『そつだ！ っていうかなにを迷ってるんだよ！』

(自信がないんだ……)

『大丈夫だ！ お前ならできるって。私がついてるから な？』

(…………)。)

『私が絶対みてるから。大丈夫だって』

(……………)

『いけるか？ 守』

(ああ)

『なら、行ってこい』

そう聞いた後、姉の声は途絶えた。はあ、死んだあとにまで世話を焼かせるようじゃ駄目だな俺は。

立ちあがる。

砂煙はまだ晴れていない。相手もこちらが見えないのか攻撃してこない。

あの技を使おう。姉が見ていてくれていると聞いた。なら大丈夫だ。失敗するはずはない。やるしかない。

腕を空に突き出し、武器を召喚する

「出でよ

インパクトコンバージョン

」

防御こそ最大の攻撃（前書き）

アルスを本気で戦わせてみました！

変な所があつたら指摘願います

防御こそ最大の攻撃

アルスが隣で吹き飛ばされて地面に多々つけられるのをみてあたしは背筋が凍った

なにしろあの攻撃を盾で防いでなかったのだ

最悪の事態が脳裏をかする

アルス……死んでない……よね？

だが武装龍は助けには行かせてくれないようだった。

アルスが砂煙で見えなくなって攻撃できなくなったからか攻撃対象があたしに移ったみたい

あたしにむかって巨大な剣が振り下ろされる。

アルスはいれを盾で普通に受け止めてたけどあたしはきつと一発で終わっちゃうかも……

とか考えながらよける。

スキについて斬撃を飛ばしながら移動する。

よけて攻撃よけて攻撃の繰返し。

あたしの攻撃はそんなにきいてない。

けどこのままじゃ……

アルス………はやく！

と、願っていたその時、アルスが激突したあたりから黒いオーラが放たれている

「出でよ インパクトコンバージョン」

そこに鎧がところどころ割れ、腹の部分が砕け散り、血を滴らせたアルスが立っていた。

俺の言葉によって右腕が闇色のオーラにつつまれ、消えたと同時に出現するまがまがしいトゲが印象的な盾が召喚される。

インパクトコンバージョン。この盾の特殊能力は相手の攻撃を防ぐ瞬間、その衝撃を全て吸収し、吸収できたエネルギー分だけ自分の防御力に追加できるというものである。つまり、つかえば使うほど防御力が上がってゆく。

ちょうど砂煙がはれる。

「アルス！ 生きてたんだね！ よかったあ〜」

「喜ぶのは早いだろう」

「むー」

唇を尖らせる。なんとというか、緊張とかそういうものがほぐれていくな。これを和むというのだろうか。

「まあ、まかせろ。勝機はある」

「あたしは？」

「スキを作ってくれ」

「らじやー」

そういい、リサが走っていく。なんか無駄な心配をさせてしまったような気がする。まあ、いい。とりあえず今は奴を倒さなければ。

「百裂斬！」

いつのまにか移動していたリサが再度頭に向かって斬撃を放つものはじかれる。

リサに武装龍の剣が振るわれる。

それを俺がこの盾で触れる。

瞬間

盾が一瞬黒く光りすべてのエネルギーを吸収する。

爆風も、衝撃も吸収されてしまったことで剣と盾が最初からその状態だったかのような錯覚にとらわれている。

俺も初めてこつちで使ったから正直驚いている。衝撃が全然、というか全く感じないレベルまで吸収されているのだから。それに驚いているのはむこうも同じようだった

「ゲルオ……？」

驚いてるところをリサは逃さない。

「はあああああああああ」

リサの身体を黄金色のオーラが包み込む。あれは見たことがない……。

両方の剣を鞘にカチンとはめる。そして鞘にどんどん魔力が流し込まれる

「降り注げ！

ギガスラッシュ

」

リサの両腕がおそろしいスピードで動く。もはやどう動いているかわからない。だが無数の光の刃が直撃している。さっきの百裂斬よりはるかに攻撃力も手数も上だ。

武装龍が顔面に攻撃を受けながら感覚だけで剣をむしゃくしゃに振るう。

それを全て。あえて受け止めに行く。

止める。止める。止める。そして止める。

比例して上がる防御力。

俺の盾を包む黒いオーラが最大限まで濃くなってきている。そろそろ、だな。

「リサ、次で決める」

「おっけい！」

リサがわざと相手の真正面に出る。

それをチャンスとばかりに全身の力を使って両手剣を上から下に振り下ろす武装龍

だがリサは簡単によける。あえて誘ったのだらう。

振り下ろした両手剣が地面に地割れを作り、埋まる。

埋まった上から無数の斬撃

上からの圧力によってさらに地面に突き刺さる。

「準備おっけーだよアルス」

「ああ」

埋まった両手剣を必死でひっこぬこうと試みているがその姿がスキだらけだった。

俺は盾を持ったまま突っ込む。

「盾戦士スキル ザ ガードアップ」

俺の防御力が5倍に跳ね上がる。

俺はもともと魔力が少ない。だからスキルは非常時以外は使えないのだ。それに、最後の切り札用にも残しておかなければならない。

そして発動

「狂戦士スキル ステータスマルチプレクシオン 能力前変換 ザ アタック モード」

俺の身体を赤いオーラが包み……すべての装備が赤い粒子となり腕にすいこまれていく。

そして同時にほぼ無装備状態になる俺

鎧が外れたことによって本来の俊敏さが戻り、動きやすくなる

そして空中に大きくジャンプし、武装龍に接近する

この技は昔狂戦士として姉が使っていた時のスキルで自分の防御を全て捨てて攻撃力にプラスするというスキルだった。

が、しかしこれは本来俺のような盾戦士が使うスキルではない。

さっきまで使っていたインパクトコンバーションで防御力を最大限にまであげておき、ザ ガードアップで5倍にする。それを攻撃に持っていくのだ。

空中で叫ぶ。

「全てを破壊する鉄槌

ザ デストロイ クラッシュ！」

腕が紅色に輝き、腕の中に1つの武器が出現する。それは鉄槌。

これも狂戦士時代の姉のスキル。全ての残り魔力を消費して攻撃力を1回だけ10倍にする。

一瞬にして俺の手の中に赤いハンマーが出現する。

その後爆発的に堆積が増加し、どんどん巨大化し、途中から雲に隠れて見えないほどになる。

剣をようやく抜き取った武装龍が剣で受け止める体制を取る

「無駄……だ！」

振り下ろされたハンマーが武装龍の巨大な両手剣に防がれる……わけもなかった

振り下ろした瞬間ぶち当たった衝撃が強すぎて核爆発でも起こったのごとく大爆発を起こし、発生した爆風が周りの木々をなぎ倒していく。

その爆風で自分自身も吹き飛ばす。

その後も周りの木々をなぎ倒し、核爆発もどきの大爆発の元から巨大な竜巻が出現し、砂煙が混じってその巨大な砂の竜巻が空を覆うどす黒い雲を吹き飛ばした。

そして俺は気を失った。

「ええええええええええ！」

あたしはびっくりした。

アルスが全ての装備を解除したあと、全身を赤いオーラに包まれていて、右腕が特に濃く光っていた

その姿は紅の女神

綺麗……

素直にそう思った

そしてさらに驚いた

「あれ？ 目がおかしくなっちゃったかな？」

目をこするがどうやらおかしいのはアルスのようだ

アルスの腕に一瞬にして雲まで届くのではないかというサイズのハンマーを召喚したのだ

ってというか雲まで届いてるし……

何もかもを破壊せんとする威圧感をまもっていたがその姿は醜くなかった。むしろかっこいい！

そしてアルスが銀色の髪をなびかせつつ、叫び、振る。ザ デストロイ クラッシュ。あのスキルはみたことがない。というかアルスがスキルを使ったのも今回初めてだなー。巨大な鉄槌が振り下ろされた瞬間に大爆発を起こす。あたしは近くの大きな岩の陰に隠れることにした。

爆発はすぐ終わったらしいが爆風はいまだにおさまらない。まだ周りの木々をなぎ倒して暴れている。本当にありえない攻撃力だし……あれ、そろそろやんできたっばいよ？

そっと岩から顔をだす

爆発したあと、その場所に竜巻が発生して、砂を飲み込み肌色の竜巻が出来上がっていた。

というかハリケーンとかタイフーン規模だ……

その巨大な竜巻がどす黒い雲を巻き込み、全て打ち消して、消滅した。

あたしは岩からひょいと出て、おそろおそろ周りを見回した。

爆心地は直径100メートルほどのクレーターになっていて、その外側は木々が吹き飛び荒れ地になっている。

アルスやばすぎるー……

そういえばアルスは？ アルスはどこ？

あたりを走ってキョロキョロさがした結果、見つけた

クレーターよりも外の木々が無残に積み上げられてる場所よりも外側の森の中に墜落したらしい。普通の森の中に一か所隕石でも落ちてきたような感じの場所があった。

そこに血まみれで倒れている銀髪の女性(?)は……

「アルス……！」

やばい……このままじゃ出血でしんじやう……

あたしはアルスを背負って村まで持っていこうとした。

鎧を来ていたときののような重さは嘘のように軽かったからすぐ村に連れていくことができ、その後村に1人だけいる回復魔法使いによってなんとかなったのである

よかった……

あたしは胸をなでおろした。

その日アルスは目覚めて、手当された。その後少し寝かせてくれと言って寝てしまった。身体を包帯で巻かれてたし、大丈夫かな？村の人々はアルスのことを伝説の盾剣士だとか言って祭り上げていたけど彼女(彼?)はいやがってたな！。っていうかあたしは攻撃力のほうがすごいと思うんだけど……。あたしのはそのお共みたいない感じになっちゃってるけど、活躍したのはアルスがほとんどだし、いいっか。

「爆発」

「あー……あのあとすごかったんだよー。もう、バリバリドーンみたいな」

「……………」

そんな感じであたし達の長い二日目が終わった。

「セイラよ」

「なんですか神様」

「あのアルスとかいうやつ……………強いのう」

「ええ……………」

「だがしかし、女じゃったんじゃない。しかも巨乳ムフフフ」

「……………」

「痛い！ 痛いつてセイラちゃん！ セイラちゃんの胸もいい感じぐふぁ……………みぞに入った……………だがそこがいい痛い痛い痛いぎざやあああああああ」

防御こそ最大の攻撃（後書き）

自分でかいときながらアレですけど

もはや兵器ですねアルス

方向音痴（前書き）

12月7日誤字発見したので訂正しました！

方向音痴

村三日目。あたしとアルスは村を出ることになった。たった三日だったけどなんかさみしい気もする。みんなが笑顔で手を振っている。あー、なんか感動しちゃう……

「涙脆いんだな」

「ち、ちがうもん！ 鼻水だし！」

「……………」

隣でアルスに言われるけど言い返す。

鎧はあの子の後の爆風でさらに損傷したらしい。上半身の右半分が吹き飛んでいて、ヘルメットは粉碎したとか言ってた。だから今は頭と右腕と上半身右半分が鎧から出ている。そして胸の部分もさらされている。そこから包帯で巻かれた身体が見える。ちなみにインナーは上半身が爆風で破れて使い物にならなくなったらしい。

そして、今日村を出ると言ったらせめてもの礼がしたいと差し入れを買った。リンゴみたいなアレ。

「ってゆーかアルス、大丈夫なの？ 包帯でグルグル巻きだけど」

「この、胸んところか？」

「うん」

「揺れると邪魔だろう。固定してるだけだ」

「ああ、ブラジャーね」

「だな」

すこしは「ち、ちがう！」みたいなこといわないもんかなあー……………

ちなみにアルスの胸はそこそこ大きいのである。キャラ作製するときに胸のサイズなんて設定できたっけ？ まあ、いいけど

アルスが男なのかどうか疑わしい……………

だって男ならあたしの裸でなにかしら反応すると思うんだよ

まああたしもあたしで見られても別になにも感じないけどさ？

もしかしてもものすごいマニアックな趣味してるとか……………

「どの街に行こうか」

と、アルスが問いかけてくる。どの街っていわれても……………

「えっと……………地図みせてー」

「……………」

無言で地図を渡してくる

ふむ……………ここから一番近いのは北国アルデート、かー。

それから2番目に近いのは東国ジャッパーン……

「とりあえず、アルデートについてみようよー」

「だな」

別にアルデートに用があるわけでもないけどさ、一番近いのがいいんじゃない？

そして歩き続けて太陽が真上を通過する。

あれから結構時間がたっただろう

「ここさつきも通らなかつた？」

5回ほど同じデジャブを感じて確信する

「かもな」

ああ……絶対迷ってる……

つて、なにその よくあることだろう？ みたいな口調は！

「あーもう、迷ったー！ー！」

「ああ」

「なんでそんなに落ち着いてるのー！」

「そうか？」

「うん、ものすごく落ち着いてるよ！」

「……そうなのか」

アルスには不安とかそういうものを抱いたことがあるんだろうか……

動じないというか鈍感というか気にしないというか考えないというか

とか歩いてるうちに何度も見たような岩をまた通過する。

「このまま同じ道いっても意味ないよ……」

「だな」

「だな。 じゃないよ！ もう！ あたしが進む道決めるからね！」

落ちていた枝を地面に立てる

「なにをやる気だ？」

えい！ と手を離す。 まひだりを枝がさす

「よしこっちいー！」

「……………」

思うがままに枝を倒す。

あ、左 また左 こんどは右？ え、後？ あれ、倒れない……まさか、上？

そんなことを続けていたらだいぶ時間がたったようだ

体中がだるい……

「もう……だめえー……」

へたりこんでしまった。

「……………」

なんかアルスがため息をついている。

「なんだよ、もう！ 遠い！」

「いや、俺らが遠くしてるんだろっ……しかたない」

するとアルスが目の前でかがんでこっちに背中を向けてくる

「え？」

「……………のれ」

結局それから暗くなって月が昇るまでおんぶしてもらった。疲れな
いんだろっか？ 不思議に思っただけ

「別に」

としか返ってこない。あいかわらず口数が少ない
でも最初よりは増えたよね

村でしゃべる時はじめて声聞いたくらいだし……いままで聞いて
なかっただけかもしれないけど

「今日は、ここくらいだな」

「うん、そだね」

少し開けたところでアルスが立ち止まる。

空を見るとそこそこ暗くなってきた。

アルスがポーチに手を突っ込んで……なにやら箱を取り出す

「なに？ それ」

「テントだ」

「えええ！　なんでそんなの持つてるの！」

「ソロプレイではよく使う。その時の残りだ」

「そ、そうなの……でも、ここでも使えるの？」

テント。それはセカンドワールドで使うもので体力と魔力が底を尽
きて、負けそうな時に安全地帯で使うことができるもので、体力と
魔力を最大まで回復できる。っといってもこっちはどんな感じに

つかうんだろっ……

アルスが箱を持って言う。

「展開」

箱の角4か所から何かが同じ距離に飛んでいきそれぞれがワイヤーのようなものでつながり、なにやら組み立てられていく。

「おお……すごい」

さっきまで箱だったものが今じゃもはや立派なテントになっていた。人が2人寝るならちょうどいい。あたしみたいな子供サイズだったら4人くらい大丈夫かもしれない

そして中央にランプがぶら下がっている。おお、便利。

「どつやら普通に使えるそうだな」

「そだねー」

中に入る。うん。なかなかの広さ。これならちょうどいい感じだなあ。と、そういえば

「布団とかは？」

アルスがポーチに腕を突っ込む。なんであたしは何も出さないのかとうと、こっちに来る前日、ほとんどうっちゃったんだよねー てへっ

……。

「……………毛布と布団1つずつしかないな」

「別にいいよあたしは」

布団を敷きだすアルス。なんていうか、お母さんみたいである

「どうだ」

おお、かなりふかふか。っていうかなんでこんなものもってるんだらう

あたしが不思議そうな顔をしているとアルスが答えた

「あつちじゃ自分の家、マイホームがあるだらう。姉がそれを自分に好みに模様替えするのが好きだったんだ。そのとき邪魔になったやつがポーチに残ったまんまだったらしい」

そういえば、マイホームなんてあったなあ……………街で遊んでるほうが多かったあたしはあんまり興味がわかなかったけど。

っていうか、ずいぶん家庭的なお姉ちゃんだったんだなあー

「へえー。でも、ふかふかで気持ちいいー」

「そうか」

返事をした後アルスが鎧を脱いだ。あれ？

「解除じゃないの？」

「解除に頼るほど脱ぎにくくもなくなったしな」

「ああ、なるほど」

じゃあたしも自分で脱いでみよう……

あたしの装備は前にも言ったように聖騎士装備である

特殊能力として素早さが上がり、攻撃速度も上がる。あと剣に魔力を流し込むときにその魔力に聖属性がつくものだ。外見に見れば騎士っぽい洋服で、胸と両腕の肱から手首までが鎧におおわれている、下半身がミニスカートみたいな感じになっていて、動きやすいようになっている。

そして、脱ぐ。あれ、なんかひっかかっている……結構脱ぎにくい……

「。。」

ふとアルスを見ると何やら考え中モードに突入している。だがそれも一瞬のことだった。

「着替えたか」

「うん！ じゃ、あたしは寝るねー」

布団にもぐりこむ。うーん、あったかい……！ さー！……！！

それから意識が途絶えるまで数分もかからなかった。

となりで少女が あったかい！！サイコー！！！！などと叫びながら一瞬にして安定した寝息をかき始めた。

……速い！ いや、変なノリはよそう。キャラじゃない。

にしても速いな……俺は寝ようとするといろいろ考え込んでしまつてなかなか寝ることができない体質なのだがなんなんだこの差は。

リサを布団の反対側にどけて、自分も布団と毛布の間に挟まる。

暖かいな。

そつえばなぜあの時姉の声が聞こえたんだろう。

……としばらく考えたのだが特に思いつかなかったのでこのキャラが姉のだからということにしておいた。

さて、みなは無事だろうか。ホタリンとコロネとマカロニ……あの3人ならなんとかやっていけそうだが、心配だ。合流したら何をしようか。いやそれは合流してから考えよう。

それからこのたびを思い出す。っていつても三日間だがなぜ俺達はこつちの世界にきてしまったんだろう。と不意に思う。リサが文字を読まないで扉を開けた後老人が意味ありげなことを言っていたのは覚えている。“新しい世界へ行きたくないか”とかなんとかだったような。その新しい世界というのはこの世界のことだろう。するとあの老人はなぜここに送り出してきたのだろう。うー

む……あの黒いドラゴンを倒したとき、なにやら満足げな顔をしていたな。つまりあれを倒せるほどの力を求めていた……ということだろうか。だとしたらこの2つからこの世界に力が必要だったということになる。

……崩壊でもするのだろうか。

脳内ですばらくしゃべり続けているとだんだんと思考能力が落ち、意識も薄れてくる。

俺もそろそろ寝るとしよう。

ギルド登録(前書き)

12月8日誤字もいつけたので訂正しました！

ギルド登録

目が覚める。朝か？ テントの表面に太陽の光がすけてここまでとどいている。

上体をおこ……そうと思ったけど何か俺を止める。横を見る。やはりか……

リサが俺に抱き枕にしがみつくようにしてからみついている。こいつ、寝像悪いのか？ それとも一人で寝れない系なのだろうか。だがしかし、どうしよう。再度リサを見る。気持よさそうにねてやがる。起こすのもなんか気が引けるのだ。

1 諦めて二度寝

2 起こす

3 すり抜ける

ふむ……。諦めて二度寝……は悪くないのだが、俺は寝溜めが得意な体質だから二度寝したら明日は寝れないだろう。却下。2のおこすはやめとこつ。かわいそうである。3のすり抜ける……これしかないな。

すこしずつ……すこしずつ……

両足に力を入れつつ身体を半分ひねらせ腕を使って身体をおこすあとすこし……あとすこし……あ。脚が攣った。

……。

30分くらいふくらはぎを抑えて悶絶してから再度戦う

よし！小さくガッツポーズを取った後に思った。なにやってんだ俺。

外にでる。なるほど、太陽の位置からしてだいたい12時くらいか？ お昼時だが寝起きのため腹はへっていない。

しかしどうしたもののか。このまま昨日と同じように歩いてても抜け出せないと思われる。なにか高い場所はないのだろうか……。と思い周りを見る。丘とかないだろうかとか思っていたんだが。リサにジャンプしてもらおうか……。いやでもそんなに飛んだら着地の衝撃をリサ自身が吸収しきれないだろう。

さてよ？ 吸収？ できるじゃないか。この俺が。

「んー？ アルスなにしてるのー？」

どつやら起きたようだ。ちょうどいい

「なあ、思いっきり飛んで空から見えてくれ」

「えええ！ いきなりそんなこと言われても……どれくらい飛べばいいかなー……」

「100メートル」

「ええええ！ 落ちたら死んじゃうって！」

「俺が受け止めてやるから」

つまりそういうことだ。落ちてくる瞬間インパクトコンバージョンで衝撃を吸収すればいい。

俺は両腕を指でからめ、下におろす。

「のれ。俺も力を合わせる」

「う、うん。絶対キャッチしてよ！」

そっつい、リサが俺の手と手を重ね合わせて作った踏み台に脚を載せて……

思いっきり上に上げる

ぴゅん！ と風を切る音とともに、はるか上空まで飛び上がる。

空中でキョロキョロしたあと落ちてくる。

「いやあああああああああああ」

「インパクトコンバージョン」

全ての衝撃を盾が吸収してリサが盾に接触した瞬間もともと盾にのっていたかのような錯覚に見舞われる。やはりなれないな。

「どうだった」

「ええーっと……あつちに街が見えた。お城があったよ」

「よし、すこし走ろう」

場所が分かったから一直線に走る。善はいそげだ。善なのかどうかはどつでもいい。

それから30分。普通についた。いままでの苦勞はいつたいなんだつたのか……

門がある。とても大きな門だ。縦に30メートルほどの門。その周りはすこし低い塀が取り囲むようになっていて。そして最後に門の左右に立っている門番らしき人物に目がいく。二人とも似たような鎧を来ているが右側にいるほうが微妙に豪華である。上官なのであろうか。まあ、そんなことはどうでもいいのだが。

そのまま普通に門をくぐる。左右にいた門番は立ったまま寝ているのだろうか、目が微妙にあいているのにまるで俺たちにきずいていない。

入った瞬間人の多さに俺はすこし戸惑った。今のところエリエール村しか知らなかったからな。

「街だー！！！！」

リサのテンションがあがる。まあ、子供にはあんな村は退屈だったのだろう。街を見回す。戦士のような装備をしている人、魔法使いのような人、私服の人や馬車を馬で引いている人もいる。商人だろうか。そしてこんどは街並みを見る。レンガ作りと木造が主流のようだな。中世ヨーロッパのようだ。だが俺は違和感を感じた。よく見ると道の石畳がところどころ砕けていて、そこらへんの建物がすこし壊れていたりする。そしてこの前まではそこに建物があつたかのような場所まである。

「どうしたの？ アルスー」

とりあえずそこを通りすがった民衆に話を聞く。

ベンチに座ってタバコらしきものをくわえながら新聞を読んでいるおっさんが近くにいたのでしゃべりかけた

「ここで、なにが……あつたんですか」

「おう、姉ちゃんはしらねえのかい！ 昨日の勇者出発式で魔物の群れが街になだれ込んできたんだよ！ ほれ、見てみる！」

といいながら新聞らしきものをみせてくる

『勇者出発式の途中に魔物の軍勢が攻めてきた！』

出発式の途中狙ったように空間から無数の魔物がなだれ込んできたのである。だが勇者5人と3人の冒険者とその他大勢のギルド所属の人たちによつて街は救われた！

と、書いてある。

「ええええ！ やばいですねそれ！」

リサも驚くのもわからなくもない。っていうか勇者も別にこっちの世界にはいるのか。なら俺達は一体何のために……

「おうよ！ やばかったんだぜい！ ちょうどここらへんから出てきたんだからよう魔物がな」

「ありがとうございます……」

だが、そんな大事故があつたなんて民衆の雰囲気からは感じられない。街の人たちはその壊れた建物など最初からそこにあつたかのよ

うに気にしていない。

そして再び街を歩く。本当にいろいろな人がいる。貴族とかもいるのだろうか。

「なありサ」

「なにー？」

「宿とか、とつておいたほづがいいよな」

「うーん、そだねえ」

「でも金がない」

「あ……………」

金……………か。さっきの記事にギルド所属の人達とか書いていたな。ギルドでクエストとかうけられたりするのだろうか。まずこつちの世界にそういうものがあるのかどうかはわからないが、探してみる価値はあるだろう。

と、歩いていたらギルドと書いてある看板が目立つ建物を見つけた。

「ねえ、ここいけそうだよ？」

「だな」

とりあえず入ってみる。入口は布のカーテンのようになっている。木造で酒の匂いが強い。そして机やいすがたくさんあり、ここでパ

「ティーでも開けるのではないだろうか。」

「いらつしゃいませ」

カウンターの女性があいさつしてくる。カウンターの下に登録手続き所と文字が書いてある所から見てあそこで登録するのだろうか。とりあえず登録とかからだな

「登録とか……」

「とーろくしたいんですけどー！」

「ではこの用紙にご記入ください」

普通に書いたら「何語ですかコレ」みたいな顔をされたので田舎から出てきたということにしておく。調査とかされたときのために滅びましたと言っておく。

「では説明しますね」

まとめるところだ。俺らは最低ランクのEから始まる。ランクが高いほど貰う金も増える。という簡単なものだった。それと、手に入れた素材とかギルドにもつてくれば高額で引き取ってくれたりもするそう。リングが大量に余っているので20個ほどポーチからだし、引き取ってもらうことにする。小さなポーチからありえない量が出てくるのを驚かれたが、何も言わなかったのでスルーした。

「えーっと、4つで銅1つなので銅5枚ですね。どうぞ」

「ありがとう……」

「ありがとうございますーす！」

人としやべってるときは俺はしやべらなくてもいいのかもしれない。さて、銅が5枚手に入ったわけだが、どれくらいの価値なのかかわらない。金の価値について教えてもらいたいところだが、今必要なのは宿に泊まる分である。宿にいつて払えばいい。足りなければ翌日クエストで稼ぐしかない。

「じゃ、探すか。宿」

「そだねー ありがとうございますーす！」

「いえ、ご登録いただきありがとうございます」

ギルドを出る。最初に見つかった宿に入ってみようと俺は心で決め歩く。空を見る。5時くらいか。日が傾き始めているが暗くもなっていない感じの時間帯である。

と、歩いていた矢先、案外簡単にひとつめの宿があった。木造で2階建ての煙突から煙を出している建物。入口らしき扉の上には「宿」と書いてある。わかりやすい宿で助かる。

入る。カウンターにいるおばちゃんという表現がしっくりくるような年齢の女性がこちらに話しかけてくるので俺が話し始める

「一泊いくらですか」

「銅1枚だよ」

ふむ、銅1枚か。金銭感覚はよくわからないが俺の全財産でここ5日分ということになる。リングが4つで銅1か。だとしたら結構安いほうなのかもしれない。建物もそこそこ綺麗に掃除がいきとどいているように見える。俺はここに泊ることに決め、3枚渡した。全部渡さなかったのは手元がさみしくなるからである。この3日間で街の状況把握、店や生活に必要なもの、ギルドでクエストをこなそうと思っっている。

俺は無言で3枚わたす。

「まいどあり。あんたたちは205号室だよ」

その後すこし説明を聞いた。説明といっても2階だから重たいものを落とすと下に聞こえるからやめたほうがいいなどである。木造ゆえ音が遮られにくいとかが関係しているのだろうか。

部屋につく。階段を上がってすぐだった。扉を開けるとまず廊下。トイレと風呂がありむこうにリビング。中央にテーブルがあり左側にベッドが4つ。床はもちろん木である。ここの値段はそこそこ安いがそれなりに綺麗なようで安心した。

「おー、なかなかいいねーこー」

だな。村の宿もよかったが、こっちもなかなかのものだ。

「俺は少しゆっくりしたい。お前はどつする」

「あたしはねー、うーん……いろいろ見てくるよ」

「迷子になるなよ」

「子供じゃないもん！」

そういい、元気に扉を開けてでていった。いろいろ見てくるとか言
ったが何を見てくるつもりなのだろう。この施設についてのことだ
ろうか。だとしたら入口のロビーくらいだが……まあいろいろ気に
なることがあるのか？ というかそもそも中を見てくるなど言っ
ていないな。外にでもでるのだろうか？ まあ、いい。

鎧を脱ぎ、ベッドに転がる。

少し……ねるか。

ギルド登録（後書き）

ちなみに下の部屋がホタリン達だったりします

温泉にて（前書き）

12月9日誤字発見したので直しました！

ほかにもあったらご指摘願います

温泉にて

あたしは部屋を出ておばちゃんと話をしている。

なんていうかー、いろいろ知りたいじゃん？

「おや、さっきの娘かい」

「あの一、人探してるんですよー」

「ほう、どんなヤツだい」

「えーっと、バカな人とお姉さんの人とお笑顔な人………みたいな？」

「それだけじゃわかんないね」

「そですかー………」

あー、そう言えば昨日お風呂入れてないんだよねえー………温泉とか入りたい気分だ。

「あと、温泉とがあります？」

「あるよ。ここから少し離れたところだけど、そこもあたしのモンだい。入りたかったらいきな」

よし、アルス誘おう！

そう決意しあたしは部屋にもどり、アルスを呼びに行ったんだけど

「……………」

寝てるー！寝てるよー！

そおーっと近づき……………

「わっ！」

「ん？」

ちよっとは驚いてほしかったかな……………

「温泉いこっ！」

「ここにあるのか？風呂も部屋に1つずつあるだろう」

「いや、そこに別にあるんだってーね、いこっ？」

「あとでいく」

「らじやー」

よーっし、しゅっぱーっ

えーっと、おばちゃんはここを一直線って言ってたよね……………ああ、あれかな？

そこは大きな施設みたいになっていて日本でもある銭湯みたいだ

中に入る。女湯をくぐり、服を脱ぎ、中に入ると……

日本の銭湯に超にっていた。 ええ！

まあ、いいつか。普通に身体を洗い、湯につかる。

結構人が多いようだ。 入る余裕がある場所……あ、あったあった

金髪で髪が肩甲骨くらいまでありそんな女性の横に入る

「お隣失礼しまーす」

「ごっぞ」

「気持ちいいですねー温泉」

「そうね。あたしも今日ここに温泉があるってきいてね」

「お姉ちゃんも宿に泊ってるの？ まさか、旅人とかー？」

「んー、そんな感じよ 3人で来たけど、あと2人は男湯にいるわ」

「へえー……」

と、会話をする。なんか誰かに似ている……話しながら顔を凝視するが湯気でよくわからない。

「どんな人ですかー？」

「えっと、1人が赤髪で魔法使いの人で、もう一人が戦士してる人よ」

あれ？ 赤い魔法使い？ 戦士？ もしかして……

「その魔法使いの人ってバカだったりしますか？」

「え、なんでわかったの？ あれ？」

急に顔を近づけてくる。さっきよりも細部までわかるようになる。あれ？ もしかして！

「コロネ！？」

「リサ！？」

「久しぶりiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

「心配したんだからもう！」

コロネだ！ わーい！ なんか感動！ 感動の再会ってやつだよね
コレ！

「そういえば、あんたは一人？」

「いや、アルスといっしょー」

「ほんとに！？ よかったー 結構早めに合流できたわね」

「そだねー」

その後これまでの短かったけど長く感じた間の出来事で会話に花が
さいた。ホタリンの魔法の使い方がありえないこと、マカロニさん
と龍を倒したこと。

あたしはアルスが意外に攻撃力がはんばなかったことを話す。

「ええつ。アルスってそんなにめちゃくちゃなんだ……」

「うん！ 10メートルくらいある恐竜みたいなやつは攻撃を素手
でとめてたし！」

「さすがすぎる……アルスっていろいろと謎なのよね」

「謎？」

「レベルとか教えてくれないし、武器も持っていないのにソロしてる
みたいだし」

やっぱりアルスっているんなところが謎なんだね

あー、眠たい。眠たいが昨日風呂に入っていないから入らないとい
けない。というか汗臭い気がするので入りたい。風呂にはいるか。
だがりサと一緒にくるように誘われたこともあるし、承諾した俺は
行かなければならない。さっさと入ってくるか。

カウンターで場所を聞いた俺は歩く。この道をまっすぐいったつき
あたり………ここか。見た眼は日本とかわからないな。

中に入る。中もそんなにかわらない。というか一緒だ。さて……と眠たいながら俺は2つにわかれたのち青い布が下がっている方に行く。銭湯はとても小さいころ母と行ったことがある。あと姉ちゃんと一緒に来たことがあるけど一緒に女湯入ったら変な目でみられたな。

鎧を脱ぐ。ロッカーがあつたので入れる。インナーは下半身だけになつているので脱ぐのは難しくない。

あれ？　なんか周りの男性達がこっちをじろじろ見ているような……気のせいかな

眠たいからどうでもいいかと割り切つて扉を開けて浴場に入った。

「なーマカロニさん」

「なんだい？」

「女の子とか間違つてはいつてこないかな」

「あはは、そんなことおこるわけない……」

がらがらがら

開いた扉の向こうに銀髪の美女がいた

僕がホタリンのくだらない話を否定しようとしたらこれである。

なんでこっちみてるの？　みたいな顔してるから間違ってることに気づかないのかな？

「うおおお！　やべえええ！　胸でけええ！　ぶふあー！」

隣でホタリンのテンションが跳ね上がり、鼻血を噴き出し、気を失った。

「……………」

よし、部屋にもどろろ

リサと話していたら一人の客が入ってくる。

するとリサがこっちこっちと腕を振る。当然その女性がこっちにくる。

そのままリサが席をゆずり、そこに座った女性の脚の上のった。

知り合いなのかな？

「遅かったねー」

「間違えて男湯に入ってしまった」

「えええええー！」

「そんな感じだ」

どんな感じだ……

「ごめんちょっと……意外すぎて」

「そんなに意外か？」

「うん、ものすごつく。ホタリン達も驚くでしょうね」

「驚かれるのは好きじゃないんだが……」

アルスと会話する。そういえばアルスと会話したのって初めてかもしれない……アルスをペアに誘ったこともないし、5人でいくときだけは来てくれるけど、いつもソロやってるし、しゃべる機会がなかったのよね……

「アルスって意外にしゃべれるのね」

今一番そこが気にかかった。まったくしゃべってないからマイク壊れてるんじゃないかと思ってた。

セカンドワールドは特定のギルドメンバーに設定で音声会話をONにした場合、パソコンにマイクを差し込んでしゃべりながらプレイすることもできるのである。

「あたしがいったの！　しゃべったほうがいって！」

リサが元気よくいう。あーそうか。リサだとそうさせるかもしれないな

いわね……というかりサに会話しないことなんてできないと思う。

「へえー、大丈夫なの？ アルス」

「何が？」

「普段しゃべらない分しゃべるの疲れるかなってね」

「そうだな……会話も悪くない。暇つぶしには最適だな」

おお、意外に会話が嫌いってわけでもなかったのか……

しかし、ねえ

女なんて……

改めて自分の横にすわるアルスをみる。

身長は170くらいかな？ スリムな体つきをしていて、胸がでかい。リサがまくらみたいになっている……。あー、自分の胸がさみしい。

脚にリサを載せてるところがなんかお親子みたいでほほえましい。

「なに笑ってるの？ コロネー」

「いや、親子みたいだなあーって思ってね」

「そんなもんだ」

「いやちがうでしょアルス！」

さあーって、そろそろ上がらないとね。

そついい、わたし達は風呂を出た。

着替えはどうしようか。また着るのもなあーと思っていたらどうやら袴はかしてくれるとか。そのかわりちゃんと洗濯して返せとかなんとか。まあ安いからいいんだけどね

男湯と女湯の分かれ道の少し前の休憩所の所で牛乳らしき飲み物が貰えたので3人で飲む。

風呂上がりの牛乳って最高だと思っただわたし

その後ホタリンとマカロニさんが帰ってるかもしれないから2人をつれて宿に向かったのであった。

温泉にて（後書き）

ちなみにコロナの髪の毛が肩甲骨くらいまでのびてるのはポニーテールを解いたからです

そして集まる（前書き）

12月11日誤字見つけたので訂正しました。

そして集まる

「ただいま」

コロネが部屋入り、続いてリサ、俺の順番で部屋に入る。途中で在留している宿が同じだったことに気づいた俺達は宿の1つの部屋にまとまって泊ることにしたのだ。金の節約のためだろうか。コロネいわくそっこのほうがいいじゃん？ とのこと。

中に入ると俺とリサがいる205号室とあまり変わらない。当たり前か。中には浴衣姿のマカロニがテーブルで紅茶のようなものをすすっている。ホタリンはベッドに寝かされている。のぼせたのか？

「ど、どうしたの？ ホタリン」

コロネが心配そうな声で聞いている。意外と心配症なのだろうか。リサはキョロキョロしている。特に変わったところもないと思うのだが……。

「男湯に綺麗な女性が入ってきてね。鼻血出してこのありさまだよ」

「心配して損した！」

男湯に女性……俺かもしれないな。なんとなく入ったのが男湯で男湯と女湯の布がかかっている間にあるカウンターに立っている若い女性にあわてて女湯のほうにひきずられたのだが、そんなに驚くことだろうか。まあ、別にここで申告するほどのことでもないか。と思うので俺は何も言わない。

「それってアルスじゃない？」

俺は何も言わなかった。がかしりサがいつてしまった。するとマカロニが何やら不思議そうな顔をして、聞いてくる。

「えっと、君。あのアルス……なのかい？」

「ああ」

一瞬目を開いて驚いたような顔をしたが一瞬で普段通りに戻った。さすがマカロニ。リサやコロネのように「ええええええ！」なんていわないな。

「久しぶりアルス。心配したよ」

いつもの笑顔で腕を出してくる。握手だと判断できたので握り返す。

「悪い」

「それにしても驚いたね。中身はどんな人が気になってたけど、予想のななめ上をいかれたよ」

俺が予想のナナメ上だったならマカロニの中の俺はどんなものだったのだろう。上が男ではなく女だとしたらナナメは……うーむ。まあいいか。

「ホタリン、大丈夫なのか？」

「心配なのかい？」

「一応俺のせいだ」

ホタルンの寝ているベッドに近づき、顔を覗き込む。幸せそうな寝顔をしている。と、そのとき目が開き、まじまじと見つめられる

「ん……あれ？ あ、裸のお姉さん！ 袴姿も美しい！ ぐぼはっ！」

俺の顔が目の前にあったため風呂での出来事がフラッシュバックしたのか左鼻から赤いラインが滴る。すかさずコロネが殴った。

「変態！ それにこいつはあのアルスよ！」

「嘘つくならもつとマシな嘘つこつぜーコロネ、なあーお姉さん」
ホタルンが俺の肩に腕をまわして言う。というか『あの』の部分が非常に気になる。

「お姉さんじゃない。アルスだ」

「え？ いや、お姉さんつたらノリがいいんだからーもお」

（ 、 、 ）

今のホタルンを絵文字で表すとしたらこんな感じであろう。

「……………」

「え？ コレまじなパターン？ うっそーんマジかよ！ えーっと、アルスひさし、久しぶりい！」

噛んだ。なぜか緊張でもしているのかのようなしゃべりかただな。まあそのうちなれるだろう

「だな」

するとホタリンが状態をおこしたまま、周りを見回す。そしてしゃべる

「んにしてもまあー、なんかすぐ集まったな！」

「結構大変だったわよ？」

「そうだね」

「うん！」

みんな口ぐちに返事する。『すぐ』……がホタリンにとってどれくらいの期間なのかはわからないが全員同意していることからおそらく『すぐ』に当てはまるのであろう。

「よし！　じゃあ今日は一杯やりますかあ！」

そついいホタリンがキッチンのような場所にすたすた歩いていき、棚を開ける。中から冷気が出ているところからして冷蔵庫と思われる。この宿は意外となんでもそろっているのだな。と関心したつかのま、とりだした瓶の中身を、ガラスのコップにつぎだした。ほのかに匂うアルコールのような香り。

「え、ええええ！　ビール！？　それ！　のんで……いいの？」

と、リサ。あれはビールなのか？ どっちかというと酒のようだが……まありサが言いたいことはわかる。というかよくもあれだけ買いだめできたな。クエストでいろいろ金も集まっているのだろうか。

「大丈夫！ オレたちやこっちじゃ立派な大人なんだからな！ はんっ！」

「中身は子供だけどね」

と、コロネが酒を飲みながらつつこむ。

「あははは、言えてるね」

マカロニもグイツとコップを空にする。

「マカロニさんにまで言われた……」

少々ブルーになるホタリン。漫才のようで見てて面白いな。

「あたしも飲んでみるうー……ゴクッ　ゴクッ　ゴクッ」

リサが慎重という言葉を知らないのかいきなりがぶ飲みしている。

「大丈夫なのか？ お前には早そうだ」

俺は一応聞いてみた。なんか顔も赤くなってきたりし心配になってきたからだ。

「だーいじょーぶだーいじょーぶ、あたしはむこうでは立派な中学生なんだからあひゃひゃひゃ」

「もう酔ってる!？」

コロネが驚きつつつつこむ。一瞬でここまで酔えるものなのか……そのままりサは机につつぷして寝てしまった。

「……………」

俺は無言でリサをベッドに寝かせてやった。熟睡である。

「リサには早かったかー」

ほっぺをかきながらホタリン。そう言うお前は何歳だといいたところだが15とかそこらへんだろうと思ったので聞かなかったがコロネが違ったようだ

「あんたもそんなに変わんないでしょ!」

「ええ! オレあ高校2年生だぜ!？」

「うそでしょ!？」

うなだれるコロネ。ショック受けすぎだろう。

「え、なに!? なんかごめん! まじで!」

そしてホタリンより年下だったらしい

「わたし……16……」

「まじで……」

という俺の予想は外れていなかった。俺も意外だ。てっきり18とか少なくともホタリンより上かと思っていた

「アルスはどれくらいなの？」

マカロニが相変わらずの面白そうな笑顔で聞いてくる

「18だ」

「うお！ 意外と若い！」

「そうだね。僕はてっきり25歳くらいかと」

俺ってそんなに大人っぽいか？

「ちなみに僕は17。ホタリンと同年代みたいだね」

意外とみんな高校生だったんだな。まあ悪くない。同世代のほうが話しやすいしな。

「ほえー……アルスは意外の連発だなあーマジで」

「そうか？」

俺はコップを口につけ、傾ける。なかなか上手いなコレ。

「すごいミステリアスだね」

と、マカロニ。それはどういう意味だろうか。そのままか。

「たしかに……………」

「そんなにか?」

「うんめっちゃ。女の子だったこととか胸が大きいところとかぐふあ! 痛え! コロネ痛い!」

「きも! 変態!」

「あははは」

ホタリンがコロネにぼかぼか叩かれている。なんというかほほえましいな。フッフ……………」

「うわ! アルスが笑った!」

「笑ってたか?」

「うん、わたし初めてみた。っていうか顔もさっき初めてだけど」

「すまない」

驚かれたのでなんとなく謝罪。別に心から謝っているわけでもない。そのゴミすてといてといわれゴミ箱にすててあげるくらいの軽い気持ちである。

「いや、別に悪いとかじゃないって！ ほらもつとー……笑いなさいよ」

コロナがおかしなことを言う。笑え……か。たまに思い出し笑いとかで笑うんだが。

「ああ、努力はする」

「うんうん」

ホタリンがなぜか満足げにうなずいている。なぜか気になったがどうせどうでもいいことだろうと思いき思考を放棄する。

そのあと、俺達は深夜まで飲むことになった。ホタリンは途中で机に突っ伏したので俺がベッドに運んでやり、マカロニはそれを面白そうに見ながら「僕もそろそろ」といい寝た。

のこったのはコロナと俺

「ああー、たくさんのんじやったわね」

と、笑いながらコロナ

「だな」

俺もそこそこ飲んだ。

「それにしても、早めに集まれて本当によかった」

「心配だったか？」

「そりゃもう」

そういうと欠伸をしながら眠たい顔で言ったのだった。わたしも寝るね、と

俺も……ねるか。

そして集まる（後書き）

やっと俺とあたしを終わらすことができました。作者は一安心です。
これからもよろしくおねがいます。

平和な日常 上(前書き)

最初はダラダラした日常を遅らせようかな？なんて思っています。

平和な日常 上

あれから数日、ギルドで稼いで金が集まり（普通に生活できるくらいかな）、そこそこ平凡な、でも楽しい日々を送っていた。それから特に変わったこともなく、アルデートもめっちゃ平和だった。あの魔物の群れとかおそらく勇者目的だったんだな〜っということに暇を持て余したオレことホタリンはベッドにてダラダラしているのである！

「あ~~~~~」

やばい！ 日差しがちょうどあたって暖かい！ うおー！

と、なかばテンションがあがりつつオレはベッドの上で高速回転しているところさ

ちなみにコロネとりサとアルスは買い物らしい。マカロニさんから聞いた。

なにすっかなあ〜

「なあマカロニさん、なんか良いことない？」

テーブルで紅茶を飲みつつ新聞を眺めていたマカロニさんがこっちをふりむき、最高の笑顔で言う。

「ない」

うおおおおお！ 言い切った！ 言いきられた！

「っていつのは嘘だよ」

「うそかい!」

なんだ、びつくりしちゃったじゃんか……あれ？　なんか面白がつてない？　マカロニさん

「この記事なんだけど、どう？」

そついいマカロニさんは新聞を裏返し、その記事を指でさしてくるのでオレは立ちあがりその記事を読んでみる

『新しくオープン』

この前新しくオープンした防具店のボーグウツテルンに来てみませんか？　さまざまな防具がある上に一般人が着るような私服など、見た目重視されたものから性能重視されたものまで勢ぞろい！

「ほら、僕達の服つてこつちの世界じゃ存在しないものだからなにかと目立ってると思うんだよね」

「なるほどおー……」

つまり……だ

「イメチェンってことか!」

「……まあ、わかってくれたらいいよ」

ということイメチェンのためにそのボーグウツテルンという店に

行くのであった。

（15分後）

「遠かった……………」

「そうかい？」

「……………結構でかいな」

「同感だね」

そこはレンガで造られているもので軽く日本のデパートレベルの大きさの建物だった。3階建てらしく、1階が性能重視系装備、2階がおしゃれ重視装備、3階が普通の私服……………と、店の外壁にペンキつばいやツで書かれていた。

中に……………はいる。

「ひろ！」

中はむこうがわが霞んで見えない……………ひろ！ 横は……………ギリギリだが壁らしきものが見えた。まあオレの視力の問題じゃねえの？と言われればそうかもしれない。むこうの世界では眼鏡を使うこともあったなあ。授業中に黒板がどうしてもみえなかったときだけだけ。あ、そうだ、ついでに眼鏡も買っところ

「ほんじゃーどこいく？ マカロニさん」

「うーん……………じゃあ1階の性能重視は大丈夫そうだから2階からい

「うん」

「おけおけー」

ふむ、2階に来てみた。いろいろあるなあー……………

「これよくね？」

オレがさしたのは龍騎士が着るような鎧だった。

「きてみたら？」

言われたので試着室を見つけ、来てみる。

「どっ！」

「ホタリン、これ持ってみてくれない？」

そついいマカロニさんが鎧と同じ灰色の両手剣を召喚し、ほつり投げってくるからキャッチする

「似合ってるね。それにどっからどうみても戦士だよ」

「え？ まじでー 買っちゃおうかなコレ！ ギャップ萌えだよな
！」

戦士か。戦士として戦うのも面白そうだな！

「萌えはないと思うけどね」

ほかにはー…………とキヨロキヨロしてたらマカロニさんが何かに気づいたあとなにやら白と黒のモノクロな感じのやつを持ちながら

「これ、きてみてよ、あとついでに髪の毛をとかしてきてね」

と、笑顔でいう。何が面白いんだかよくわからんけどとりあえず着てみよう！

「おつおつ」

試着室で着る。なんか、スカート状だなコレ。魔術師のローブっぽい感じ？ にしてもこんなヒラヒラとかついているものなのか？ そしてなんだこれ、リボン……………？

と、一応着てみる。鏡は外にあるので今自分がどんな格好なのかわからない。そして言われた通り髪を手串で直す。こんなもんか？ とりあえず、出てみよう

「どっ！」

じゃーん

「クククク……………、似合う、似合ってるよすっごくクククはははは……………」

おもつくそ爆笑された。必死にこらえてるけど……………っていうかなにがおもしろいんだ？

と、鏡の前で自分の姿をみてオレは血の気が引いた。

「おいしいおいしいなに着せてんだマカロニさんんん！！！！」

あはははは大丈夫大丈夫と腹を抱えて笑うマカロニさん。絶対ド
Sだ……………

今日も暇だからわたしはリサとアルスを連れて新しくできた店にい
くことにしたのだ。服もこの鎧しかないしアルスに至ってはポロポ
ロだしね

ということでホタリンはまだ寝ていたので武器の手入れをしている
マカロニさんに行ってくるーといい出てきた。

出向く場所はボーグウツテルンである。

「あー、あつたあつた！」

リサが発見する

「だな」

とアルス。

店の入り口の前になにやら文字が書いてある。1階が性能重視、2
階がおしゃれ重視、3階が私服……………か。

「どこからいく？ わたしはどこからでもいいけど」

「じゃー3階から順にいこうー」

「そうね」

まずは3階……いろいろあった。ドレスから農作業にでもつかうようなヤツまで。なんでそんなのがあるの？ とか聞きたくなるようなやつもあつたけど言わないでおく。

「これいいかもー！」

とリサが1着つかんで試着室に走りこむ。そしてでてきて元気に言う。

「どっ！」

それはシンプルな白いワンピースだった。髪の毛を外したのが長い水色の髪がまっすぐ腰のあたりまでのびている。そして頭に猫の耳のようなものが付いていてお尻からしっぽが伸びている。

「うん、すっごくかわいい！」

「ありがとうー！」

値段は………安いみたい。買ったとっつ。

「じゃーわたしも………」

とどれ着ようか悩んでたところにリサがどこからか赤い感じの服を持ってきていた。

「これ着てみてー！」

「着てみるね」

そう返事し、持っていた服を受け取り、着ている鎧を解除し、もってきた服を手にとる。赤い布……このヒラヒラのフリルはゴスロリ系かな？ うーん……スカート部分はふくらはぎまでであるわね。あとこれはー……………カチューシャ？ 頭につけてみる。

「つけてみたけどー……………似合ってる？」

「おおお、綺麗！ 綺麗だよお姉ちゃん！」

「似合ってるな」

結構好評らしい。大きな鏡があつたので見てみた。するとそこには赤と黒のドレスのようなものに身を包んだ自分がいた。こういう服は着たことがないけどいいかもしれない。

「うん、ありがとう」

「じゃー次はアルスの番だねっ！」

「俺か……………」

「どうしたのー？ アルスー」

「服買ったことないから俺」

ええ！ うそでしょ！

「うん、まかせて!」

と心の中で驚いていたら素直にリサが引き受けた。

「わたしも手伝うわ」

「たのむ」

アルスの似合う服、ねえ……………

アルスを改めて見てみる。服は人に合わせた方がいいしね。

鋭い目、透き通るような銀髪、胸、そして細い四肢……………鎧姿しか知らない時だったら絶対想像できなかった。絶対。

うーん。全体的にみたら大人っぽいから大人っぽい服がいいわよね

考えていたらリサが何やらもってきた

「これ!」

「これ、か?」

といい試着室に入って……………出てくる

「水着じゃないのか?」コレ

ビキニだった。

ってなにやってんのよりサ! っていうかなんでこんなものが!?

「でも似合ってるよー」

とりサ。

うん、似合ってる。似合ってるけど！ けど！

「うーむ……………」

いやなに悩んでんの！ そんな格好じゃ外あるけないでしょ？

「ア、アルスそれはちょっと……………はずかしんじゃない？」

「そうか？」

「そつよー！」

え、恥ずかしくなかったの？

「じゃあー、アルスはなにがいいのー？」

「鎧とか」

鎧……………まあアルスらしいといえばアルスらしい……………

ということであたしたちは鎧がありそうな2階に向かうことになった

3階のカウンターを通りすぎ、下に降りるための階段を下り、2階
に行く。ここはずいぶんと広い。1日じゃ見きれない。

降りてきた2階もかなりの量があるので、鎧コーナーなんていう場所がむこうに見える。

アルスとリサと一緒に鎧の所に歩いていく。

すごい量だなあ本当に……と歩いていたら

「おいしいいいいなに着せてんだマカロニさんん!!!」

ホタリンの叫び声が聞こえた。え、何ホタリン達もいるの？

「マカロニさん達もいるのかしら……」

「おもしろそうだからいつてみよー!」

叫び声が聞こえた場所についたと同時に、わたしとリサとアルス（アルスはいつも通りだが）は硬直した。

「ええ……」

「ホタリン……あんなそんな趣味が……」

「……」

そこにはメイド服を着たホタリンがいたからだ。ちゃっかり髪もとかしているしリボンもつけている。

「ちょっと、マジなトーンで引くなし! それにこれはマカロニさんんが!」

「え？ なんのことかなホタリンあははは」

「ええええっ！ おいしいいいい！ いや違うよ？ 違うんだって！
違うんだあああああああ………」

地面に両腕をついて訴えだす。

何？ どういうこと？ と疑問に対する回答を求めて隣で爆笑しているマカロニさんに聞いてみることにしたが笑いをこらえるのに必死で今は無理なようだ。

「ああ、終わった……オレの築き上げてきたイメージ像が今砕け散った………」

何やら絶望しているホタリン。アルスが近くに歩いていき、かがみ肩に手を置いていった

「似合ってるぞ」

「それ慰めてんの？」

平和な日常 下(前書き)

作者の気分でホタリンをつっこみ役にしてみました。

12月13日誤字見つけたので直しました！

平和な日常 下

ここはボーグウツテルン2階

さっきの悲劇をコロネとリサに必死で弁解しているところである

「んーまあわかってるけど……なんかねえ」

「ねえ」

コロネとリサが顔をみあわせる。あー、もう死にてえ（笑）

アルスはとくにどうも思ってたらしい。さっき「いやこれはマカロニさんが……」とか説明したんだけど「気にするな」っていつてくれた。そう、オレはそういう返事がほしかったんだ……！

ああ……さすが男湯に入ってくるだけあるな……男のロマンをわかってやがるぜ！ ん？ 男のロマンは関係ないだろって？ ごめん

その後マカロニさんとコロネとリサは武器が見たいとかいって3人で固まってどっかいった。たのむからもう変なことしないでくれマカロニさん！ 別れ際に微笑んだのが怖いんだよ！

と、いうことで現在アルスと2人で鎧を見ているんだが……

「……………」

「……………」

なんか気まずいのである。

「こ、これなんてどうだ？ 堅そうじゃね？」

「だな」

返事が短いぜ！ まあそれがアルスクオリティってやつ？

「アルス先輩はどんな鎧がいいんスカー？」

「呼び捨てでかまわん。うーむ……そうだな。動きやすそうなヤツと防御力重視なやつがほしいな」

後輩口調はネタなんですけど。まあ実際先輩ですけど。うーん……動きやすそうなヤツ……お、これいいかもしれねえ！

「これとか動きやすそうじゃね……！」

オレが指さしたのは紅色の女武士用のもので動きやすそうなヤツだ。ジャッパーン産と書いてある。とりあえず服は肩と太ももが出ていて動きやすそうだ。絶対領域って大事だね。それに、腰からぶらさがってるアーマースカートがなんかミニスカっぽくてムフフな感じだぜ！

「ふむ……装着時にアナタの攻撃力を上げますビツクリマークか。一応着てみよう。」

ビツクリマーク普通に読んじゃうんだ。……これがアルスクオリティなのか！ そうなのか……！ うおおおおお……！！！！

「武装解除」

その場でインナーと包帯になるアルス。

……。

おいおいおいおい！

「アルス試着室でやれよ！ オレ的には大歓迎だけど！」

「そうか………すまん」

そのまま試着室に言った。 やれやれ………なんかまわりのお客さん達がこつちチラチラみてんじゃんかよ

つていうか攻撃力上昇らしいけどアルス使うのか？

「よし」

試着室からの声。 布のカーテンが横にスライドする。 そこには………
…！

すんげー綺麗な女武士がいた。

「………似合うか？」

「ぶふぉ………似合いですぎだぜ………アルス………」

くそ、なんか鼻血が……

よく見てみると胸元がすこし見えてるんだな。 肩から肘までが露出

していて肘から下に鎧が付いている。その鎧が細い腕を包みこんでいる。胴体も薄い鉄の板が器用だがシンプルに飾られていて綺麗である。腰から鎧の板がぶら下がっていて、そこから膝の少し上までが丸出した。これデザインした奴でてこい。友達になろうじゃないか。

そして全体をもう一度見る。鎧というか兜だなこれ。

「そんなによかったか？ なら1つはコレで決まりだ」

そうして1つは決まった。あともう1つは……… 防御力重視だったけ？

うーん………と悩んでいるとアルスがなにやら見つける

「これ……いいな。硬そうで」

アルスが手に取ったのはものすごくごっつくてどこが頭だかよくわからないものだった。

「つけてみれば？」

気にいったなら試着するべし！ これ基本ネ！ ということで試着をすすめる

「装着すれば移動はかなり封じられる半面それに見合った防御力はあるそうですねビックリマークビックリマークビックリマークビックリマークか、着てみる」

ビックリマークをわざわざ3回も言うのかよ！ めんど！ っていうか説明文描いたやつ自信なさすぎだろ！ なんだよありそうです

よね？ って！

試着室から鎧がこすれ合う金属音が響いてくる。そしてシャーとカーテンがあく。

そこには……………

なんかしゃべったら殺されそうな雰囲気醸し出している大男がいた！

いや、詳しく言えば、脚は膝に禍々しいトゲがついていて腰は重たそうな板がぶらさがり胴体は複雑に入り乱れている。肩にもトゲが付いていて刺さったら痛そうだ。ヘルメットは……………額に立派な角が左右に生えていて真中についている宝石のようなものが黒く光っている。そして顔は完全に見えない。

要するに禍々しい。

「ふむ……………やっぱりこいつずっとしりくるのはいいな」

「いや怖いよー！」

「そうか？」

まがまがしい鎧を着たまま鏡を見るアルス。なあ、お願いだから早くはずして？

「うーん……………」

と、アルスがその鎧を着たまま店員さんに質問しだした

「強度は？」

「えーっと、うわっ！ すいませんえーっとじじじ実際そこまでないらしいですほんとに。みみみ見た目重視といますかかかかか…」

「これとどっちが硬いんだ？ 装着 ダイナミック 闇色鋼ノ鎧 アーマー 手甲 アームス」

腕の部分だけが召喚されて店員が触って調べている

「こここっこのほうがぜったいたた高いですうううっ」

おい！ 店員さん震えちゃってるじゃん！ っていうか、んなおびえるならそんな商品置くなよ！

鎧がこすれ合う音を響かせながら目の前で腕を組む。いやだからはずせよ！ 怖いんだって！ そのままオレを素通りして試着室で脱いできた。出てきたときはいつもの碎け散った鎧だった。

うん。

「やっぱりアルスはそれが一番だぜ」

「そうか」

んじゃーもういいかなあ

「最後に一ついいか？」

「お、おう」

近くに置いてある銀色の表面が無駄にツルツルしている鎧の腕の部分だけを手にとる

そうか、なるほど。アルスの右腕はほとんど無防備だからほしいのか。

「これください」

そうして、波乱の買い物は終わったのである。

宿にもどる。みんなはどんなのなんだろうか。微妙に楽しみである

「ただいま」

「……………」

オレとアルスが玄関からリビングへつながる扉を開けるとそこには新しい服に身を包むコロネとリサとマカロニさんがいた。

「おお、コロネそれ似合うじゃん！」

コロネは赤と黒を中心とした感じの高級感あふれるドレスである。頭のカチューシャもにあうぜ！

「そ、そう？」

「うんめっちゃ」

「あ、ありがとう……」

「コロネがなんかモジモジしている。かわいいなオイ。」

「リサもかわいいな」

アルスが言うのでリサを試してみる。うお！ 猫耳に猫のしっぽ！
そして白ワンピース！ これは………萌えだな！

「鼻血……でてるぞ」

おお、ハンカチさんきゅーなアルス。

「マカロニさんラフだな」

マカロニさんはTシャツに黒い感じのジーパンだった。そしてニッ
ト帽。テラ私服である。

「こつ見えて実はものすごい対魔術性能なんだよ」

まじで………なんかさすがだな。

「2人は何買ったのー？」

と、しっぽをふりふりさせながらリサが言う。っていつかそれ動く
んだ！ かわええ！

「オレはこれさー！ よっこいせ………じゃん、どっぴでこー」

オレは着ている魔法使い用のローブを脱ぎ、戦士用の鎧を付けてみる。ちなみにローブの中はインナーだ。装備はなんか動きづらいから戦う時以外は付けないようにしているのだ。

「うわーすごい戦士っぽい！ それになんか似合うね！」

「そうね」

「ギャップ萌え狙ったんだぜ」

「萌えは無いけどね」

マカロニさん、ツツコミが鋭いっス……………

「アルスはー？」

「俺はこれだ」

そついい鎧を外して下着姿になるつとする。

「ちょ、アルス！？」

そのままコロネがあわててリビングからアルスをひっぱって廊下で着換えさせた。ちっ！

でてきたアルスはオレが選んだかわいい鎧姿である。

「かわいいー……………」

「似合うわね……………」

「そうだね」

「む、ありがとう」

みんな口ぐちに称賛。アルスが照れくさそうに礼をいう。無表情だがそう感じたからそうなんだろう。

「ちなみにこれはオレが選んだんだぜえ！ このむな元とかふとももとかハンパねえよなくふふふ」

「……………」

「いや、冗談冗談！ 嘘だって頼むからそんな目で見ないで！」

食事を取り風呂にも入りあとはベッドに転がって寝るだけの時間帯。

そんな時、マカロニさんがこんなことを言う。

「そういえば、この服って装備みたいに解除できるのかな？」

「やってみようぜ！」

オレは袴の上から今日かつた戦士っぽい鎧を着てから叫ぶ

「解除！ ドラグーンメール！」

ちなみにオレの着る戦士っぽい鎧はドラグーンメイルという。そして叫んだあと装備が青く光り、光の粒子となってポーチの中に吸い込まれていった。

「すげええええ！」

「楽ね わたしは着てみる。 装着 ルブムランドレス」

コロネがポーチから出てきた赤と黒の光の粒子に包まれ……次の瞬間にはもうドレス姿だった

「すごい便利じゃないコレ」

「そうだね。僕はこのままでいいからいいや」

マカロニさんのはそうだな。

「アルスも着ろよ」

ちなみにアルスは風呂の後だから袴姿である。袴も似合ってるな……和風系似合うんじゃないかね？ ほら、着物とか

「装着 東国ノ鎧 紅桜」

アルスが紅の粒子に包まれて……装着される。

リサは……すでに寝ていた。ネコセットを装備しながらネコのようにベッドにくるまっている姿が愛くるしい。

「でもこれで戦闘によって瞬時に切り替えられるから本当に便利だ

ね

とマカロニさん

「だな」

アルスが返事。アルスは防御重視と軽さ重視を使い分けるらしい（
つてリサから聞いた）からそうだよな。

「あ、そうだ」

マカロニさんが思い出したようなしぐさをして言う

「ホタリン ゴシックメイドって言うってみて」

「お、おう…… 装着 ゴシックメイド！」

黒と白の粒子がマカロニさんのポーチからでてきて、オレを包み一瞬にして服が装着される。

「やっぱ……似合うね……ククッ」

「……」

「……」

ん？ なんだその変態を見るような目は……まさか！

自分の服を見る。

……。

「メイド服つうつうつうつうつうつうつうつ……」

くそ……マカロニをたすおぎぬして……

するとアルスがオレの方に手を置いて、言う。

「似合ってるぞ」

「だからそれ慰めてんの？」

王宮からの手紙（前書き）

12月14日誤字発見しましたので訂正しときましたー

王宮からの手紙

買い物した翌日、昼くらいに宿のおばちゃんがオレ達の部屋に来た。

「ほら、手紙だよ」

受け取った手紙にはアルデートを救った英雄様達へと書いていた。
英雄かぁー………なんかすごいことなってるのかなオレら

とりあえずみんなに報告

「おいみんなー、なんか手紙きたぞー」

みんながオレに注目する。マカロニさんが新聞から目を離し、リサが煎餅みたいなのをかじりながら、アルスは鎧の手入れをしながらこつちをむく。

「へー、え、わたし達に？」

「おう、アルデートを救った英雄様達へ ってかいてるぜ」

「ふーん、読んでみて」

コロネの言うとおりに読んでみる。

「んー、なにににー？ 今度ハイワードでコロシウムが開催されます。全4国から特に強いものを参加させるものなんですけど、もしよければアルデートの代表としてでていただけませんか？ アルデートを救ったあなた達ならきっと勝ち進んでくれるでしょう。もし了

解してくれるのでしたら明日の昼時、お城の門に来ていただ
けますか。詳しいことはそこで伝えます。待っています。 アル
ト王妃より」

えーっと、つまりー……

「大会への招待状だね」

と、マカロニさん。なるほど……それも代表か……え？

「だ、代表！？ まじかよー！」

「なんかすごいことになってるわね……」

「だいひょー？ なんかすごいー！」

「……………」

と口ぐちにしゃべる。けど

「どうする？ オレ的に特に予定ないし、いいかなあーなんて思っ
てるけど」

一応意見は聞いたほうがいいよな

オレとしてはここにいても暇だし、そろそろ別の国とか行きたく
たところなのだ。

「そうね。わたしも構わないわ」

とコロネ

「あたしは別にいいよー」

リサも同意

「俺もかまわん」

アルスもOKだな

最後にマカロニさんが「うーん……………」と考えるから「僕も賛成するよ」といった。

「よし、決まりだな！」

ということと明日の予定が決まり、なんとなくわくわくしたオレはテンションがあがったのであった。

〜1時間後〜

「あ……………」

オレは今、特にすることもなくて、お決まりのようにベッドの上で高速回転しているのである

え？ さっきテンションあがったんじゃないかって？

よく考えてみれば明日の予定やん。今日の予定じゃないやん。つまり暇やん。

「あんだね……………」

なんかコロネが呆れたような目でこっちを見る。暇で悪いか！おるあ！

と、その時マカロニさんが不意に新聞から顔をあげてアルスに一言。

「アルス、ちょっと手合わせできるかな？」

「かまわん」

「ん？ 何すんの？ マカロニさん」

「いや、コロシアムで戦うからね。すこし対人戦になれておこつかと思つて」

なるほど！

「そついや人と闘つたことねえな」

「いや、山賊達をボコつたでしょアンタ！」

とコロネ。そうだっけ？ あーそいやそんなやつも……………いた……………のかな？

つつーわけで全員で宿の庭に出てきたのである。意外とこの庭広いんだな。

「召喚 魔剣ハルバード」

マカロニさんがよく使う愛剣を召喚する。

「装着 ダイクスタイル 闇色鋼ノ鎧」
「アーマー」

アルスも装着。

ちなみにアルスは普段は袴姿なのである。鎧でいるときもあるけどあれ結構重いから疲れるらしい。

「じゃ、いくよ」

「ああ」

マカロニさんが地面を蹴り飛ばし肉薄。上段から思い切りオノのようなヤリのような剣をたたきつける

一方アルスはそれを鎧が損傷していない左腕でガード。あせりのひとつとも感じられない。

そのスキを狙いアルスが右腕で突きを繰り出す。

マカロニさんがひょいとよけ……今度は左からの薙ぎ払い

アルスが肩でタックルするようにはじき返し、左腕でうらけんをはなつ。だがそれを予想していたかのように後にバックステップしてマカロニさんはかわす。

アルスは基本素手らしい。

「さすがだねアルス。僕も本気でいくよ！」

「ああ」

マカロニさんのハルバードが光る。そして再度肉薄し

「ジャツジメントインパクト！」

上段からのたたきつけ。

最初の攻撃と同じだが破壊力は桁違いなはずである。

ハルバードの刃の部分を左手でつかむアルス。

そのまま押し込むマカロニさん。アルスの脚元の地面にヒビがはいる。

「……………っ！」

アルスが左腕に右手を添える。それによって余裕を取り戻したのかそのままハルバードを横に受け流し右ストレート。

ドガン！

ふつとび地面に激突し砂煙をあげるマカロニさん

「すまん、やりすぎた」

「いや、かまわないよアルス」

「あたしもするー！ 降り注げー ギガスラッシュー！」

リサがいきなり乱入。

無数の斬撃がアルスに集中的に激突し爆発を起こす。煙が晴れたときは左腕を前に突き出したポーズだった。左腕で全て防いだのだから。

そしてすかさずマカロニさんが攻撃！

アルスが左腕でガードし ドオオオオオンという金属音が響く

……あれ？ そういえばアルス盾使ってなくね？

「アルスってただもんじゃないわね……………」

「二人相手に盾もいらねえってか……………」

二人して眺める。アルスの無敵っぷりを。

「じゃ、わたし達も始めましょ」

「え？ 何を？」

「決まってるでしょ。 召喚 旋空手裏剣！」

いきなり巨大な手裏剣が飛んできた。それをギリギリでよける。

「おわっ！ なるほどな……………いくぜ！！ 装着 ドラグリーンメイ
ル……………」

昨日かった戦士用の鎧を装着。

「え、あんた戦士にでもなるの？」

「戦士として戦うのもおもしろそうじゃん？」

筋力上昇の補助魔法を全体にかけてから、地面を蹴り肉薄し、コロネに拳をうちこむ

「へえー、でも、まだまだね」

いい具合に左手でウケ流され、回し蹴りを溝にくらうが鎧を付けているためあまり痛みはない。

「忍者は体術も使えるの、よっ！」

いつのまにか目の前にいるコロネがかかと落としをしようとして脚を上げている。

「なるほど……な！」

左腕でガードし、オレも見よう見まねで蹴りあげる

身軽に空中によけたコロネがそのままクナイを数発投げってくる

「うお、やべえええ！」

とっさに腕を魔法障壁で包みガード

「まだよ！ 秘剣 鎖手裏剣！」

コロネが着地するなり鎖手裏剣を投げってくる

「わかってる、よ！ 氷刀 アイスソード！」

オレの右手に氷でできた刀が出現し、正面から鎖手裏剣を受け止める。

「ずいぶんおもしろい使い方ね。それ」

「だろ？」

すっ すっ と振ってみる。これは冰雪魔法アイスフォームの派生で刀の形に固めたものである。

「こんなこともできるぜ、それ！」

オレは氷でできたクナイを次々に手の中に召喚し、投げまくる

「便利ね、それ！」

コロネがナイフを両手にもって全て叩き落とす。

そのスキに回り込んで氷刀で横に一閃

コロネが上に回避して旋空手裏剣を投げってくる

「だろ！」

左腕に氷でできた盾を作り、受け止める。

「うん、なかなかいいんじゃない？ あんた」

「コロネもなかなか良かったぜ」

握手。

「そ、そうかな……………」

ほっぺがあかい

「照れてる？」

「ちがうわよ！」

ベシッ

ちょうどその時

「うえっ」

「んぎゃー！」

ドオオオオオン

マカロニさんとコロネがこちら側にぶっとんできて砂埃を上げる。

「……………相変わらず固いね」

「もう！ ホタリン達も来て！」

うわー、2人で勝てないから全員でばこっちゃおう作戦か。そりゃいくらなんでも勝っちゃうだろー

「う、うんわかったわ」

コロネはやるらしい

「ホタリン悩んでないできてよー」

「いやリサー、オレは正々堂々とした戦いをだな？」

「じゃあ一番最初にダメージ通った人アルスの胸もめるっていうのは？」

「よしのったアアアアアアアアアア」

そうとなれば本気でいくしかないではないか！

「はあ……………」

「あはは、それじゃ、いくよアルス！ 爆剣エクスペディション！」

俺が知らないうちにどんどん話が進んでいく。ダメージおわたヤツが胸をもむ。か。

別にもみたいならもませてやってもいいんだが。

「爆炎魔法ファイヤーボール!!! 風魔法エアースラッシュ!!!
! 電撃魔法サンダーストームウウウ!!!」

ホタリンが戦士として戦うとか言ってた割に魔法を連発してくる。

ファイヤーボールを右腕でうらけんを思い切りはじく。ちなみに右腕の鎧はなくとも手首から先は一応残っているので問題ない。簡単に言えば手袋のような状態だ。

跳ね返ったファイヤーボールがエアースラッシュとぶつかり爆発。
最後に電撃の太い光線のようなものが俺に向かって飛んでくる

それを右の掌で受け止め、握りつぶす。

マカロニさんが上からエクスポーションでたたきつけてくるが左腕でガードし、その剣をつかんで遠心力を使って投げ飛ばす。

コロネが鎖手裏剣を投げてくる。殴り返してはじき返す。

「大斬波!」

リサの巨大で輝く斬撃が飛んでくる。それをつかみ、リサのいる場所めがけて投げかえす。

そのままその斬撃はリサとコロネの目の前の地面にぶつかり爆発。

「光魔法ジャスティスレーザー!!! 闇魔法ダークストレート!!!
! 水魔法ウォーターバズーカアアアアア!!!」

あいかわらず本気だなホタリン。それにいろいろ使えるんだな。魔

法。

ジャステイスレーザーをよける。後で大爆発。そろそろ使うか。

「装着 ミニアーマー 鏡鎧 ライチャームス 右手甲」

ホタリンの腕が黒いオーラに包まれ、そのまま黒い光線が打たれる。それを俺は右の掌で迎え撃つ。鏡鎧手甲に黒い光線が触れた瞬間逆方向に進路を変え突き進んでゆく。この鎧は魔法体制が強く、反射させることができるらしい。逆に物理攻撃には脆いと説明に書いてあった。

はねかえったダークストレートが俺にせまる水のバズーカ砲と相殺し、威力がかなり落ちる。それを俺は左手で殴って消し飛ばした。

ふむ、こんなものか。

「……………いい練習になったよアルス。ありがとう」

となりで倒れているマカロニさんがアルスに礼をいう

「アルスつよいー……………」

リサが倒れたまま呻く

「最強すぎるでしょあんだ……………」

大の字に転がりつつコロネがいう。

「ああ……………まったく最強だよな……………」

つまり……………だ。

4人で戦ったのに勝てなかったのだ。

アルスは盾を召喚するまでもなく4人と闘い続けたのだ。

「そうか？」

アルスが腕を組みながら返事。息ひとつ乱れてない……………おかしいだろ……………

「ねえねえーアルスー、誰が一番強かったー？」

「……………ホタリン」

「そうか……………うん」

ああ……………魔力の使いすぎで意識が朦朧としてきた& a m p・吐きそう。

「最後に……………胸……………もみたかったぜ……………」

「もむか？」

鎧を解除し、胸を持ち上げながらアルス

その振動で胸がかすかに揺れる。

それだけでオレの想像力は駆り立てられた。

「ぶはっ……………」

「あんたキモ！ 最低！」

「ぐへっ……………」

コロネの拳がオレの意識を吹き飛ばすトドメの一撃となった。

王宮からの手紙（後書き）

アルスが強すぎるような気がしましたので説明
彼女は逆に攻撃力が乏しいので負けはしません
で一概には言えません。あと盾を召喚しなかつたのは大きすぎるの
で視界が隠れるために数人相手には使えないというものです。あと、
攻撃もしにくくなりますしねw

広すぎる街

「えーっと、こちらへんだっけ……………」

ここはアルデート。オレ達は今お城の門に向かっていているところなんだが

迷った。

「つか広すぎるわこじー！」

「そんなところにつっこんだってしょうがないでしょアンタ」

わかってるんだ……………わかつちやいるんだ……………でも！

「つか広すぎるこじー！」

「なに連続で同じとこつっこんでんのよ……………この方向音痴！」

ん？ なんだその呆れたような目は！ 呆れるな！

「悪いか！」

「悪いー！」

「もー、遠いー」

リサはそろそろ疲れてきたようだ……………オレだつてはやく行きたいんだ！

再度地図を見る。

「よしわかった！ こっちだこっちい！」

「なにがわかったのやら……………」

「ちょっと見せて」

と、歩き出そうとするオレをマカロニさんが止める。地図を見ながらある方向を指さして言う。

「あっちじゃない？」

歩くこと10分。フツーに門の前に出ることができたのだった。

「はっは、ほら！ ついたじゃん！ 門！」

「すごーい！」

「アンタじゃなくてマカロニさんのおかげでしょ！ そしてリサも褒めない！」

「あははは、とりあえず、ついたから入ろうか」

ああ、そうだな。

マカロニさんの提案により本来の目的を思い出して、門に近づくと門の両側に立っていた槍をもった兵士がこっちに来た。

「ホタリン様達でしょうか」

「あー、うんそうっす」

「王妃様がお待ちしております。では、こちらへ」

そしてその兵士が案内してくれた。この人いかにも門番っぽい格好してるけど、仕事ほっというて大丈夫なのかな？ とか思うけどもう一人いたしいいか。

兵士が先を歩きオレらがそれに付いてゆく。門の中に入ると巨大なお城が目に入りきらないくらい大きかったのを改めて認識して思わず「でけー、すげー」と口から洩れてしまった。

巨大な柱が綺麗に等間隔で並ぶ廊下を抜け、なんかすごい階段を上り、3階くらいの廊下の一番奥の扉の前で兵士が止まり、ドアをノックし「王妃様、連れてまいりました」といい「私はこれで」と、頭を下げて、もどっていくのであった。

「どうぞお入りください」

中から女性の声が聞こえる。

「はいはい」

ぐっ

「いってえなにすんだよー！」

「もっと丁寧に返事しなさいよー！ー！」

「あ、ああ、すまん」

ということ、扉を開けつつあいさつ

「どもー、ホタリンっす」

べっっ

「コロネです」

「マカロニです」

「リサです、あとこの人アルスね！」

「……………」

みんな口ぐちにあいさつする。

「こんにちは、王妃のエルメスです。今日はお越しいただいてありがとうございます」

エスメスとかいう王妃さんは綺麗な白いドレスのような衣装に包まれていて透き通るような金髪で腰までありそうなストレートヘアの美人さんだった。

「今日来てくれたということは何行って下さるんですよね？」

疑問系になっていることから一応確認してどこか

「おう、いk」

べしっ

「はい、そのために説明を聞きに来ました」

オレを殴った後丁寧に応えるコロネ。え、オレなんか失礼なしゃべり方した？

「そうですね……よかった……では、説明始めますね」

ということでエルメス王妃様は説明しだした。

まとめるところである。

コロシウムは4年に一度、唯一国同士がひとつになってするイベントであって、昔からの恒例行事らしい。オリンピックみたいだな。そんでそれが3ヶ月後にあるらしい。その大会は数人のチームの中から2人選んで戦う2対2のトーナメント戦で基本参加条件はなし超自由である。んでルールは殺したらダメ。気絶か負けを認めたらその時点で勝敗は決まるというものだった。なぜハイワードなのかというとハイワードには古くからあるコロシウム場があるからだそうだ。その大会では4カ国が推薦して参加させる代表者がいて、その人達は国民のアンケートで決まり、そのアンケートで選ばれた人は国の名を背負って戦うことになる。へえ、オレらすご。ハイワードはここから真南にあるのだがちょうど山があってジャッパーンかウイステラスを通っていくしかないそう、大変だから馬車出してくれるらしい。ラッキーじゃね？

「ということですが、何かほかに質問ありますか？」

「ん？ ぜんぜんぶへっ！」

「だから敬語使いなさいって！ あ、すみません得にないです」

敬語っつーのは難しいもんだな……………

「まだ使っていないだろう」

……………アルスにつっこまれた！？ っていつか今心読んだ！？

「そうですか、私の説明はこれで終わりです。では、お気をつけて」

笑顔でそう王妃は言うので

「おつまかせな！」

オレはちょっとかつこつけてみたくなったのでした！

「はぁ……………」

お城の門を出たところでわたしはため息がでた。

あいつ本当に17歳なのかしら……………

「出発は明日だってさー、どうするー？」

というわたしの気持ちなんてまるで知らないような（あたり前か）

テンションでホタリンが聞いてくる。

「じゃあ、クエストいかない？ 旅は何かとお金がいそいだしね」

マカロニさんの提案に

「おっけー！」

リサが賛成。そうね、気分転換やストレス発散にちょうどいいかも
しれない

「わたしも賛成」

ということでギルドに向かうことになった。

………なつたのだが

「うーん、こっちだ！」

またこれである。

この街に住んでいたかのように意気揚々と歩くホタリンを横目に見
ながらわたしはこっと思わずにはいられなくなっていた。

迷っているのではないかと。

すでに歩いて1時間ほど。隣にいるマカロニさんに聞いてみる。

「ねえこれまた………迷ってない？」

「やっぱりそう思うかい？」

うん、確信した。

そんな会話も耳に入っていないのかホタリンが呟く

「遠いな……………つか広すぎるわここー！」

「広いのはわかったから！ ちょっとよこしなさいそれー！」

「痛え！」

思いつきりホタリンを叩き、ついでに地図を奪いとる。

あー、ちょっとすつきり

そしてわたしはマカロニさんに渡した。

「うーん……………あれがこれだから、ここからだど、あっちだね」

こんどはマカロニさんが先頭になって進む。やがて知っている道に
でて15分でギルドが見えてきた。

「おおスゲエ！ マカロニさん才能あるんじゃない？」

「さすがまっちゃん！」

「そんなことはないよ」

「いや、アンタがなさすぎんのだよー！」

と、
いうわけでギルドの中に入ったわたし達だった。

暇潰しクエスト（前書き）

12月17日誤字見つけたので修正しました。

暇潰しクエスト

オレ達は今街の門を抜けたところである。

クエストはツインホーンウルフの群れの討伐にした。

どんなヤツなんすか？ってギルドのお姉さんに聞いたところ、角が2本あって黒い毛皮なのですぐわかると思いますっていわれた。得に最近凶暴化してるから気お付けてくださいねニツコリマークだつてフフフフ あれ、アルスのあれがうつつてしまった。

「ちょっと、なににやけてんのよあんだ！」

「べ、別にギルドのお姉さんかわいいなあとか思っていないからな！」

「……………」

な、なんだそのヴァカを見るような目は！

というわけでアルデートの近くにあるアルデート森に行くところに向かっているのだ。っていうかアルデートの近くにあるからアルデート森ってそんなまじやね？ まあわかりやすいけどさ

「うーん、ここら辺に出没するって聞いたけど……………」

マカロニさんがうーん…………と、うなる。その時

「ねえまっちゃんあれじゃないー？」

とリサが指をさす。っていうかいつの間にマカロニさんにアダナが………まあそんなことよりリサの指差したところに2匹のツノが頭の両方から生える黒い毛皮のオオカミがいたのだ。

「そうだね、後を付けてみよう」

「え、殺さねえの？ まーちゃん」

「まーちゃんじゃなくてまっちゃんだよ！」

「どっちでもいいよ。あの2匹よく見ると同じ場所に向かっているよね。ってことは帰る場所がある、つまり巢がある。ってことじゃないかなって思ってるね」

と、マカロニさんが説明。えーっと、とりあえず追えってことだよな

「む、なるほど」

「さすがマカロニさん。っていうかさっさと追いましょ」

「お、おうー！」

そしてその2匹のツイン………なんだっけ？ まあそれを追いかけるためにオレ達は人があるくような道からそれて木や草の生い茂る中へ脚を踏み込んだ。

「ゲルツ！」

2匹のうち1匹がこちらに気づいてアルスに飛びかかって行った。

牙の鋭いその牙がアルスの左肩にかみ……ついた。

いや、ちよつとはよけるなりなんなりしろよ！

と、思ったが逆に都合がよかつたらしい。アルスの肩に噛みついた瞬間パキ！という音とともに口から血を噴き出した。ああ、硬すぎて歯が折れたのか……

吐血したウルフをアルスは右の拳で殴った。ぐえ！という鳴き声とともに痙攣し、動かなくなる。

それをみたもう一匹が「オレにはかなわねえ」と判断したのか一目さんに逃げようとする。

うわ早！ 追いつけねえ！

「リサ、ちよいたのんだ！」

「あいさーキャプテン！」

リサがウルフの後を追う。相変わらずスピードだけはものすごいな……

そうしてウルフとリサはすぐに見えなくなった。

草木が生い茂る森の中を縫うように走るツインホーンウルフを追う。

結構似たような木が一杯あって迷っちゃいそうだなー

走って数分、地面が少し盛り上がってるような場所に出る。その盛り上がってる場所に近づいてよく見てみると何やら穴が開いていた。人が通るよりも少し広い、洞窟といった感じの穴がななめにぱっくり開いている。そしてその中にツインホンウルフが入って行った。

なるほどー、あそこが巣なのかな？

「と、いうわけでレッツゴーイェー！」

なんかワクワクするから入ることにした！　なんか秘密基地っぽくてワクワクしない？

洞窟の入口をくぐる。中は真っ暗だったがよく見ると土の壁にうっすらと光るコケが生えていて慣れてくるとそこそこ明るい。

さらに進むとすごい大きな空間にでた。今までの道がずっと下りになってたから結構地下深くにいるかもって思ったけどこんなに下だったんだ……。上は恐らく5メートルちよつとあるかも。奥行きは、うーん50メートルくらい？　体育館を思い出す広さだった。

そしてその奥に無数のツインホンウルフ。

え。

全員が首をそろえてこつちをむく

「え……………」

ギロツと。何しにきたんじゃポケエと雰囲気が、目が言っている気がした。

あたし一人じゃ怖すぎたので

「……………おじやま……………しました」

みんなを呼ぶことにしました。

全力疾走で洞窟の入口まで戻り、空に向けて光の斬撃を放った。

「あー、どーこいつちゃったのかなあ」

と、ホタリンがそこになっていたリンゴをかじりながらつぶやく。

「のんきねあんた」

はあ……………

その時、黄金色の輝きを放つ斬撃がここからすこし離れた場所から空に3発打ちだされた。

「リサかしら？」

わたしの疑問に

「じゃね？ よし、いーいーいーいー」

「そうだね」

ホタリンとマカロニさんが暫定

わたし達4人はその場所めざして走った。見えた方向に一直線に走るだけだから今回は迷わなかった。そのまま5分くらい走るとすこし開けた場所につき、そこにリサもいた。周りをみわたす。開けた以外特にかわったものは……ああ、なんかすこし盛り上がってるわね。よく見るとその場所に穴があいている。

「あー、こつちこつちい」

「あそこの中に入って行っただの？」

「う、うん、なんかいっぱい！」

「いっぱいか……討伐数は約30匹って書いてあったけどもつすこし多そうね……」

「はあ……はあ……早いつてコロネ……」

後でホタリンが息をつきながら文句をいう。ちょっと早く走り過ぎたかな？ と、その時アルスとマカロニさんが森からこの開けた場所に入ってくる。ちなみにあの二人はすばやさにおいてはそこまでなのだ。だけどホタリンのように息遣いが荒くないところからみるとちゃんと自分のペースで走ってきたようだ。

「えーっと、ウルフ達はどこのかい？」

「このなからしーぞー……」

「了解」

ホタリンとマカロニさんの会話が終わり、穴の中へ向かう。

意外と明るいよね……。

周りに発光するコケが生えていてそこまで中は暗くなかった。そして長い洞窟を進む。穴の直径は入口とさほどかわらない。そのまま進むとかなり開けた場所にでた。

中を詳しく説明すると天井には一面にコケが生えていて薄暗いと表現するより明るい感じであった。奥行きも広く天井も高くそれなりに開放的な空間といえる。

「ひろ！」

ホタリンも同意のようだ。

と、そのとき。なにやら嫌な気配を感じる。こつ、たくさんの目がわたしを見るような……

「お、おいあれ………」

「え？ どれ？」

ホタリンが指差す方向を見る。そこには……

軽く100は超えるツインホンウルフがこちらを睨んでいた。

……え。

「うわぁー！」

変な声をあげてしまったけど仕方ないと思う……

「とりあえず、全部倒そうか」

ニカツ とマカロニさんがさらっととんでもないことを言う。

「えええええええ！」

「お、おうー！」

「じゃ、じゃああたしは左側からいくね……」

「……わたしは右側にいるね」

と、適当に役割分担をして右側に向かう。端っこのほうが少なそうだったからとかじゃないからね絶対。

左からリサ マカロニさん アルス ホタリン わたしの順番に位置についた時、号令でもかかったかのようにツインホンウルフがこちらに一齐に突進してきた。

「秘剣 鎖手裏剣！」

わたしの右腕に鎖手裏剣が召喚される。それを……投げる！

わたしが右側よりに投げ、そのまま直線に飛ばず途中から軌道を少

しずつかえ湾曲した軌道を作りつつツイーンホーンウルフを蹴散らしながら左側に回り込んでいき、自分の手元にすいこまれるように帰ってくる。

鎖手裏剣を運よく避けた数匹が自分に飛びかかってくる。右手に鎖手裏剣を持ったままわたしは正面のウルフの頭部に思い切り突き刺す。飛んで来る血しぶきをよけつつわたしは左手に短剣を持ち、両手でなぎ倒しながら、あの武器を使おうと考え、その名を呼ぶ。

「解除 鎖手裏剣……そして、召喚、毒剣ポイズンクロウ」

自分の両手に紫色のオーラがまとわりつき、実体化。

それはクロウ。手の甲から伸びる3本のツメである。

これは毒剣ポイズンクロウという。このツメには猛毒が付いていて攻撃対象に付着した瞬間一定時間に決まった量の体力を奪うものだったが……

スツ…………… シュー……………

こっちではさらに強力らしい。切った瞬間煙を上げて肉を溶かし、かすり傷でも致命傷になっている。このウルフは体力自体が少ないのかな？ まあ、とりあえずこの場では頼れる武器だ。

前に並んでつつこんでくるウルフを右手で薙ぎ払う。ツメが当たった場所から煙と血を出しながら絶命する。体を右に半回転させて大ぶりに左のツメで薙ぎ払う。3匹ほどに攻撃があたり、やはり絶命よし、いい感じかも。

わたしは次から次に襲ってくるウルフの中一人、狂戦士のごとく倒しまくっていた。

と、その時、感じた。

なにか嫌な予感が、した。わたしの本能が横によけると、そう叫んでいる。

だからほぼ無意識に近いレベルで横に飛んだのだが……

ズゴオオオツオオオオ……バチツ……バチバチ

わたしがさっきまでいた場所に白と黒の混ざり合ったような光線が通過し、後で轟音を撒き散らして大爆発する。

え、なに！？　っていうかバチバチ言ってるけどあれ電撃なの……
…！？　いや、そんなことより、そんな技を発射できるやつなんていたかしら……

その光線が発射されたであろう場所をわたしは見て硬直した。

縦に2メートルはありそうな巨大なツインホーンウルフがこちらを睨んでいた。その巨大なツインホーンウルフは耳の上のところは両方1本ずつ生えている角の他に額に1本多く生えている。その合計3本の角がなにやらバチバチ静電気を放っている。

なにあれ！？　聞いてないわよ！

「なるほど、な！」

となりでホタリンが納得したようなことをいう

「え、なにがどうしたの？」

「いや、こんだけ大勢が集まっている上に凶暴化しているってことは、だ。一人強い奴が指揮を取っているって考えたら全部しっくりくるじゃん？」

「あー、なるほど。めずらしく頭いいわね」

「うるせえ、っていつか、まわりかこまれてるぞ」

周りを見る。わたし達は囲まれていた。それも20匹以上。

ホタリンに背中を預ける。ホタリンもわたしに背中を預ける。

「うりゃあああああ」

「はっ！」

わたしは目の前180度にいるウルフ達を横一直線に薙ぎ払う。

ホタリンも氷の刀で横に一閃。

お互いが逆方向に攻撃したため周りにいたウルフが円を描くような形で四方八方に吹き飛んだ。

「それ気に行ったのね」

「まあな」

そのとき！

何かが感電するような音と同時に白と黄色の光線が視界の隅に移った。

ふと、そう感じたほうを見やる。

「「……………！？」」

黒と白が混ざり合った光線がわたし達めがけて放たれていた。

次の瞬間、目の前で爆音がとどろき、視界は砂煙によって支配された。

命賭けクエスト

砂煙がようやく飛散する。

「ア、アルス……………！」

「おお、助かったぜ」

あぶないところだった。戦いながら周囲の状況を確認していた俺は幸いヤツの攻撃に気づくことができた。こういう集団戦ではあまり役に立てないのが好都合だったらしい。

俺はホタリン達の前に移動し、左の掌で受け止め、盾となったのだ。

前方の地面は周りに吹き飛んでいる。なかなかの破壊力だ。

「ヤツはまかせろ」

「お、おう！」

そして後は仲間に任せ、俺は一人ボスに立ち向かう。角が3本、かなにかの突然変異だろうか。

後を見る。4人とも頑張っている。今思えば俺以外全員集団戦に適していないか？ ホタリンはともかく。だがまあ、後に仲間がいる以上、光線はよけることはできないよな。

「ガールルルル……………」

威嚇している。明らかに警戒しているな。頭のあたりがバチバチ光り始めていることからもうそう判断できる。

「装着 ミシヤーマー 鏡鎧 ライカームス 右手甲」

俺の右腕だけに鏡のような銀色の鎧が装着される。と、同時にボスの頭部に生えている3本の角の間に丸い光が召喚され、そこからレーザーのごとく光線が繰り出される。

それを俺は右腕でガード。キン！ という短い効果音とともに一瞬だけ右腕が光り、光線が当たると同時に方向転換し、真逆に突き進んでいく。いや、跳ね返ってゆく。

跳ね返った光線がボスの腹部に命中。結果は………効果なしか。そうとう硬いのか。それとも耐性があるのだろうか。

ボスが吠えながら角を俺に向けて突き刺さんとばかりに突進してくる。それを右手で思い切り迎え撃つ。

俺の拳が角をよけて額にうちこまれる。お互いの威力は相殺しあい勢いをなくす。これもそこまで効いていないようだった。だが少しだけヤツの体が動いたところを見ると体重的には吹き飛びやすいかもしれない。俺が間髪いれずに左拳を顔の側面に打ち込むが簡単によけられる。

どうやら盾無しの状態では攻撃役としては頼りないレベルらしい。

と、そのとき

「オレも手伝うぜ」

ホタリンが俺の隣に並びつつ言う。

後は大丈夫なのか、と視線で問う。

「後はマカロニさんがついてるから大丈夫じゃね」

確認のため振り向く。

「ウェーブショックインパクト！」

マカロニさんが地面に爆剣エクスプロージョンを突き刺して、叫ぶと同時に地面に波が伝わるように波紋が広がり、当たったザコがふつとんでいく。

大丈夫そうだ。

「にしても、どうだ？ あいつ」

「光線も跳ね返したが効かなかった。おそらく魔力耐性が高い」

「まじか………最悪じゃん。とりあえず、ほかにもうちまくってみるぜ。火炎魔法ファイヤーボール！」

ホタリンの掌に直径30センチほどの炎の球が召喚され、発射される。

それを走りながら横に回避して角を向けて突進してくる。

「うおおおおおおお」

俺はホタリンの前に入って左腕で止める。

「あわてるな。俺が守ってやる」

「お、おう……………なんかいろんな意味でドキドキしたぜ……………おるあ！ 電撃魔法サンダーシヨック！ 氷雪魔法アイスブリザード！」

ホタリンの指先から電撃が発射されボスに直撃するが効果なし。アイスブリザードもか。

「んー……………まじでなんもきかねえ」

そう考えているうちもヤツは休まず攻撃してくる。しっぽを叩きつけてくる。

それを俺がガードする。

……………ホタリンじゃ攻撃役になれないな。

「物理でいこう！ おるあ！」

そういうとホタリンは魔法障壁で自分の腕を包んだ。

「グラビトン！」

ズウーン という音とともに地面に這いつくばるような姿勢になるボス。そして自分にかかる重力も減らしているのかそのまま普通より軽い足取りで走ってゆき、ジャンプ。

天井ギリギリまでジャンプしたところで超急降下した。

なるほど、落下速度に重力を上乗せしたのか。

一瞬にして這いつくばったボスの背中まで移動したホタリンが障壁で包んだ拳をうちつける。そして鈍い轟音。

ごへっごへっ　と砂煙の中から苦しそうにせき込みながら出てくるホタリン。

「どう？　かつこよかった？」

ああ。せきこまなければの話だが。

静寂。

煙がはれるまで様子をつかがう。

ホタリンが風魔法を使って煙を払いのける。

そこには……

さつきよりはるかに殺気に満ちたボスがいた。地面にはヒビが入り割れていてヤツの背中から血がにじみ出ている。打撃は効いたのだな。

「グルルオオオオオオオオオオ」

雄たけびのように叫んだあと、角が放電し始める。光線攻撃か？　と思ったが違うようだ。

角がバチバチいったあとそれが全身に流れるようにまとわりついていき、全身を電撃で覆うような形になる。

「げ……………水魔法ウォーターバズーカ！」

ホタリンがヤツに掌を向ける。掌から魔法陣が出現しそこから大量の水がバズーカのごとく発射される。

その水の塊が龍のごとくつつこんでいくが

びびび！……………しゅー

一瞬にして感電。そして蒸発してゆく。

「電圧あがってんな……………」

「だな」

電気をまとったまま突進してくる。

ホタリンの前に俺が出て両腕を交差して防ぐ。

衝撃は防げたが腕で直接触ったためか伝わってくる電撃により感電。

「う……………」

右腕から伝わる分は反射できてるが左からかなり伝わってきた。

「大丈夫かよアルス！」

「大丈夫だ、問題ない。そろそろ使うか。 召喚 グレイトシールド」

オレの腕に光が集まってきて盾を作り出す。

この瞬間俺の攻撃力は全て防御力に変換される。

ボスが再び突進、だが俺はこんどは盾で防ぐ。

ババババババババ

という感電音とともに視界を光が支配する。

さっきと同じようなシチュエーションだが今後は防ぎきることができた。

そのスキについてホタリンが攻撃する。

「おるあああ、土魔法ロックブラスト！」

ホタリンの腕に直径1メートルほどの岩石が召喚され、シューティングゲームのごとく打ちだされていく。なるほど、雷が通らない岩で攻撃しているのか。

だがそんな攻撃も簡単によけられている。

スキについて繰り返される突進を俺がガードする。

激突するたびに放電と爆発が起こる。

………ホタリンじゃ相性がわるい。

そもそも魔法がほとんどきかないのである。ならば俺が攻撃役に出るしかない。

「発動、ステータスマルチブレイクシオン能力全変換　　ザ　アタックモード　　」

それに、これ以外この状況は打破できるとも思えない。

俺の着ている装備が全て解除される。

「え、なにしてんだ？　アルス」

「あとでわかる。装着　トウゴク東国ノ鎧　ヨロイ紅桜」

鎧1つついていない俺の体を赤色の粒子が包み込み、女侍用の鎧を着用する。うむ、ちからがみなぎってくる。鎧のおかげだ。

「動きを止めてくれ。」

「お、おう。重力魔法グラビトン………」

ズウウウウン

一瞬ボスの動きが弱まる。

そのスキを俺は逃さない。

ふところにもぐりこんで思い切り………右アッパー。

俺の腕から爆ぜるように吹き飛んだボスが天井に激突しめり込む。振れた瞬間感電するが気にしている場合ではない。

そして天井まで飛んで4本足の内1本をつかみ地面にたたきつける。右腕が痛むが無理やり意識の外に追い出す。

叩きつけたボスを天井にめり込まないレベルの威力で殴り上げる。

空中に投げ出され、落下してくる。

その落下速度に対して、思い切り振りかぶり……………右パンチを繰り出す

ズドオオオオオオオオン

ものすごい勢いで天井に激突し、めり込むどころか天井の中に突き進んでいく。そして、その場所からヒビが入りだした。まずいな。

「やばい！ みんなにげる！」

次の瞬間、天井が崩れた。

「ああ」

「ふう……………」

オレ達は今さっきの洞窟の外にいる。

「びつくりした……」

「死ぬかと思ったー！」

「そうだね」

「………わるい」

アルスが思い切りアッパーした衝撃で天井が崩れてきたから俺が魔法障壁を作って一時的に崩壊を食い止めた。その間に来た道をたどって出て来れたというわけだ。

………
っていつかあの電気の塊野郎を殴ってたけど、大丈夫なんだろうか

よく見ると右手が火傷したように赤くなっていたが「問題ない」とのこと

「それにしても………アルス、お前強いんだな………」

「そうか？」

「僕もすこしみたけど、すごかったよね」

面白そうな顔でそう言う。けどあれはうん、パネエ

「アルスはすごいんだよ！　なんていうか、たぶんこの中で一番強いよ」

防御力で言ったら間違いなくアルスって言えるけど、攻撃力でも最強かもしれない。

「でも、クエストは一応、終わったな」

「そうね」

空を見る。

そろそろ暗くなるな………

「じゃあ、帰るか」

「うん！」

「そうね」

というわけで街に帰るオレ達だった。

出発（前書き）

12月20日誤字見つけたので直しました。

同じく12月20日誤字のご指摘がありましたので訂正しました。

出発

んあ……………？

窓から心地よい光がオレの顔に降り注ぐ。

「朝か」

ねんみー

ひつついた目をこすりながらリビングにいくとマカロニさんが新聞を読みながらコーヒーのようなものを飲んでいた。

もはやいつもの光景、日常の一部である。

「おはーマカロニさん」「」

「おはよう。っていうかもう昼くらいだけどね。ホタリンも飲むかい？」

「……………んあ？ あー、いいわ。苦いの苦手なんスわ」

オレはコーヒーを断り水を飲む。やっぱり朝って水じゃね？

「ほかは起きてねえの？」

「コロネとアルスは散歩とかいってでていったよ。あとリサはみでの通り」

マカロニさんが横目でベッドの1つをみながら言う。オレも同じ方をみる。ふむ、ぐっすり寝ておられる。

「そういえば、今日馬車とりにいくんだよね」

「え、そうだったけ？」

寝起きで動かない脳を必死に回転させる。

「そうだよ。明日お城で用意してるから取りに来てくださいねって言われたはずだけど」

えーっと………思い出したかも

「だったな………いついけばいいんだ？」

「昼くらいでいいんじゃない？」

じゃあ昼くらいでいいや。

「地図もってる？」

「ちよつとまってるね」

自分のポーチに手を突っ込むマカロニさん。そして数枚の紙を取り出す。

「ん、ども」

とりあえずどんくらいかかるのかとかしつときたいのである。うー

ん、え？ ジャッパーンまで歩いて5分？

「ジャッパーンって超近いんだな」

「ああ、その地図全部距離がおかしいから」

「だめじゃん！」

それ地図としていいのかよ！

「僕は歩いて10分って書いてあった道を走って1時間以上かかったよ」

「……………」

「でも方角は正しかったよ」

「そ、そうか……………」

オレはそう返事して地図を返した。どれくらいかかるか知りたかったのに意味ねえじゃん……………」

「今日出発するってことはこの宿ともおさらばだな」

「そっだね」

今思えば1か月もここに住んでないけどなんかすでに自宅のようにおちつく場所になっていた。

なんかさみしいな……………」

でも、これから違う街に行くんだよな。うおおお、なんかワクワクするし！

「コロネ達帰ってきたら出ようか」

「だな！」

朝、わたしは目をさました。

窓からの光的に朝10時くらいだと思われる。

「おはようコロネ」

マカロニさんが新聞みたいなのを読みながらあいさつ。っていつか起きてたんだ。いつも早いけど何時頃起きるんだろう。

「起きてたんだマカロニさん。おはよ。いつも早いわね」

「まあね。目覚まし時計がなる直前に目が覚めるタイプなんだ僕」

「へえー……………うらやましいな」

コーヒーを一杯自分で注ぎ、目をさます。

んー……………とくにするこゝもないなあ……………

散歩にでも、いこつかな

「ちょっと、散歩行ってくるね」

ということでリビングを出て、扉をあけ、宿の外に出ることにした。ロビーに入るなりおばちゃんがかつちに来る。

「聞いたわよあんたたちハイワードのコロシムに代表としていくんだってねえ！」

そういいながら無駄に高いテンションで背中をバシバシ叩いてくるおばちゃん。痛い、痛いよおばちゃん…

「ええ、まあ、はい」

「そうかい楽しみだねえ」

「ありがとうございます」

一応挨拶を返す。

あ、そうだ、ついでにいろいろ聞いておこう

「あのー、ジャッパーンについて教えていただけませんか？ あとハイワードのことも」

「お安いご用さ。ジャッパーンは言っちゃえば田舎だよ。山、田、畑があつて結構和やかな場所さ」

へえー……………田舎は結構和むから好きだな……………

「なんていうか、自然に囲まれた良い場所さ。あと剣士が多いね。刀使いの。ハイワードはあんまり冒険者のな人はいないけどしっかりした王国って感じだよ」

「結構詳しいんですねおばちゃん」

「あたしゃこれでも元冒険者でねえ、昔はいろいろ旅したもんだよなつかしいねえ」

「へえ、そうなんですかあ」

意外だなあなんて思った。

「まあ、そんなくらいだったよ。他に知りたいことがあるかい？」

「いえ、もう結構です。ありがとうございました」

「あいよ」

そしておばちゃんと別れた。へえ………冒険者だったんだ。いろいろ聞けてよかったよかった。と思いながらロビーから外にでたところでアルスが庭のベンチに座っているのを発見した。

あれ、アルスも起きてたんだ。

「アルス、おはよ」

「よっよ」

わたしは得にすることもなかったからとなり腰を下ろす。

「ねえ、なにしてるの？」

「いや」

しばらく間をおいて

「なんか、落ち着かないか。ここ」

わたしは目に見える景色を改めて見てみた。草、草、若干花。そして木。

落ち着くかもしれない。

「そ、そうね」

沈黙

そういえばわたしアルスと2人で行動したことなかったなあ。

やばい、何か話さないと。沈黙がきつい。

「そ、そうだアルス。ジャッパンについてさっき聞いたんだけど」

「ああ、カウンターのおばちゃんにだろ。俺も聞いた。」

「……………」

ええーっと……………」

何か話題を………と考えていたとき不意にアルスが口を開く。

「包帯って丈夫だよな」

包帯？ ああ、アルスって胸を包帯で止めてるんだっけ。

「そうね。わたしも骨折した時に付けたことがある」

「そうか」

……。

………え、そんだけ？

会話が終わった。

しばらく景色を眺める。

……アルスはいつもこの景色を眺めてたのかな？ っと気になったので聞いてみる

「アルスはよくここに居るの？」

「ああ、まあな。朝暇な時はここに居る。朝の空気は気持ちいいだろっ」

「そうね………わたしも朝は好きかも」

どうやら彼女は規則正しい生活を送っていたようだ。

ふとアルスが空をみながら言う

「……昼、だな」

ほんとだ、太陽もいつのまにか結構真上に近いところまで登っていた。

「そろそろもどろつか」

「だな」

というわけでわたし達は部屋に戻った。

「というわけで、いつてくるわおばちゃんー」

「じゃあねー!」

「ではまたいつか」

「お世話になりました」

「……………」

みんな口ぐちにいつもカウンターにいるおばちゃんに向かっていまままで止めてくれた礼を言う。

「きをつけていくんだよ」

宿を出る。

オレが地図を持って進もうとしたらコロネに「いや絶対無理だからそれ」って真顔で却下された。

というわけでマカロニさん先頭である。

さすがというべきか、20分ほどでお城の門のところに行くことができたのだった。

すると門がオレ達の到着を待っていたかのように開き、開いた先には王妃さんがたっていた

「こんにちは、英雄様がた」

「よ、王妃さん」

べし！

「いてえー！」

「あーもう、こんにちは、王妃様」

「馬車はこちらです」

王妃さんの後についてゆくとすこしお城お敷地に入ったくらいの所で「ちよつとまっててくださいね」といいむこうへ消えていった。

数分後、王妃さんは立派な馬車を引く兵士とともにやってきた。

その馬車は金箔などがやたらと付いているオレのイメージとは全く違っていて、見た目はそんなに目立たず、木製だった。中で5人が寝れそうな大きさを冒険者が乗るにはぴったりのもので、外見は大きな箱のようなものには窓が付いていてその両方に大きなタイヤがついてあって、前方に馬が2匹いる感じだ。

「うわああすごいー！　かわいいー！」

とリサがかけよっていく。え、かわいい？

「かわいいー」

といいながら馬に抱きついてなでなでしている。

「いやそっちかよー！」

「でも、結構快適そうよ？」

「うむ」

みんな口ぐち共感する。オレもこれはテンションがあがる………！
馬は絶対パトリシアと名付けよう。

「ありがとうございます！　王妃さん！」

「ありがとうございます」

「お気に召したようでなによりです」

オレ達の感謝によりすこし頬を赤く染める王妃さん。

「では、この門からつながる中央通りを通って街をでてくださいね」

「おっけー」

馬車に、乗る。おお、やべえええ！

馬がゆっくり歩く。

なんか自動つてすごかったんだな……こつち来てから車とかないからずつと自分の脚で移動してたワケで、それなりに『自動』というものに新鮮なものを感じた。

「では、お気をつけてー！」

「おうー!!」

お城の門を出て、中央通りにでる。そしてのそのそと歩き街の門が近づいてくる。

あれ？ よく見ると人がいる……こちらに手を振っているようだ

「あれはギルドの人達だね」

とマカロニさん。ほんとだ、近づいてきてようやく視覚で確認できた。

「おい！ 気をつけていけや！」 「負けんなよ！」 「元気でね

「！」「いってらっしゃいませ」

と、口ぐちに別れの言葉を言う。その中にはギルドと一緒に酒を飲んだ人や、ギルドの女性員もいた。

な、なんだよオイ。なんか感動するじゃん……。しかもなんか視界がぼやけてきた。

「お、おう!!」

「うん！ 絶対勝つからね！」

オレは腕で目をこする。リサも目を押さえている。

「え、何泣いてんの？ あんたたち」

「ちげえし！ 唾だし！」

「ちがうもん！ あれだし！」

リサ、あれってなんだよ。

と、いうわけでギルドの人達とかに見送られて感動しながら街を出たオレらだった。

久々の野宿（前書き）

平成24年1月5日誤字が見られましたので訂正しておきました！

久々の野宿

「えーっと、この方向に一直線だね」

マカロニさんが後で返事してくれる。

「んじゃこの道を伝つとけばいいのか」

「そうだね」

オレ達は現在アルデートからジャツパーンの間にある森に入ったところである。

んでオレが馬の綱を引いているのである。

馬車の中は中央に横長の机がありそれを挟むように横長の2人乗りの椅子があり、最後に1つ移動できるタイプの普通のイスがあるのである。そして後の席からリサとコロネ、アルスとマカロニさんという順番である。ちなみにオレのうしろがマカロニさんである。

「どれくらいでつくとかいってなかったー？」

オレの問いかけにコロネがこたえる。

「えーっと、3日から2週間くらいって言ってたけど……………」

「なんだそりゃ」

どんだけムラがあるんだよ……………でもまあ、すくなくともあの地図

のように歩いて5分なんてことはないよな。

「でもあたしは2週間くらいかかってもいいかなー」

とりサ

「悪くないな」

まあ、それにはオレも賛成だ。のんびり綱を持ちながら日の光を浴びつつゆったりまったりするのも悪くない。っていうか最高じゃね

「マカロニさん地図ぷりーっず」

「はい」

オレが地図を求めたのは時間とか距離が知りたいわけじゃなくて、ジャッパンまでどんな感じになってるのかなーって気になったからだ。ほら、森だけじゃないじゃん？ 山とかあるかもだし。

「おおー」

結構すごいな……

「どうしたの？」

「コロネこれ見てみるよ。このままいくとすっげえーでかい川があるって巨大な橋を渡ることになるらしい」

「なかなかいいじゃない」

えーっと、説明は……

『ナイル川』

ここはいい魚とか釣れちゃったりするかもしれない！ 釣り好きな人はここを知らなきゃ損だぜ

……。

なに？ この口調。どんだけテキトーな地図なんだよ……

「でも、そこで釣りすれば食料調達もできそうだね」

「おお、マカロニさん頭いい！」

そしてそのそ歩く。馬にゆられる。日差しが気持ちいい。あああ

……

眠たい……ていうか眠い……

と、とうとうとしていたそのとき

草村からカラスのような魔物が飛び出してきた。

「ギヤアアアア」

うわ、びっくりしたあ！

そのカラスが空中で旋回してから急降下してくる。

「うおやばいやばいやばいやばい……」

「チャッピーiiiiiiiiii!」

リサが叫ぶ。っていうあれチャッピーっていつのか。

カラスが馬めがけて急降下してくる。

やばい! オレが叩き落とすか!

と飛び出そうとした瞬間

チャッピーがカラスに気づくや口を開け……

ジュシユゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ

- - - - -

チャッピーの口から青い光線がレーザーのごとく発射された。

その光線がカラスに直撃し、そこでとどまることなく空に吸い込まれていった。

つまりビームを吐いた。

「……………」

「……………」

カラスに直撃したらしい。全て灰となったのかあとかたものこっていない。

オレは生まれて初めて馬がビームを吐くという謎シチュエーションに出くわした。

「ああ、そういえば王妃様がいつてたわよ……………」

「え、なんて？」

「護衛もできるように若干特訓しておきましたので。って」

……………この世界の馬って若干の特訓でビームがだせるらしい。

「チャッピーかっこいいいー！」

リサが大喜びしている。うん、別に強いに越したことはないけどさ。

なんていうか……………複雑な心境だった。

はっ！もしかしてパトリシアもビームが出せるのか！？

……………なんか想像したくない。

「そういえばエサとかどうすりゃいいんだ？」

「えーっと、王妃様は馬車止めてる間にそこらへんの草を食べるの
でそこまで世話はかかりません。って」

「よく聞いてんな」

「あんたが聞いてないだけでしょー！」

んなこといったって……人の話を聞くのは苦手なんだっつもの
そんな感じで昼ごろ出発したためかなんとか午後5時くらいにな
あーって感じの空になってきた。

「なあ、そろそろ野宿する場所きめといたほうがよくな？」

「そうね、暗くなってからじゃアレだし……うーんじゃあその
開けた場所はどうか？」

「おけー」

とりさがチャッピーに乗りながら返事をする。

いつのまにそんなところに！ 綱握ってたのに気づかなかったぜ

「チャッピー、ピーちゃんあそこをお願い」

「ひひーん」「……………ぶふっ」

それぞれ返事をする馬達。っていうかピーちゃんってなんだよ。付
けるならパトリシアだからばーちゃんだろ！ っていうかそれ鳥の
ネーミングじゃね？

と、珍しく心の中でつつこみまくってるうちに開けた場所に到着。

えーっと、簡単に説明するとしたら

開けている。森が生い茂る場所にぽっかりあいたようなニミ草原で
ある。脚元は土ではなくちゃんと草が生えていて、そんな場所を囲

むように木が生えている。なんか、ここで休めば？ とでもいいた
そんな場所である。

その片隅に馬車をとめ、馬の綱を木にくくりつける。

「んー、晩御飯はどうするの？」

とコロネ。

あーそうかあ、晩御飯探さないとな……………

「じゃあなんか獲物でも捕まえようか。あと、食べられそうなもの
とか」

というマカロニさんの提案。うん、だな

「了解」

ということでもシをさがすことになった。

「じゃあいつてくるねーピーちゃんとチャッピー」

あたしはかわいい馬達に別れと告げみんなとわかれ、一人森になか
へ脚を踏み入れた。

みんなそれぞれ別方向に探しに行ったのである。そしてちよつと経
つたら戻ってくることになった。

あたりはそろそろくらくらくなってるけど、脚元がみえないわけでもないから特にきにしない。

すこし進んだあたりにブタのようなモンスターがいた。それも3匹。

「ブファイ？」

よくみると、額のあたりに角がはえている。

っていつか皮膚が緑色だしなんか怖い……

よし、倒そうと思う。

剣は……うーん、返り血が付くのはいやだなあ……あ、そうだいいこと思いついちゃった。

「召喚 ライトツインソード！」

あたしの両腰に二つの鞘が召喚される。

その鞘から普通に抜き取り、向かう。

ブタ達がこっちに突進してくる。結構早い。

でも、それでもまだあたしにはおそいレベルだった。

すれ違いざまにあたしは左右の剣の刃が付いていないほうでそれその腹を強打して意識を奪う。そして三匹目の首の後側を刃の付いていないほうで強打。

そう、つまりみねうちである。これなら血がつかないし、いいかなあつて。

ということで捕獲成功！でもどうやって、持ち帰ろう……………

と、その時

「む、リサか」

草村からアルスがあらわれた。よし、ちょいどよかった！

「アルスー、これGETしたんだけど」

「やったな」

頭をなでられる。

「えへへー、で、持っていくの手伝ってくれない？」

「ああ」

ということで個人の集合場所に戻るあたしとアルスだった。

ああー、なんかなんもとれなかったなあ……………

イノシシがでたけどファイヤーしたら灰になったし。

というワケで他の誰かがなんか発見したことを期待しつつ戻った。

「うん、あとはホタリンが炎をわかしてくれるだけだね」

「そだねー」

その場所に戻ってくるやそんな会話が聞こえる。

え、オレ？

「なにしてん……って、うお、なんか取れたのか！」

枝で器用に作られた某狩猟ゲームの肉やきセットのようなものにブタのようなヤツがつるされていた。

「そうよ、リサがみねうちで気絶させてきてそれをアルスと運んできたのよ。あんたは？」

「まじか！ ああ、オレは見つけたんだけど、ファイヤーしたらまた火力しくった」

「はあー……………」

頭を手でおさえるコロネ。ん？ 頭痛か？

「大丈夫か」

「なんでもない……………とりあえずホタリン、火がほしいからお願い」

「ういー」

指先がばちばちするくらいの火力で下に積んである、落ち葉などに触れる。そして小さな炎が出てきて、徐々に大きくなり………いい感じになる。薪である。

「おおおお、なんかいい感じじゃね？」

「イエー」

だんだん香ばしい香りが漂い始める。

その薪を5人で囲むように座る。

「もう、いいかな」

そういい、マカロニさんが骨の付いたままのそれをみんなにわけ

「んじゃ、いただきますっす」

「いただきますーす」

「いただきます」

「いただきます」

アルスはだまって手を合わせる。

オレは勢いよくかぶりつく………この濃厚な肉汁………なんか結構やわらかいし。うまー！

「おいひい〜」

「ああ……………うまい」

「皮膚の色から想像できないね」

「緑色してたもんね」

マカロニさんとコロネが奇妙なことをいう。え、これ緑色してたの……………

そんなわけで、出発1日目が無事終了したのである。

懐かしの再会（前書き）

1月8日、誤字発見いたしましたので訂正させていただきました。

懐かしの再会

街を出て2日目である。

時刻は恐らく……朝と昼の間くらいだろうか。

太陽が真上に登りつつあるなか、俺達は昨日と同じようにゆったりまったり進んでいるところである。

馬車の中では今だリサが寝ていてマカロニがお茶のようなものを飲んでいる。どこから出したのだろうか。コロネは暇そうに窓から外を眺めている。

俺はというと……とくに何もしていない。

「いい天気だなあ……」

綱を引きながらホタリンがそんなことをいう。のんきだな。

綱引き役はホタリンで決まったらしい。

「そうねえ……ねえアンタ、なんか面白いこといいなさいよ」

「ええ！　どんな無茶ぶりだよそれ！」

「あははは」

まあそんな感じである。

そしてまた沈黙。

別に気まずい類のものでもない。

「そ、そうだ。アルスってさ」

「ん、なんだ」

「一体なんレベルなの？」

ふむ………なんレベル………か。そういえばこの体ゲームのキャラだったな。忘れていた。

「僕も気になってたよ」

「コロネはどれくらいだ」

そういえば俺も他のみんなのレベルは知らないな。リサなら知っている。65とかだったような………

「わたしは73よ」

「おおーなにになに？　なんか面白そうな話してんじやん」
ホタリンもまざってくる。

「レベルの話だよホタリン」

「まじでー、んで、誰が73だった？」

「わたしよ。あんたよりちょっと下でしょう」

「そだっけ？　じゃあそっかも」

ふむ。ホタリンとコロネは同じくらいなのか。もっと差があると思っていたのだから。

「マカロニさんはオレより上じゃなかったっけ」

「ああ、僕は75くらいだったような……」

「よっな……ってずいぶん適当だな……アルスは？」

「ああ、俺はな……」

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

前方から聞こえてきた馬の泣き声によって俺の言葉はかき消された。

馬が泣き叫んだのを聞いたオレはほぼ反射的に振り向いた。

「どっしたのチャッピー！」

リサがとび起きてチャッピーの名を呼ぶ。っていつか鳴き声で判別できるのかよ。すげえ。

すると周りには……

30人ほどの盗賊のような男たちに囲まれていた。

男に囲まれても嬉しくないつつの………はあ。

その中からひとときわ背の高い大男が出てきて言う。

「てめえええらあああ！ 金目のもん置いてどっかいきやがれ！」

と、ほぼ同時に

「あ、あんたは！」

コロネが何かに気づいたように叫ぶ。

「テ、テメエは！」

大男とコロネがお互いにびっくりしたようなしぐさで指を指し合う。

「ん？ なにお前達知りあい？」

「いや、前一回ボコったでしょ！」

あー………飯代のためにぼこって金奪ったっけ。

「よ、久しぶりっ」

懐かしの再開である。

「よ、久しぶりっ………じゃねえ！ 前の借り返してやらあ！ か

かれ！」

周りを囲んでいる山賊共が短剣を持ちながらこちらに向かってくる。

うーん……………めんどくせえ

「重力魔法グラビトン」

ズウウウウウウウン

山賊共の動きが遅くな……………らない。

「あれ？ どういうことだ？」

「はん！ 前みたいに食らうつかよ！」

と、親分が叫ぶ。ん？ なんかもってる。

親分が手にしているのは水晶玉だった。なんか青いオーラを放っているところからしてあれが原因なんだろう。

「これはなあ！ 魔法を無効化できんだよお！！」

盗賊共の動きがのろくならなかったのはそのせいか。っていうかオレ戦えねえじゃん！ つまんな！

「リサ、いくわよ」

「おけー」

コロナが影分身して分裂し、リサが双剣を召喚して戦う。

が、さすがにあの二人には勝てないようで、それ以上こっちに来ることもなかった。

だが親分は違った。

「おるああああ！ 気合いの親分パンチ！」

大きく振りかぶり………拳を突き出し空中を殴るような動作をする。つていうかネーミング適当すぎる！

そして、ゴオオオオオオという何かが飛んでくるような気配がした。

え、なに？

オレと親分の間にあるがすばやく割り込み、左の掌を前に突き出す。

そして重たい激突音

「うおあああ、なんじゃこりゃー！」

「気を使えるのか」

「気？ なにそれ」

「そのままだ」

アルスが親分に走っていく。親分は腕に斧を抱えてアルスにきりかかるも、腕に軽くはじかれて顔面にストレートを食らう。

「ぐう…………やるなねーちゃん」

「そうか？」

あー、なんかオレ今回役立たずって感じた。

アルスが斧を掌でつかみ、殴る。親分も反撃して思い切り殴るが右腕に阻まれて当たっていない。

殴り合っているうちアルスの拳が偶然水晶玉にあたりヒビが入り…………砕け散った。

「ぬおー！」

いける！

「オレのターン、ドロー！」

腕を天に掲げて叫ぶ。

「重力魔法グラビトン！」

ズウウウウウウン

盗賊達の動きが目に見えて遅くなる。

そして突きだした腕を地面に押し付けて言う。

「からの冰雪魔法アイスロツク！」

オレの腕が振れている場所を中心に地面に氷がどんどん広がっていく。馬車も味方も山賊共も全ての脚元を凍りつける。コロネとりサは危険を察知して馬車に戻っているから問題ない。

あ、やべアルスが動けなくなってる

「わりいアルス！」

「かまわん」

「く、くそなんじゃこりゃ！ お前一体いくつ属性持ってんだこの野郎！」

「へん、知るか！ 降り注げ、火炎魔法ファイヤーボール！」

空中にいくつもの魔法陣が召喚される。その魔法陣が一瞬赤く光り、火球が召喚される。

オレ達の周りを囲んでいた盗賊達に降り注ぎ、爆発する。

煙が晴れ……そこには前回同様気絶した盗賊達が転がっていた。

親分も例外ではなく、気絶している。

立っているのはアルスだけだった。

ついでに氷もとけている。

「よし、おーわりっ」

というわけで、撃退に成功できたのでアイツらを放置して先に進むことにしたのだった。

くっそおー……………。

俺様は一人地面を殴る。

時は夜。

たまたま馬車が通りかかったからしめたと思い襲ったのだが、相手が悪かった……………

あの赤髪の魔法使い、一体いくつ属性もってやがる……………

魔法使いは属性を普通は1つしかもってなく、複数持ちは希少だっ
てじっちゃんが言ってたのに。

その後ぼっこぼこにやられたあと、気を失い、目が覚めたのがさつきである。

みんなそこらへんに気絶したまま転がっていたらしく、あと数人が
そんなままだ。俺様は木にもたれかかる感じで気を失ってたらしい

その後、ヤツらは去って行った。

気絶した俺様達を放置したのだろう。

なぜ殺さなかったんだろうか……殺す価値がなかったってことか？ それともお情け？ あーくそ、なんか超腹立って来た！ 次は絶対ぶつたおす！

「……………」

「おやびん！ 大丈夫ツスカ！」

俺様がイライラしてたら弟子の一人が心配して駆けつけてくる

「ああ、心配すんナよ……あ」

そういえば、と思います。

前回手持ちをあいつらに奪われて、魔法使い対策に大金はたいて水晶を手に入れたのに、すぐぶっこわされちまった。というわけで残り残金が非常に厳しくなってきた

「はア……………金も少なくなってきたし……………どうすっかなア………」

と、つぶやいた時、弟子の一人が意味深なことを言い出す。

「おやびん、あのー、あれ、でてみます？」

あ？

「あれってなんだ」

「実はですね……………」

と、弟子が話し始める。内容はこんなものだった。

今度ハイワードで大会が行われるらしい。その大会で上位8位に入ればなんか賞金がもらえるらしい。ってほんとにかよオ!

「お前んなこたあもつと早くいエヤ!」

あいつらにこそ負けたが、俺様は強さじゃ結構自信があるんだ!

「よし! お前ら! 出るぞ!」

「あいさー!」「おう!」「がつてんだ!」「りょうかいだ

ぜ!」「付いていくぜおやびん!」

俺様の決意にみんなが次々と賛同してくれる。なんていい子分をもつたんだ俺様は……………

というワケで、俺様達はハイワードに向かうことにした。

ああ、俺様も馬車とかほしいなあ……………

ナイール川（前書き）

平成24年1月5日誤字発見しましたので訂正しておきました。

ナイール川

どうもあゝ リサでえーす

なんか、3日目です。

「ホタリン、なんか見えてきたよ！」

「え、何が？」

あたしが後で綱を引いてるホタリンに向かっていう。

あー、チャツピーの背中落ち着くー。

ホタリンが目を細めて……………

「えーつと……………すまんみえねえ」

あ、あきらめた。

「視力悪い系？」

「視力悪い系だぜ」

「へえ〜……………ほら、なんかあそこらへんから木がなくなる？」

「あ……………ほんとね。あれって橋じゃない？ ってことはあそこが川？」

「え、まじ？ みんな目がいいな」

本当だ……この小道の真正面に橋のようなものがかかっている。

「そう言えば、地図に書いてるね、この先に大きな川、ナイール川があるって」

と、マカロニさん。おお、なるほどおー。

「チャッピー、エリザベス、ゴー！」

あたしが腕を突き上げて進めーとかいってると

「ちょっとまったあ！ エリザベスって誰だよ！ パトリシアだろ！ っていうかこの前ピーちゃんとかいってたじゃん！」

ホタリンがめずらしく突っ込んできた。

「うそでしょ……あのホタリンがつつこむなんて……」

「コネお姉ちゃんがびっくりしている……」

「そっだったけ？」

「そっだし！ な、パトリシア」

「……………」

ホタリンの問いを無視する。

「そうなの？ エリザベス」

「ぶふい……………」

あ、返事した。

「へへん、勝ったあ！」

「ま、負けた……………」

ぐふつ……………と力なくうなだれるホタリン。まあそういつときもあるって。

と、そんな会話をしていたうちに水の流れる音が徐々に聞こえてきて次第に大きくなってくる。

そして……………

「うわー……………」

「……………ばねえ！」

「なに……………コレ」

「予想以上に大きいね」

そこには

あり得ない幅の川が流れていた。

幅は100メートルほどありそうである。

向こう岸が遠く離れたところに断崖絶壁のような感じで見えている。その向こう岸とこっちをつなぐ1本の橋。

この橋は木製で、ところどころ木が腐り、はがれている。幅2メートルで一応手すりが付いてるけど……崩れそうでこわい。

「ねえ……橋ってこしかかないの？」

「地図によると……ココ以外はないみたいだよ」

「まじ……かよ……」

怖い……絶対落ちそう……っていつか落ちたらー……死んじゃうよね？

「アルスー怖いい〜」

「大丈夫だろ」

「いや、全然大丈夫じゃなくね!？」

「うーん、ちょっとひとまず、作戦を考えましょ」

というコロネお姉ちゃんの提案によりあたし達は橋の近くに馬車をとめ、5人で作戦会議を開くことになった。

「と、いつわけで、どうしましょうマカロニ会長」

「うーん……………そうだねえ……」

場を重い空気が満たす。

そりゃ、当たり前だ。オレだって怖いよあんなもん。

オレの考えからして、全員を乗せた状態の馬車で渡ったら確実に崩れる。

「わたし的に、馬車で通ったら崩れるんじゃないかなーって……………」

「それには僕も同感できるよ」

「えー……………こわいー……………」

「なんとかなるだろう」

アルス、ちよっとは怖がろうぜ。

「じゃーさ、会長、こつこつのはどうツスか？」

「では、ホタリン君、どうぞ」

オレは自分の案を言ってみた。内容は次の通りである。

全員のうち4人が馬車から下りて一人ずつ橋を渡っていく。最後の一人がエリザベスとチャッピーを連れて走破する。というものだ。

「なるほど……他には？」

「わたしは特にないわ」

「あたしも……」

「同じく」

「じゃー、これでいい？」

と、とりあえず大まかな作戦が決まる。

「よし、あとは誰が先にいくか、だね」

あー、そうか……これは、考えなくちゃな。

「オレー、一番最初がいいなあーなんて」

「あ、あたしも怖いから先に行きたい！」

「って、あんたたち、自分が先に楽になりたいだけでしょ！」

いいじゃん怖いんだし……と、考えているところ

「じゃあ、俺かマカロニを先に行かせたほうがよくないか？ 最後らへんにわたるとなると耐久性に限界が来て崩れ出したとき俺とマカロニでは対処ができない」

アルスが珍しくも10文字以上しゃべった。

「じゃあ、素早さに決めようか。1番目がアルス、2番目が僕、3番目がホタリン、4番目がコロネ、最後がリサ。」

「えーでもなんか怖いっていうかあー……」

「じゃあオレと一緒に乗って重力魔法とかで加勢しようか？」

「じゃありサとホタリンがラストだね」

「まかせろ！！！」

「あ、めっちゃたすかるー……っていうか絶対やってよね！」

「ああ、まかせろ！ リサ！」

というわけで順番が決まった。

「じゃー、いつてくる」

まずはアルスからである。

アルスが恐怖を微塵も感じてないように歩きだす。むろん恐怖なんて感じていないのだろう。ありえねー。

すたすたと橋を歩いてゆく。たまにギシッバキッギシッと音がなったりする。怖……

10分後、無事に歩き終えた。

「じゃー、僕だね」

マカロニさんが走ってゆく。

タツタツタツタ と軽い足取りで走るがそれでもかなりギシギシしている。っと、走っているうちに途中で一部が崩れた！

「おっと危ない危ない」

無事渡りきったマカロニさんだった。

よし。

次はコロネ。流石忍者。高速かつ軽い足取りで走っていく。

スタタタタタタタツ

バキヤ！

「きゃ！」

あぶな！ 心臓止まるかと思った！

そのままなんなく走り終えるのだった。

「がんばってねーホタリンとリサー！」

と、向こう岸でコロネが叫ぶ。畜生。わたりきったからって安心してやがって！ うらやましいじゃんか！

すごい勢いで進む馬車。それを追いぬかんとする崩壊音。やばい、落ちる……………！

「重力魔法グラビトン！」

ふわっ　と体が少し軽くなったような感覚とともに上昇する馬車の速度。

だがそれでも間に合わない……………！

「ホタリンなんとかしてー！」

「んなこといったって！　くそお！」

オレは馬車の後のほうに移動して、腕をまっしろに向けて、叫ぶ。

「火炎魔法フレイムバーストオオオオオオオオオオオオ」

オレの手から猛烈なジェット機のロケット噴射の時のように業火が吹き荒れる。

そのおかげで馬車は猛烈なスピードで突き進んでいく。

あと少し！　あと少し！！

コロネ達がいる場所にあと少し……………！！

そして、オレ達の馬車は猛烈な勢いで橋を渡りきることができた。

さか持病があつたとか！！

よく見ると視界前方に木を編みこんでつくられた3メートルほどの柵がずっと広がっている。

中心に扉があり、門番がいた。門番は鎧を着ていて、腰に刀を持っている。ぱっとみ武士である。いや、むしろ武士である。

とりあえず普通に中に入ろうと思う。

オレ達が門に向かって歩きだそうとした時、その門番がこっちにきて

「あ、あの、馬車はちよつとー……………ダメっていいいますかー……………」

と、もじもじしながら言う。女々しいなあ。

「えーっと、だつてさみんな。どうする?」

「んー、じゃあちよつと僕にまかせて」

とマカロニさんが門番と交渉しだした。

数分後。

「いいてせ」

何したんだマカロニさん……………。

というワケで中に入ったのだった。

オレ的には本日2度目の街である。マカロニさんはウイステラスも
いったらしいけど。

そして、オレは懐かしくなった。

え、なんでかって？

目の前の景色がすっげえ田舎の日本っぽかったからである。

いや、田舎っていうよりは江戸時代みたいな？

暴れん坊將軍でよく見る感じである。

舗装もされていない地面がオレ達のいる門から正面にずっと伸びて
いて、その道を木製でできて布の看板を下げている店が囲っている。

よく見ると袴のような感じの服や和風の鎧を着ている人が多い。男
女それぞれ刀を携えてたりする。

なるほど、剣士ばかりなワケだ。

ただどさすがに女性はかんざしをつけてまるくしてりはしてなかつ
た。

何分か眺めてみたけど魔法使いっぽい人は見当たらなかった。オレ
浮かね？

なんか地味に視線を感じる。あゝ、馬車が目立ってるとか？

「じゃーまず宿をとろうか」

「そうね」

ということで宿を探すことになった。

うーん、どこにいきやいいんだ？ マカロニさんの地図はあてにならないし……聞くか。

さあーと周りを見る。お、綺麗なお姉さん発見。

「ちょっと、聞いてくるわー」

オレは綱を馬に乗っているリサに渡して、その人のところへ駆けつけた。

「あー、ちょっと道聞きたいんすけどー」

「ああ、はい。どこですか？」

「宿………みたいなの？」

「ああ、宿でしたらこの道をあそこで曲がってまっすぐいけばいいですよ」

「まじでー、さんきゅー」

よし、情報GET！

馬車に帰ってくる。

「みんなー、場所わかったぜー」

「え、ほんと？」

「んじゃあ行こうか」

この道をまっすぐいってここで曲がって、よしここか、ってうおお
なんかどっかで見たような建物だった。

昔の神社みたいな感じで屋根は瓦だ。そんな建物が5個縦にのって
る感じの……

「すげえでけえ……………」

「うん、わたしも……………」

「どこかで見たような建物だね」

「五重の塔ではないか？」

「「おおおー」「」

アルスって実は成績いい感じ？

「なにそれ？」

リサは知らないらしい。

「まあ、入ろうか」

馬車をいったん建物の横に置いていく。綱はお地蔵さんっぽいやつ
の首に巻きつけておいた。

「よしよし、知らない人にビームはかないんだよー」

中に入る。当然中も木造で、ロビーのような場所があった。前いた
宿と似たような感じだ。ロビーは縦長の机に椅子があり、ほかには
特に何も無い感じの空間である。その端っこにカウンターがあり、
お姉さんがいた。

「あー、泊りたいんですけど」

「ご、五名様ですか？」

「おう」

なにか困ったような顔をする。なんかへんなこといったっけ？

「あーすみませんが3人部屋しかないんですよ」

あーそういえば前もそうだったよな。4人だったっけ？ まあいい
か。

「いや、かまわないっすー」

「そうじゃなくって……」

すこし説明を聞く。なるほど、うん。つまりこういふことらしい。

この宿は3人ずつの部屋しかなく、それ以上人が泊るのはダメらしい。アルデートのおばちゃんは「あたしやそんな気にしないよ」とか言ってたんだけどなあ。

「うーん、ちよつと考えとく」

「はい」

「ちなみに1泊いくら？」

「1泊銅5枚です」

「あゝ……」

「1泊5枚……別に痛くないけど前の宿より高くないか？ 5倍だけ？ 160円のファミチキが800円だけ？ ということでおれ一人じゃ判断しかねるのでみんなに聞いてみる。」

「なあ、1泊銅5枚だってよ。前の宿より高くないか？」

するとコロネが案外どうでもよさそうな顔で

「うーん、そんなもんじゃない？ 前の宿が安すぎたのよ」

という。続けてマカロニさん。

「僕も別にいいよ。手持ち残金的に余裕なんじゃない？」

「あたしもー」

リサも同感らしい。アルスは……無言の同意か。

あと3人部屋つてことを伝えとく。

「あとさ、ここ3人部屋しかないから部屋2つとったんだけど、部屋割りどうする?」

うーん、とみんな考える。するとマカロニさんが意見した。

「じゃあグーとパーでわかれようか」

なるほど。OK。そうね。とそれぞれ同意。

「おっけー。んじゃ、グツとパーでわっかれましょっ」

全員が拳を出し合う。

結果はこうである。

グーがオレとマカロニとコロネ。パーがリサとアルス。

というワケでカウンターのお姉さんの所に行き

「じゃあ、泊ります。そして3人部屋2つでー」

「かしこまりました」

とりあえず、1週間借りるか。5枚×2部屋×7日で銅70枚かあー。あっー、銀渡してお釣りがくるんもアレだから10日でもいいっか。

ということでオレは銀1枚わたして「10泊で」といい、鍵を渡されて、指定された部屋に行ったのだった。

ちなみに5階である。

死にそうになりながらも階段をのぼりつつ、無事部屋に突くことができた。

「じゃ、あたし達こっちいくねー」

「はあ……はあ……おけー……」

リサ& amp・アルスと別れる。

そして部屋に入ると……

おおー、こりゃ5人じゃきついわな。ってくらいの広さの部屋だった。

えーっと、簡単に説明するならば、こつである。

ベッドはなく、代わりに襖があることから布団かも。中心にテーブル。そして別方角にベランダがある。オレは修学旅行を思い出したのだった。

「懐かしいぜ」

「そつだね」

ベランダに出てみる。

うおおおおお、めっちゃ綺麗やん！

今はちょうど夕方であり、正面にジャストで地平線に沈みかける太陽が見えたのであった。

そしてそれに照らされる街並み。

街も和風でいいわー……と、そのとき神社らしき建物の所に巫女姿の綺麗な女の子がいたのを発見した。

「おおお、綺麗……」

「そうね……って、あんたどこ見てんの？」

と、コロネがオレの向く方向を見る。

ベシッ！

「いってえな！　なんでぶつのよ！」

「夕日かと思って同感したあたしがばかだった……。あとなんでオネエ口調なの？」

まあ、夕日も綺麗だけどさ……っていうかよくわかったな！　オレが見たところ！

「あはははは
「あはははは」

そんなやりとりをマカロニさんに笑われるオレ達だった。

「おおーなんかいい感じ!」

入ったと同時にそうリサが叫ぶ。

ああ、そうだな。

和だ。ベッドは無い。あと中央に机。そんなもんだ。

「うおーキレー!……って、うわうわうわうわあ!」

いつのまにかベランダにてたりサが身を乗り出して叫ぶ。そして体がどンドン傾いて……

危ない。

急いでリサの体を支える。

「あ、ありがとうアルス……」

「落ちてもいいけど、死ぬなよ」

「いやよくないでしょ!」

そして俺もリサの横に並んで、外を眺める。

ああ、いい眺めだ。夕日がいい感じで見える。最上階を選んだ価値

はあったようだ。

「そういえば、もうすぐ風呂の時間とかいってたぞ」

「えーっと、てことは温泉系？」

「温泉系だ」

温泉は1階のある廊下をずっと進んだところにあるらしい。

「じゃあ、温泉いこっかー」

「だな」

というわけで温泉に向かった俺達だった。

時同じくして夜

俺様達はハイワードの大会にでるためにまずジャッパーンに行くことになった。

そして途中橋を渡らないといけないらしいと子分に聞いた。

んでその橋を渡りに来たんだが……

………これである。

そこにはさっきまで橋があった跡があった。

「なあ」

「……………なんスかおやびん」

「泳ぐ……………か…」

「……………ええええええええ、無理っすよ！　こんな人間がやれるもんじゃねえっすよ！」

ふ……………オレにはできねエってか……………

「ふざけんなオルア！　なにができねえだ！」

「お、おやびん……………」

「んなことでへこたれるなら人間やめてやらア！　それに男なら……………

……………壁にぶつかっいたらぶっ壊せ！　いくぞお前ら！」

「うおおおおおシビれましたおやびんどこまでもついでいきやすぜええええええ」

というわけで唸り上げる川に向かって走りだす。

「うおおおおおおお行くぜお前らああああああああああああ」

「……………ああああああああああああああああああああ」

「

地面を強く蹴り、川めがけてダイブする。

あー、橋壊したやつ絶対ブツ殺す。

心の中でそう誓って俺様は川の中へつっこんだ。

街で暇つぶし

……ん

朝か？

あゝ。

「おはよう」

「ああ、おはー」

相変わらず早いな。

ベランダの柵に身を乗り出し、景色を眺めながらぼーっとする。

やっぱり綺麗だ……。

太陽が真上から日光を降り注がせているジャッパーンは街並みがほとんど1階建で、ほとんど街がみわたせる。あれ？　つか昼じゃね？

「あー……そっぴやコロネは？」

今気づいたけどコロネの姿が見えなかった。

「散歩にでも行ったんじゃない？」

とマカロニさん。へえゝ

「んじゃーオレも暇つぶしにいろいろ見てくるわ。んじゃ」

オレはそのまま扉を開け、1階を目指して階段を下った。

それにしてもやっぱ5階はきついわ……………

オレは無詠唱でグラビトン発動し、自分にかかる重力をちょっと軽くした。

ちなみに魔法は無詠唱で唱えられる。

え、じゃあなんで戦闘で叫んでるかって？

んなのもちろん、かつこいいからにきまってんじゃん！

あと、なんかそっちのほうが燃えるし。

1階に付いたので宿を出る。

すると宿の手前にリサの姿が見えた。

「おー、リサじゃん。なにしてんの？」

「あーホタリン。エサあげてたんだ」

「へえー、世話好きだな。」

「なるほど。調子はどうだーチャッピーとエリザベザベス」

「いや、エリザベザベスって誰！ エリザベスだよ！」

「ああ、ごめんな。エリザベザス」

「……………」

「んで、エサってどんなのだ？」

「草だよ。っていつか前コロネお姉ちゃんだっけ？　が言ってたじやん！」

えーっと……………覚えてない。

「そうだったけ？　まあいいや、んじゃーオレは暇つぶしにうるうるしてくるわー」

「はいはい。じゃああたしはこの子達と遊んどくねー」

そっついオレはリサと別れる。

ふーむ。

暇つぶしにうるうるしてくるとか行ってたけど、特にすることもないや。

ギルドとか探してみようかなあ〜

と、いうわけでオレはギルドを探してみようかなと思ったのである。

……………んーでもどうすっかな。

よし、あれ使うか。

というワケで人通りが少なそうな場所にいき、唱える。

「幻影魔法イリユージョン」

今周りからオレの姿を見れば「なんじゃこりゃあ！」みたいなリアクションをするだろう。

だから人通りの少ないところにきてんだがな。

「チエンジ！」

というオレの声と同時にオレの体がスウー………と空気に溶けてゆく。

今回はオレは鳥っぽいアレになったけど、空気のように透明化することもできるのだ。

ちなみにあの時なぜわざわざ鳥になったかというところ、ずばり、きまぐれである！

ぶつちやけるとコロネが驚く顔が見たかっただけだ。

そして

「重力魔法グラビトン」

オレは自分にかかる重力をほとんど相殺して、極限まで軽くなる。

「風魔法サイクロン」

自分の周りの風を操り、上昇気流を作り出し空を飛ぶ。

どうよこのコンボ。すごくね？

こんど戦いで使ってみよう。

えーっと、ギルドっぽい建物はー……………

……………と何分か空中をさまよいながらきよろきよろしていたらゴルドという文字が書かれた布がかかっている周りより少し大きな木造の建物があったのでオレはそこに降り立ち、全ての呪文を解除して、中に入ってみた。

「いらっしやい」

と、入った瞬間飛んでくるあいさつ。

カウンターを見る。どうやら男性らしい。

……………

引き返そうかな。

…とも半分真面目で考えたがもどつてもどうせ暇なので引き返さない。

中はアルデートとさほどかわらなかった。

横長の机、それを囲む椅子。そして昼間っから避けて飲みまくる酔っ払い野郎。そしてクエストボード。

オレはひとまずさらーっとクエストボードを見る。

なんか、さっぱりできるクエストを探していた。

最近満足に戦えてないんだよねオレ。

前のツインホーンウルフだっけ？ はアルスが一人でぼこっちゃったし、盗賊の野郎達は弱かったし。

オレはカウンターにいる野郎に聞くことにした。

「なんか、ぱーっとできてさっぱりできるクエストとかないッスか？」

「えーっと、Sランクですね。でしたらこれとかー……………」

と、わたされたのはこんなものだった。

ある森に紅龍スカーレットドラゴンが住み着いたらしい。すでに村が1つ潰されている上、子供と思しき小さいスカーレットドラゴンも一緒に行動している。それら全ての討伐せよ。

「おっけー、うける」

「わかりました。では、どうぞ」

そっつい彼は地図を渡してきた。うむ、こっから少し行ったところ

ね。おけおけ。

と、いうワケでオレはジャッパンからその場所へ飛び立った。

「よーしよしいい子いい子」

なでなでなでなでなでなでなで

かわいい〜

ぎゅー　と抱きしめなくなる。っていつか抱きしめた。

「ひひいーん」

気持よさそうに頭をスリスリしてくるチャッピー。

チャッピーはなんていうか、元気いっぱいな感じだ。

一方エリザベスはクールというか、静かである。

さつき適当に取ってきたいろんな草を上げたところよろこんでくれた。

嬉しい。

と、そのとき

「おー、リサじゃん。何してんの?」

ホタリンが現れた。

「あーホタリン。エサ上げてたんだ」

今起きたのかな？ 顔がすごい眠そうだ。

「なるほど。調子はどうだーチャッピーエリザベザベス」

「いや、エリザベザベスって誰！ エリザベスだよ！」

なに勝手にカツコよくしてるんだし！

「ああ、ごめんな、エリザベザス」

「……………」

なんか、つつこむ気が起きなかった。

「んで、エサってどんなのだ？」

「草だよ。っていつか前コロネお姉ちゃんだっけ？ が言ってたじやん！」

マカロニさんか迷ったのできっぱりとは言えなかった。

「そうだったっけ？ まあいいや、んじゃーオレは暇つぶしにづるづるしてくるわ〜」

「はいはい。じゃああたしはこの子達と遊んどくねー」

そういい彼は手を振りながらどこかに姿を消した。

ホタリンも暇そうだなあー

「じゃーあたしたちもなにかしようかー。何するー?」

「ひいひいひいん」

チャッピーがあたしの言葉をわかったのように返事する。んー、なになにー。

「ああ、おっけー。んじゃあ、外いこっか」

チャッピーいわく、思いつきり走り回りたいそうだ。

「エリザベスはどつする?」

ぶいっと顔をそらす。めんどくさいらしい。

「んじゃー、いこっかー」

あたそいはチャッピーの背中にまたがり、正面を指差し、叫んだ。

「レツツGOOー!」

紅龍（前書き）

暇でしたので2話連続投稿。最近戦闘書いてなかったので書いてみました。

あとタイトルが1つだけ長くなってバランスが変だったので短くしました。

12月27日 前ほたりんが魔法障壁のことを『結界魔法』と言っていた事に気づいたので障壁魔法を結界魔法に変えておきました。ごっちゃになったみなさまがた、もうしわけありません。

紅龍

「よっと」

オレは街で使ったように重力魔法グラビトンと風魔法サイクロンを器用に使いクエストに書いてあるドラゴンが出るといわれている場所に飛んできたのである。

「たしかここらへん……あれ？」

と、キョロキョロしていたら何やらひどく廃れた廃墟のような場所を見つけた。

気になったので近づいてみる。

うわー、なんじゃこりゃあ。

つい数週間前まで村だったような感じの廃墟が広がっていた。

半壊した木造の家、踏み荒らされた畑、なぎ倒された木。

あー、ここがああ潰されたっていう村か。

……にしてもひどい様子だぜ。

それから数分歩きまわっていたら何やら気配を感じた。

ん？ いまあの半壊した家から気配が。

「誰だー。誰かいんのかーコノヤロー」

すると半壊した家からヒョコツと小さな女の子が顔を出した。

やけにボロボロの服をまとっている。身長的に12歳くらい？

……………生き残りか

「よお」

「……………」

オレが近づいた分だけ後に下がる。

警戒してんのか？

「なあ、怖がなくてもいいんだ。オレ、めっちゃいい男だから」

……………。

なんだその目は。

「あつはは、大丈夫だって」

するとてくてくこっちに歩いてきた。

「この村の住人か？」

コクツ と頷く。

「飯とかどうしてた」

すると少女は半壊した家を指す。どうやら食料は残ってたらしい。だがそれもいつまでもつかアレだよなあ。

街に連れて行ったほうがいいかもな。迷子センターくらいあるだろう。

「お兄ちゃん……魔法使い？」

と、少女が初めて口を開く。

まあーこの服装的にそうとしか見えねえよな。

今のオレは戦士服ではなく魔法使服だ。魔法の首輪、魔法の腕輪、魔法のローブを付けている。

実際魔法使いだけだな！

「おつよ」

「強い…？」

「ああ、つよいんじゃない？　そこそこ」

強い？　っていわれてもなあ。　この世界の魔法使いと闘ったことないからわからん。

「お願い、ドラゴン倒してきて……みんなのためにも……」

まずい！

そこには太陽の光に反射させて輝く紅色の龍がいた。

「ちょ、お前そこ隠れてる！」

オレは少女を草村の中に隠れさせる。

ドシンン！

オレの正面に対峙するように両足で着地する紅龍スカーレットドラゴン。

紅色に光る目がオレを見据える。

すこし遅れて。

「ギヤオオオオオオオ」

小さい子供サイズのスカーレットドラゴンが下りてきた。

まあたしかに子供のドラゴンもいるとは聞いたけどさ。

10匹ちょいいるなんて聞いてねえぜ？

「ギユウオオオオオオ」

親（と思しき）ドラゴンが吠えた。と同時にミニドラゴンが突っ込んできた。

まずは氷刀で……

と刀を召喚しようとした時

「……………!?!」

すでに目の前まで迫っていた。

うお、早つつつ!!!

オレは無詠唱で両足に筋力強化の補助魔法をかけ、横に素早く回避した。

素早い軍隊……………厄介だ。一瞬でかたずけるか。

「氷刀!」

オレの腕に水でできた刀が召喚される。

これはアイスフォームの派生で作った氷刀のさらに派生系である。

簡単な話、氷の温度を下げて溶かしただけである。

目の前に迫ったドラゴンを斬りつける。

スパツ!

半ばまで食い込んだ!

今だ！

「電撃魔法サンダーエレクトリックショック！」

目の前が一瞬にして光に支配される。オレは目をつむる。

光が消えた後、目の前に黒コゲになったミニドラゴンが転がっていた。

周りのドラゴンを見る。

「ぎゅっっっ……」

全員がオレの場所を見失ったのようにキョロキョロしている。親玉も例外ではない。

よし成功！！

そう、オレの狙いは目潰しだ。

水の刀を作り、斬る瞬間に電撃を通し、1匹を感電死させたと同時にその発光で他のヤツらの目をくらます。

そしてオレはそのチャンスを逃さない。

「重力魔法ザ ブラックホール！」

オレを中心に発動し、全員がオレの近くに引き寄せられる。

「結界魔法ガードバリア！」

オレは自分を中心に正方形の魔法障壁を展開。これによってドラゴン達はオレに直撃せず、ぎりぎりのところで見えない壁にぶち当たる。

「ブラックホール解除」

これは魔力消費が激しいからすぐ解除する。

全員地面に落ちた瞬間次の魔法を唱える。

「冰雪魔法アイスロック！」

地面に手を押し付けると同時にそこを中心に半径5メートルのオレ意外のヤツが氷によって身動きを封じられる。

つまり、チビ全員だ。

「岩石魔法サモンロック！」

空中に巨大な岩石を召喚。

「火炎魔法フレイムベール！」

岩石が炎に包まれ、隕石のようになる。

「そして、重力魔法グラビトン！」

炎に包まれた岩石が隕石のごとく突っ込んでくる。

「完成！　くらえこの野郎！！　合成魔法メテオストライク！！！」

オレは風魔法と筋力上昇の補助魔法で回避する。

ドガアアアアアアアアアン

さっきまでオレがいた場所が大爆発。

「風魔法ハリケーン」

竜巻をおこして邪魔なものを全て吹き飛ばす。

よし、綺麗さっぱりだぜ。

あとはアイツだけだな。

ちょうどその時目くらましがとけたらしい。その2つの目がオレを睨みつける。

「いくぜ！」

「グルオオオオオオ！」

オレはスカーレットドラゴンに向かって飛び込んだ。

チャッピー砲（前書き）

12月27日誤字の指摘がありましたので直さしていただきました。
ご指摘くださりありがとうございます。

チャッピー砲

今、目の前でさっき会ったばかりの魔法使いのお兄ちゃんがドラゴン達と闘っている。

あのドラゴン達は私達の村を壊滅させた憎むべき仇だ。そして同時に強かった。

村総勢で戦った。魔法使いも何人がいたのに結果全滅させられたのだ。

もちろん自分の両親も……

とにかくそんな化け物じみたドラゴン達だった。

だが、彼はそんなドラゴン達と一人で対等に、いやそれ以上の力で戦っていた。

つつこんできた小さいドラゴンの攻撃をよけ、違うドラゴンに向かって水でできた刀で切りつける。

すごい、あんな綺麗な刀をしかもほぼ無詠唱で……

そして食い込んだ瞬間感電。そしてすごい光。

私は腕で目を守った。

え、雷魔法も使えるの？

それにまたほぼ無詠唱だった。

それから彼の闘いは私は自分の目を疑いかねないものだった。

「重力魔法ザ ブラックホール！」 「結界魔法ガードバリア！」 「氷雪魔法アイスロック！」 「岩石魔法サモンロック！」 「火炎魔法フレイムベール！」 「重力魔法グラビトン！」 「風魔法ハリケーン！」

流れるように次々と魔法を発動させて、一瞬にして小さいドラゴン達が全滅した。

何……あれ……

今だけでも水、雷、土、炎、風の5種類の属性を使った。それに重力魔法なんて私は知らない。

ってというか、彼の使う魔法は何ひとつ知らなかった。

私は母から魔法についてはいろいろ教えてもらっていたはずなんですけど……。

そしてたしかに母はこう言っていた。

基本は1人1属性しかもっていないく、2つ持ちは極めて希少、と。

ちなみに私は風属性だけが使える。

あの魔法使い……何者なんだろう。

全滅したのを確認した魔法使いは、今度は親玉と対峙した。

にらみ合って………まずは魔法使いの人が動いた。

バキューン！ という音とともに脚元が爆発し、次の瞬間ドラゴンの腹に向かって拳を入れていた。

え、何今の！？

重たい衝突音。

後に脚を引きずりながら吹き飛ぶドラゴン。反撃として火炎ブレスを吐いてきた。

あれは！

私はあの時のことをフラッシュバックした。

あの炎は母の水魔法が通用しなかったレベルの灼熱だった。水魔法は炎魔法に相性がいはいはずなのに触れた瞬間全て蒸発してしまっていたほどに。

「うおおお、やべえ！ 岩石魔法ロックブラスト！」

彼の腕に魔法陣が浮き上がり、一瞬にして直径1メートルくらいの岩石が召喚させて打ちだされる。

岩は炎に負けずそのまま突き進んでゆく。

顔面に当たる。そのスキに魔法使いは再度近づき、近距離で魔法を

放つ。

「火炎魔法ファイヤーボール！」

ドラゴンに命中。そして火柱が上がる。

砂煙が晴れ……やはりというべきが無傷のドラゴンがたっていた。

「は？ お前硬すぎるだろ」

「グロオオ！」

再び火炎ブレスを放つ。

「く……………水魔法ウォーターバズーカ！」

彼の掌に魔法陣が召喚され、そこから大量の水流が飛び出す。

ブレスと水が激突……そして爆発し水蒸気があたりを包む。

そして……………いまだドラゴンは無傷。

あの魔法使いのお兄ちゃんでも攻撃が通らないなんて……

「やべえオレ勝てねえかも」

あ、弱音はいた。

ドラゴンが猛烈な勢いでタックルする。

「やっぱり、結界魔法ガードバリア！」

とちゅうから翼を広げ滑空しながら突っ込んでいく。

まずい！ あれを直接くらったらいくらあの人でも……！

ドラゴンが魔法使いに激突する直前、別の方向から少女の叫び声が聞こえた。

「チャッピー砲発射あああああああああ」

「チャッピー砲発射あああああああああ」

ギユウウウウン

チャッピーの口から黄色い光線が発射される。

龍に直撃………せず、地面にぶつかり大爆発を起こす。

「リサか？　なんでここにいんの？」

ホタリンが聞いてくる。

「チャッピーと追いかけてこしてたんだよね。そしたらなんか死にそうなホタリンがいたから」

「いや、全然死にそうじゃなかったし。まあ、来てくれてありがとう
いせ」

えーっと、てことはやっぱり危なかったんじゃん。

「あいつ、オレの攻撃あんま効かねえんだよ」

あいつ、ってのはさっきビームをまともに食らったドラゴンのことだよな。あれ硬そうだもん。

砂煙が晴れる。

ドラゴンがこちらを睨んでいる。

その目にはさっきよりも濃い怒りを宿して。

「じゃーあたしとチャッピーが攻撃しまくるからー」

「らじゃーっす。スキはつくってやるぜー」

ドラゴンがこちらに翼を使い軽く滑空しながら突進してくる。

「重力魔法グラビトン 出力最大iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

龍が突然地面にたたきつけられる。

めり込んでゆき、地面にヒビが入りところどころ隆起する。

うわー、すごい。

「チャッピー砲発射!」

ギユウウウウウン

ドラゴンに直撃。

さっきのような大爆発を起こす。と同時にドラゴンの咆哮。

「風魔法ハリケーン」

風で小規模な竜巻をおこし、邪魔なものを周りに吹き飛ばす。

砂煙が晴れたそこには、頭から血を滴らせたドラゴンがいた。

二つの目があたしとホタリンをにらんでいる。

殺ス

そう聞こえた気がした。

こわっ！

「ホタリン、あたしをサイクロンで上げて！」

「うい 援護はまかせろ。風魔法サイクロン」

あたしは本気で地面を蹴り飛ばす。

あたしの周りの空気が高速で動き、上昇気流を発生させてあたしの体は上向きに吹き上げられる。

跳躍力に風魔法が加わり、30メートルほどまで軽く飛翔する。

場所はドラゴンの真上である。

そんなあたしについてくるように

バキューン！ という銃を発砲した時のような音とともにホタリンが飛んできた。

「やっぱりオレも攻撃するわ」

「え！ いつのまに！ っていつか今何したの！」

瞬間移動なんて魔法あったっけ？

「あとで教えてやるぜ。とりあえず、今は攻撃じゃね」

「おっけい！ 召喚 ライトツインソード！」

真下に向かってあたしは叫ぶ。

「降り注げ ギガスラッシュ！！！」

あたしは双剣をめちゃくちゃに振るう。

めちゃくちゃに早く、そして美しく流れるように。

無駄のない効率的な動きで振りまくる。

黄金色に輝く剣から振るたびに光の斬撃が飛んでゆく。

雨のように降り注ぐ光の斬撃。

「じゃーオレも。降り注げ　　ギガツララツシュー！」

ホタリンの周りに無数の氷でできた氷柱ことうが浮き上がり、ドラゴンめがけて降り注ぐ。

「ネーミング悪っ」

「まじ？　じゃああとで改名する」

でもすごいかも。氷魔法でオリジナルの技作ってるし。

そして雨のように降り注ぐ氷の斬撃。

まともに食らったドラゴンは爆発による砂煙で状況がつかえない。

「よし、ラストスパートといこうぜ！」

「おっけい！」

二つの剣を鞘に戻し、魔力を溜めこむ。

ホタリンは右腕に魔力を溜めているようだ。腕が紅蓮の炎に包まれている。

そして私は両鞘から剣を抜き、叫ぶ。

「双剣スキル　大斬波だいざんぱ！！！！」

「はあく、たすかったぜリサ」

「えっへん」

ここはさっきまでオレとリサが攻撃を浴びせていた場所。

さっきの大爆発で半径20メートルの円形の更地が出来上がった。
た。

そんな中びくともしなかったあの逞たくましい岩に今オレとリサは肩を預けていた。

「はあく、疲れた」

「そういえばあの瞬間移動どうやったの？」

「あれな。魔法障壁と重力魔法の応用なんだぜ」

「え、障壁で？」

そうさ。コレは我ながら考え付いた時は自分はもしかしたら天才ではないのかと疑った。

「まず自分の脚を包み、包んだ脚のすぐ下にもう一つの魔法障壁を展開するんだ」

「ほうほう」

「そして重力魔法ザ ブラックオールを超小規模に発動して脚元の

魔法障壁を爆発させる」

「おぉー」

「そして爆発する瞬間3つめの魔法障壁を作るんだ。これで脚元の魔法障壁を囲んで、爆発のエネルギーをオレの脚に全て集中的にぶつけさせる。その衝撃でおそろしいスピードでつつこめるんだ」

「……………ううーん……………なんかすごいね！」

うん、絶対わかってないな。

まあ簡単に言うところである。

脚元を爆発させて、そのエネルギーで自分を吹き飛ばす。

「一直線にしか進めねえのが弱点なんだけどな」

「へえ〜」

と、オレがのんびり説明をしていたら

「ヒヒイン」

チャッピーが来た。

危険を感知して安全なところまで逃げてたんだな。偉い。

そしてさっきの少女が口にくわえられている。

リサの掛け声に高らかに返事するチャッピー。

ダダダダダッダダダダ

そしてものすごいスピードで森を駆けていった。

……。

おきざりかよ！

オレは少女の前でかがみ、背中を向けて言った。

「ジャッパンまで連れてってあげるぜ。しっかりつかまっとけよ？」

少女は無言でオレの背中に体を預けてきた。

と、いうわけで、オレは少女を背負い、重力魔法と風魔法と幻影魔法を唱えて街まで飛んで帰った。

「あらー生きてたのねーよかった心配したんだからおばちゃんん
くうーんよしよしよしよし」

オレは今ジャッパンの少女の親戚のいる家を訪問している。

ノックをして扉が開いた瞬間これである。

40代くらいと思われる女性が出てきて少女を見た瞬間に抱きつき涙まじりの再開。

あー、苦しそう。

「ありがとございませうどんなお詫びをすればいいか」

「いや、いいんすよ」

そついいオレは自分の宿に帰るため身をひるがえ翻す。

おわび っていわれてもな。オレ、クエストのついでに届けただけだし。

「あの、まってください！」

「いえ、あのまじ結構なんでー。じゃあ、元気だな！」

少女が手を挙げて返事を返した。

うん、大丈夫そうだ。

「幻影魔法イリュージョン」

そしてオレは幻影魔法によって姿を空気に溶かす。

「あれ？ 魔法使いさん？ 魔法使いさん??」

いやー、なんで透明になって逃げたかっていうと、おわびとかしつこくされるとめんどうだからさ。

あとそういつの目当てに助けたワケじゃねーし。

よし、じゃあギルドに報告に行きますかあ

こうしてオレの暇つぶしは終わったのだった。

素材集めは大変

「両手剣か……これなんてどうだい金髪のお兄さん」

カタログを渡される。

名前 鏡剣 ミラーブレイド

種類 両手剣

説明 魔法攻撃を無効化できる。

魔法無効化……か。いいね。イラストは銀でできた両刃剣な感じだ。

なぜ両手剣なのかというと、僕の剣はハルバードやエクスペローシヨンとか、大剣類ばかりですよ。相手には苦戦を強いられる。だからそんなとき用にとあってね。

この前のツインホーンウルフの時は集団戦だから範囲攻撃でなぎ倒せたけど、あれ単体と闘っていたらちよっと苦しかった。

そこでもうすこし軽い、普通の剣がほしかったわけなのである。

というわけで僕は今ジャッパンの隅にある合成屋に訪れている。

「これで」

カタログを返す。

「そうか。ふむ。じゃあ……と、これ持ってきてくれ。金もそん

ときな」

適当に紙にペンを走らせる合成屋のおじさん。そのメモ用紙を僕は受け取り、ズボンのぽけつとに入れた。

ちなみに今はあのラフな格好だ。ニット帽子にTシャツ & amp ; 長ズボン。

私服みたいに動きやすいから普段はこっちなんだよね。

「わかりました。では、明日くらいに来ます」

「おう、生きて帰ってこいよー」

えーっと、なにになに？

僕は渡されたメモ用紙を見る。

- ・ソフティモ村の近くの崖でとれる青く光るえーっとなんだっけ、そのなんとか石を握りこぶし一つ分くらい
- ・同じくその崖でとれる鋼鉱石

.....。

と、とりあえず青く光る石.....か。

鋼鉱石も場所は同じらしい。

馬に乗ってそこまでいこう。

そう決意した僕は宿の近くまで来て、エリザベスに乗ることにした。

「頼むよエリザベス」

「……………」

首をふって返事。

よし、じゃー出発。

馬に直接乗るのは人生で初めてで不安だったけど、結果そこまで怖くもなく、普段馬車を引く時よりも早いペースで進むことができたのだった。

僕は背中の上で指示をする。

「まずは村だからー……………あっちだよ」

「……………」

ぱからっ ぱからっ ぱからっ ぱからっ

走り続けて30分くらい。

地図の通りに進んだら村に着いたのだった。

「ここが、ソフティモ村か」

「……………」

木造、田んぼ、畑。簡単に言えば田舎だった。けどすこし広い。人もちらほら見える。

崖っていうのもよくわからないし、村の人に直接聞いてみよう。畑を耕してる人に聞く。

「あー、ここソフティモ村ですよ。崖ってどこですか？」

「ああ？ お、おおお、おおさん崖にい、行くのかい？」

様子が変だ。微妙におびえている。

「なにか……あつたんです？」

「いや……最近人食い魔物がすみついてな……」

「へえ」

「いくのはやめといたほうがいい……」

あー、ということとは素材集めするために倒さないといけないのか。

「なら、倒してきますよ。場所は？」

「あつちにまつすぐだ」

まあそんなわけで僕はエリザベスの背中に乗って崖に向かう。

森の木々をよけ、草をかき分けて進む。

やがて崖らしきものがみえてきた。

「これかぁー」

それは絶壁だった。

目の前に崖。

山が途中から切り取られたかのような断面図だった。

青く光る何かがちらほら見える。あれだね。

そうしてその崖に近寄ろうとした時……

全方向から鋭い気配を感じた。

これは！

馬に乗ったまま振り返る。

………うわ。

全身緑色の毛におおわれたライオンのような魔物が数十体どこからわいたのか僕を囲んでいた。

「ゲルルルルル……ガウ！」

村人が怖がっていたのもうなずける。

よく周りを見ると脚元に人の骨らしきものがちらばっている。

なるほど、縄張りを張っていたのか。

その魔物が一斉に飛びかかってくる。

間に……………あわない!!

武器を召喚してから技発動までの時間がたりない。

よけることもできなさそうだ。

いや、よけたとしてもエリザベスがただじゃすまない。

……………まずい。

「ひひいん!!」

その時、一瞬エリザベスの脚元に魔法陣が出現したように見えた瞬間、僕の視界が切り替わった。

いや、なんていえばいいんだろう……………違う場所にワープしたよう
な。

「あれ？」

後を見る。

そこには僕がさっきまでたっていた場所に飛びかかっているライオン達だった。

何もないところに飛び込んだライオン達が何やら不思議そうな顔をしている。

まさか、エリザベスは転移が？

「エリザベスは転移が使えるのかい？」

ぷい　と顔をそらされた。

まあいいや。助かった。

「ありがとう、エリザベス。危ないから下がってね」

見据える。

数は………50くらいか。

「出でよ　爆剣エクスプローション」

ゴオオオと腕を炎が堤、その炎が形を変え、剣となる。

赤く大きな剣だ。

危険を察知したのか一斉に飛びかかってくるライオン達。

「エアインパクト！」

剣を横に振りながら叫ぶ。

一瞬遅れて僕を中心に半径10メートルのところに赤いラインが円状に走る。

吹き飛んだライオン達を狙うかの如く爆発を起こしてゆく。

爆発、爆発、そして爆発。

赤い火花と灰だけを残していく。

連続する爆裂音がやんだ時にはもうほとんどライオンは残っていません。な

あつた。

あと2匹………！

だが、その時僕は思い出した。

なぜ、両手剣を作ろうとしていたのかと。

「はっ！」

ライオン1匹に赤い大剣を振り下ろすも

ひょい………とよけられ、そのスキをついて爪でひっかいてくる。

反射的によける。

そう、僕は素早い敵を単体で倒すのが苦手なのだ。

「当たらない………！」

後から飛びかかってくるライオンをよけ、エクスプロージョンを振るう。

たまたまヒットし、一撃で息絶える。

あと1匹。

「出でよ、魔剣ハルバード」

僕は斧のような槍のような大剣、ハルバードを召喚する。

こっちのほうが使いなれてるからだ。

ハルバードを肩に担いでにらみ合う。

集中する。

素早い相手に重い一撃を与えるには相手がどこにどう動くかを予測してそこに攻撃するしかない。

しかし、これは賭けだ。

予想を間違えば大きなスキを作り致命傷になりかねない。

ライオンが走ってくる。

前足を少し踏ん張り……………

そこか！

僕はハルバードを正面にまっすぐ上から下に振り下ろした。
魔力を流す。

僕の予想は的中し、地面を蹴って飛び込んできた瞬間に僕のハルバードが一瞬にして迫り、縦に一刀両断したのだった。

「ふう……」

一息ついた、そのとき。

ドスウーン

！？

僕の目の前に2メートル以上はあるライオンのような魔物が姿をあらわした。

……採取したいだけなのに。

素材集めは大変（後書き）

最近作者は忙しくなるかもです。小説の更新が遅れるかもしれませんが、そのときは申し訳ありません。

ストレス発散

……採取したいだけなのに。

そんな僕を嘲笑つかの如く視界に飛び出してきた大型のライオン。

ちっ。

この際ストレス発散のためにも戦おう。

ハルバードを肩に担いで、見据える。

ライオンが前足を踏ん張り……飛んでく……あれ？

その場から消えた。

どこだ！

耳を澄ます。

……

……がさっ

そこか！ と、振り向いた時にはもう目の前まで迫っていた。

早い！

僕は肩に担いでいたハルバードを反射的に中段に構えガードする。

ハルバードの刃がライオンの鋭い牙と触れあう。

ドウアアアアアアアアアアアアアアアアアア

目の前で炸裂音。

お互い力押しになる。

だが、向こうが少し上だった。じりじりと僕を後に押ししていく。

すごいパワーだ……くっ

ライオンの表情が少しほころぶ。

まだまだだな。とでもいったそうだな。

いったんライオンが力を抜き、間髪いれず突進。

だめだ、間に合わな……

ドガアーン！

吹き飛んだ。

「ぐわっ」

まっしるに一直線に吹き飛んだ僕は森の中にあつた一本の木に叩きつけられた。

……
…… やってくれるね……

さて、どういたぶってやるつか。

うーん……

正面に高くそびえる崖を見ながら考える。

まあまずあれだよな。

有利な立場につくことだ。

「装着 ディスグレイトシリーズ」

白い粒子がポーチから出てきて僕の全体を囲み、ひとつの装備となる。

そう、それは僕が最初から付けていた装備だ。

これはラフな格好より防御力が高い。

まずは防御力の確保。そして。

「出でよ！ 爆剣エクスポーション！」

腕の中にひとつの赤い、そして大きな剣が召喚される。

それを地面に突き刺して

「爆ぜろ！ ウェーブショックインパクト！」

対象は周りの木。

波紋状に広がった空気の揺れ。

一時遅れて周りの剣が何かに叩きつけられたのごとく破壊され、吹き飛んでゆく。

と、その時、僕をぶっ飛ばしたところ、つまり崖らへんからライオンさんが走ってくるのが見えた。

吠えながら走って来て……………

よし、今だ。

「弾ける！ エクスプロージョン！」

またもや対象は木。

剣が赤く光り、地面に吸い込まれていったあと次々と木が爆発し炎の海になってゆく。

そう、まずは『森』という地形を変形させたかった。

森は僕からしたら見晴らしが悪く、木が邪魔だ。

逆に獣的には隠れる場所が豊富にあり、戦いなれている場所。

炎がどんどん周りに広がり、僕とライオンを完全に囲んだ。

「グルウウルルルル……」

警戒と威嚇

まあ突然炎に囲まれたらそうなるよね。

これで隠れる場所も隠れた場所もない。

タイマンで戦える。

「出だよ、魔剣ハルバード！」

ハルバードを召喚する。

肩に構える。

ライオンはさっきのように走ってきてきて前足を踏ん張り……

中央！

僕はさっきみたいに反射的な動きで剣を振るうのではなくちゃんと力を込めて振り下ろした。

「はっ！」

短く息を吐き出す。

そして魔力を流す。

ハルバードを肩に担いで、あえて振り向かず、正面を見ながら魔力を流し込む。

耳を澄ます。

意識は後ろ全方向。

.....

ダッ　と地面をけるような音が聞こえた。

そこか！

僕は肩に担いだハルバードを思い切り引き絞り遠心力を乗せて振り向きながらぶん回す。

ぶん回した先にあったのは爪。巨大な爪だ。

やはり。

こういう相手の死角を突く技は考え方次第では簡単に推測できる。

今の僕の死角は、上と下と後だ。

そう、逆に狙うとしたらこの三か所しかありえない。

上は空を飛べない限り使えず、下は土の中を移動しなければ狙うことができない。

というわけで、僕は後の土を蹴って飛びかかってくる音がどの方向なのか聞き分けるだけで反撃は可能となる。

そして僕は刃が爪と交差した瞬間魔力をながしつつひそかに技名を
呟く。

「ジャツジメントインパクト」

一瞬ハルバードが光った。その瞬間。

ドガアアアアアン！

という爆裂音が目の前で発せられる。

魔力＋遠心力＋のジャツジメントインパクト。

さあ、どうなるかな？

僕の刃があたった場所

爪の先からライオンの肩のあたりが……………

消えた。

いや、消えるように吹き飛んだ。

「グルウオウオオオオオオオオ！？」

これで状況はさらに有利になったかな。

足の負傷は戦局を大きく左右する。

このライオンさんも例外ではない。

驚愕しているライオンのもう片方の前足に向かって僕はハルバードを振り下ろす。

「シヨックインパクト」

ギシャアアアア

よし、前足は消えた。

前だけ消えたら前の支えがないから身動きができなくなったも同然。当然スキだらけだ。

スパッ

ギユシ

ついでに両後足も切断。

叫び、悶え苦しむライオン。

僕はその姿をすこし眺める。

よし、もういいかな。

かわいそうだから早く楽にしてあげよう。

僕はハルバードに魔力を溜める。

それに反応し、禍々しいオーラに包まれていく。

さらに僕は攻撃力を上げる。

「補助魔法 パワーリース」

補助魔法を唱えた瞬間僕の剣を包むオーラが一層濃くなる。

ちなみに僕は補助魔法を1つだけ使える。攻撃力底上げのためにが
んばって取得したつけ。

これくらいでいいかな。

「じゃあ、いつてらっしゃい」

僕はハルバードを両手で真上に構えてわかれのあいさつをする。

「ストライクインパクト」

そして力いっぱい振り下ろした。

「ふう………ちょっとやりすぎちゃったかな」

崖の前まで歩きながらふと思う。

さっきのライオンは僕の一撃で消し飛んだ。

だが僕の放ったエネルギーはそれでは止まらず、巨大な斬撃となっ

て崖まで地割れを作りながら飛んでいき、その崖を縦に割ったのだ。僕も頑張ればリサみたいに斬撃が飛ばせるようになるかもしれない。エアインパクトは使えるけど、僕のは実際斬撃を飛ばすわけじゃないからね。狙った獲物にエアインパクトを放ったとしても獲物と僕の間には攻撃判定はない。

簡単に言えば、一直線上に攻撃することはできない。

「これ……かな」

さっきの斬撃で地面にごろごろ落ちている青く光る石を手取る。

よし、やって採取できたよ。

「ふうー……」

一息つく。

スウーン

横から何か出現するような音がした。

「なんだ、エリザベスか。……じゃー帰ろうか」

「……………」

コクッ

と返事。

そういうワケで僕の長く短い素材集めは無事終了したのだった。

「おう、金髪の兄ちゃん、どうした」

「いえ、素材が集まったので」

コロコロコロコロ

青く光る鉱石がカウンターに転がる。

「ず、ずいぶん早いな……」

「あっはは、ありがとうございます」

「……………んでよ、お客さん」

「はい？」

「鋼鉱石は？」

「あ」

本来の目的を達成できなかったというオチ。

女の子は危険（前書き）

新しい年ですねー
いえー

女の子は危険

やばい……逃げなきゃ……

「ア、アルスどうしよう……」

小声で話す。

「さあ」

……。

路地裏を歩く途中、わたしはなんでこんなことになったのかを思い出した。

「はあ……」

ベランダの柵によたれる。

今わたしは特に考えることもなく、ポオーとしているのだった。
ちなみに現在昼。

「……」

街の景色を見ながらなんとなく考える。

もうジャッパーンにきて1週間以上はたっている。クエストはたくさん行ったし、そこそこお金もたまっている。わたしもいろいろ行

った。

だけど、そろそろやることが尽きてきた。

誰かいないかな。と思ったがホタリンは寝ているしマカロニさんは朝からいなかった。リサは馬と遊びに行っている。

「暇……ね」

なんとなくつぶやく。

返事は返ってこないのにね。

「暇……だな」

返ってきた。

ええっ!?

ふと横を見る。

隣の部屋の敷地のベランダに同じようにもたれかかる着物姿のアルスはいた。彼女も暇そうに景色を眺めている。アルスはほぼ無表情だけどなんとなく雰囲気であった。

ちなみになぜアルスが着物を付けているかというと、この旅館が無料で貸し出している。何かと露出度の多いアルスにマカロニさんが勧めたらしい。

わたしも着物である。

「アルスカ……びっくりしたあ」

「悪い」

そのまま会話。

「どっか、いこうか」

「ああ」

なんとなく、アルスを誘い、暇をつぶそうと思った。

階段を下り、宿を出る。

うーん……

「食べ歩き、しよっか」

「そっだな」

暇な時はたまにする食べ歩き。あっちの世界ではケーキ屋とかちよくちよく寄ってたっけなあー。そっかいえばこっちにケーキとかあるんだろうか。とりあえず、ここにはなさそうね。あるとしても和菓子くらいかも。いや、和菓子もなかなか……

とりあえず食べ歩きを使用と決意したわたし達は街を歩く。テキトーにうるちよろしていたらおいしそうな店を見つけた。

「アルス、あれいこ」

「……………」

手を引いて店に入る。

その店は小さな屋台のようなもので、タイ焼きらしきものを売っていた。

そこから漂ってくる香りが香ばしい。

「それ2つください」

「あいよ、銅1枚だよ」

2こで1枚か……………安い。

とりあえず、歩きながら食べることにする。

はむっ

うん、外はかりかりしてて中に餡子^{あんこ}が詰まってて甘……………

「アルスも食べてみて」

ぱくっ とかじる。

「いいな……………」

「コレ」
タイヤキを見つめながらそう呟く。

相変わらず無表情ながらおいしいという雰囲気は伝わってきた。

それにしても……………

横を歩くアルスを見る。

着物にあつてる……………

「ん、何か付いてたりするか？」

「え、いや。ただ、着物にあつてるなーって思っただけ」

だって似合ってるんだもん。

「コロネも似合ってるぜ」

キラーン

という効果音がなりそうなさわやかな雰囲気で言ってくる。無表情だが。

不覚にもドキッとしてしまった。

っていうかあれ？ 今語尾に『ぜ』って付けた？

気のせいかな。

でも、似合ってるって言うてくれた。
なんか嬉しいな。

「え、そうかなあ……………変だったりしない？」

「ああ、大丈夫だ。似合ってる」

「ん、ありがとう」

なんかアルスといると男の子と一緒にいるみたいだ。

もしかしてリアルでは男だったりするのかな？

まあそうだとしても驚か……いや、わかんない。

男だったとしても違和感はないけど、なんかなあ

「ん？ どうした。ぼーとして」

「え、いや、なんでもないよ？ あ、あれいきましたよ」

偶然目に入った店を指差して、アルスの手を引きながら歩いていく。

その店は布でできた看板に和菓子屋と書いてあり、カウンター、ベンチが外に出ているとても小さな店だ。江戸時代でよく見るお団子屋さんのなイメージがわく。

「いらっしやい、お譲ちゃん達、2つだね。あいよ」

と、おばちゃん。

お金をわたし、それに引き換え桜色のお団子を買った。

「ありがとうございます」

一口食べる。

「はむっ……………おいしい……………アルスも食べてみて」
パクッ

「うん、いいな」

おいしかったらしい。
微妙に頬が緩んでいるように見えなくもない。

「アルスっていうのかい。男の子みたいな名前だねえ」
とおばちゃん。

「そんな感じだ」

どんな感じだ……………

……………前も同じことつつこんだわね。温泉で。

「まあ、ゆっくりしとくんだよ」

そついいおばちゃんは店の裏へと消えていった。
しばらく座り、空を眺める。

「平和ね……………はむっ」

道歩く人々はみなニコニコしている。カップルらしきものや男同

士でしゃべりながら歩く人、お菓子を食べながら笑い合つ女性達。腰に刀を刺している人もいる。

なんていうか、平和だ。

「平和は………暇だな。はむっ」

平和は暇か。たしかに。

「平和はいいことだけど、俺は危険の方が好きだな………はむっ」

「へえー………変わってるわね」

まあ、実をいうとわたしもだ。

平和は暇。暇っていうのは一番苦しいものだと思う。でも平和はいいことだ。

なんか矛盾してるわね。

「そういえば、アルスってなんで一人称が『俺』なの？　もしかして俺っ娘ってヤツなの？」

とくに意味もなく思いついた疑問を言ってみる。

「俺っ娘？　なんだそれ」

知らないんだ………でも、そうかもね。人生経験少なそうだ。

ちなみに俺っ娘は一人称が俺な女の子のことである。

「…………俺、じゃなくて私のほうがいいか？」

「うーん……………」

迷う。

なんていうか、しゃべり方がどこか男っぽいといつかなんといつか…………。

「だったらついでに女っぽくしゃべってよ」

女の子に女っぽくしゃべっていうのも何か変だけどね。

「…………うーん、今からがんばってみる」

と真剣な顔で言う。

あれ、半分冗談だったんだけどなあ…………

「どっつ？ おいしい？ お団子」

「ああ。…………いや、うん、おいしい」

「にっこりしながら、ハイ」

「おいしい……………」

ニッコ

微妙に微笑んだ。

うわっ、かわいい。

危ない危ない。何かに目覚めるところだった。

そんな感じにだらだらと会話しながらお団子を堪能していたわたし達のところに、2つの影が近づいてくる。

「おおーキミかわういーねー！」

「パネエー、つかパエー、え、彼氏いんの？ いないでしょ？ パネエー」

両手を銃のようにしてわたし達を指しながらどこかチャライことをいう男性が2人。

一人が金髪のモヒカン、もう一人が青いアフロ。
アフロ……………。

チャラ男っていうか若干暴走族色混じってる感じだ。

「君達だつて君達」

あーやっぱりわたし達……………めんどくさい。

こつこつのは相手にしないに限……………

「彼氏はいない。…よ」

アルスが返事。

って、何返事してんのよ！

しかもなんか女っぽくしよう頑張ってる！？

「え！ まじで！ パネエー！ ちょっとお茶しネエー？」

「うんうん、おれらおごるからさあー！」

うわーめんどくさっ

無理。わたし絶対無理だからね。

「いや、わたしは……………」

「そう……………だな。いや、だわねよ」

いやいやいやいや！

え、何OKしてるの？

っていつか最後言いきったあと言い直した！ っっていつか言い直したわりに語尾がおかしいよアルス！

はあ……………もしかして、天然さん？

「そっちの娘は？」

「あ……………」

どうしよう。

わたしだけなら逃げるのもたやすいけどアルスだけを置いていくのも気が引ける。ここは一応一緒にいたほうがいいよね。

「はい、いいです」

「オツケエー、ちょ君サイコー、いえー」

「パエエー！ こっちこっち！」

そのまま、手を引かれていく。

「ねえ名前なんていうのかな？ おしえてヨォー」

名前………偽名でいいかな。

「アイシユ………よ」

と、わたしは適当に思いついた名前を言う。

「おーかわういーねー！ そっちは？」

「俺、いや私………か。じゃー重雄で」

何その大正生まれの方達みたいだなーミングセンス！ ひどっ！

っっていうか今『じゃあ』っていったよね？

……偽名だつてバレバレだよ？

「シゲオ？ 変わった名前だねエー。じゃあ略してミキちゃんまでー」
どこをどう略したらそうなったんだろつ。

「パネエーよ。まじパネエーよ！ パネエー！」

こっちの人はパネエーしかしゃべれない様子。

「おれたち、裏ですっげえおいしい隠れた店知ってんだよ、そこいこうぜ！」

「まじパネエーぜそこ！ パネエー！」

そのまま人が多い大通りのとある建物と建物の間のせまい路地に入っていく。やばい、このまま変なところに連れて行かれちゃうかも

……

そのままさらに奥へ。

もう人もおらず、どこか薄暗く、気味が悪い。

「ちよつと、アルス、逃げようよ！」

そういいわたしはアルスをつかんで走ろうとしたが

「ちよつとちよつとちよつと、待てよいいじゃんかここまできたんだシイー？」

「だぜお譲ちゃん。ここで逃げたらまじパネエーから」

袖をつかまれて止められた。

……………やばい

「悪い」

いや、謝らなくてもいいから、アルス。

「ア、アルスどうしよう……………」

小声でしゃべりかける。

「ちゅあ」

……………。

冒頭に至る。

本当にどうしよう……………

いざとなったら本気を出してアルスを連れて逃げよう。

そう心の中で決意した時。

「つつ……………」

アルスが小さな悲鳴を上げ、その場にバタリと倒れた。

あれ、アルス？

アルス！？

「ちょっと、何して……！」

「おおーっと暴れてもらっちゃ困るぜアイシユちゃん」

「ひゃ！」

2人のチャラ男に両腕をぎっちりガードされる。

ふと、三人目の気配を感じた。

誰……！？

「フ……… 仕事が早いな」

黒いフードを深くかぶった人が倒れたアルスの後から姿を現した。

そいつの腕が伸びてゆき、私に腕が伸びてくる。

よけなきゃ………

「おっとおー！」

「パネエー」

あがこうにも2人にぎっちり両腕を封じられているため、抜け出すことはできない。

「な、なにすんのよこのヘンタ……………」

ガードされたわたしの腕を黒フードの男の指が触れた。

瞬間。

バチッ！ という感電するような音とともにわたしの全身の力が抜けた。

意識がシャットダウンするように沈み込んでいく。

電気……………ショック……………？

意識が消える直前、最後にこんな言葉が耳に入ってきた。

「ちよろかったなコイツラ」

「パネエー」

「ふむ……………なかなか良い体をしている。ふふふ」

ああ、もう……………

ここで完全に意識が消えた。

残滅と救出

……

……ん

意識が戻る。

ここは……

「起きたか」

左側からアルスの声。

「え、ええ……と、なにがどうなってるの……？」

「なんか、捕まってるらしい俺ら」

「は!？」

さらっと重大なことを言われた。

捕まった？ それはどついうことだろう……

ナンパされて付いて行って意識を失って……あ。

なるほど

いや、納得してる場合じゃない。

逃げなきゃ…………あ、あれ？

と、その時、両腕が縛られてることに気づく。

今更ながら周りの状況を分析していく。

両腕はそのまま上の部分に固定されていて、両足も縛られている。そしてその状態でアルスと同じく壁に貼り付けられた状態。そしてわたし達がいる所は大きな廃墟。いや、昔何かの工場だったかのような場所で、広さはだいたい25メートル四方。窓は上のほうに結構あるが、ドアは2か所しかない。

簡単に言つと、広い部屋に縛られて放置されてる。

「アルス…………ちよつと、これどうすんのよ……………」

「どうするって、俺はこの状況下特に何もできない。俺は防御力特化型だからな」

と、どこまでも冷静なアルス。

ていうか、今の状況の危険度をわかってるのかしら。

「脱出…………しないと……………」

「何をそんなに焦っているんだ？」

あーやっぱり何もわかってなかったらしい。

「ほら、こつ言つものって男の人とかがいっぱい来ているんことを
れちゃうのよ」

「いろんなこと？」

どこまで純粋なんだか。

「と、とにかく危ないのよ！」

「そうか」

何かしないと……

クナイで縄を……ダメだ、ポーチまで腕が動かない。

何かスキルで……

いや、この縛られている状態では影分身は使えない。あのスキルは
束縛さえれている状態では発動できないのだ。

姿を消す隠密……も意味なし。

空蝉の術も……縄縛りは攻撃として判定されないよね。

他にもいろいろ考えてみるけど脱出に使えそうなのは思いつかなか
った。

……どうしよう。

と、その時

勢いよくドアが開いた。

「待たせたナアー！ ちょっとお友達呼んできたただけだぜ」

「そう、まじパネエーやつら」

さっきのチャラ男2人と黒いローブの魔法使い。

その2人に続いてぞろぞろと男達が入ってくる。

ぞろぞろ……ぞろぞろ……ぞろぞろ……

うわ、多すぎ。

それぞれが嫌らしい視線で舐めまわすようにじろじろ見てくる。

ざっと50人くらいだ。

「わ、わたし達になにするつもりなの！」

「フフ……そんなこと、決まっているでしょう」

わたしの問いに答えたのは電気ショックをしてきた黒いローブの男だった。

「ふざけないですよ！ 触ったら殺すからね！」

「元気がいいですねえ……おい、まずは服を脱がせる」

「うーっす」

「パネエー」

最初のチャラ男がわたし達に近づいてくる。欲望に満ちた眼で。

「ちょ、やめ……………」

着物の帯をほどかれ、下着があらわになる。

「うわ……………ちょっとやめて！ この変態！ 下衆！」

「そんなこといつてられるのも今のうちですよフッフ」

あーもう、本当に最悪だ。気持ち悪い。そしてなにより……………恥ずかしい。

アルスも同様下着姿。

「おお、こっちの姉ちゃんは胸を包帯で巻いてるぜ！ エロウイー
ツシユ」

「パネエーな！ 解ほどいちまえ！」

アルスの大きな胸があらわになる。

「お前ら気は確かか？」

とアルス。

「俺は男だ」

「は？ 何言ってるの姉ちゃん」

「もっとまじな嘘つけての。パネエー」

そして、今度はわたしのほうを見て

「んじゃこっちの強気な姉ちゃんも……」

ちよつと、ふざけないでよ！

そのまま腕がブラジャーの後側に近づき……

パチン

フォックが解除される。

「いや……」

わたしの上半身が脆だしになる……

「もう最低……うう……」

泣いてしまうのも仕方がなかった。

「ゲフフフフフ……お次は下を脱がしましょうか」

欲望に満ちた眼をしたチャラ男の腕が伸びてくる。

第六感的な。

「双眼鏡貸してくれよ。なんかすげえ心配なんだ」

「いいよ。はい。ホタリンの勘は鋭いからね。僕も手伝っよ」

そっつい2つポーチから双眼鏡をだし、1つ投げてる。

2つ持ってたのか。

ベランダに身を乗り出してみる

「補助魔法 インディケーションサーチ」

オレは補助魔法を発動。

これはある特定の人物の気配をサーチし、だいたいどこにいるかわかるという便利なものだ。某狩猟ゲームのペイントボールみたいな感じである。

耳を澄まし、気配を察知する……………

と、そのとき

コロネの悲鳴が聞こえたような気がした。

「マカロニさん今の……………」

「僕も聞こえたよ……………」

「くそ……どこだ……あ、あそこだ！ あそこらへんにいるっ
ぽい！ マカロニさんオレに捕まって！」

「了解」

そういい、オレとマカロニさんはベランダから飛び立った。

目指す先はここから近い路地裏の廃墟っぽいところ。

オレはマカロニさんを背中に乗せて、重力魔法と風魔法のコンビで
空中を高速で移動する。

そして目的の場所が見えてくる。どこから侵入するか……よし、
あの窓だな。

「とう！」

ガシャーン

オレは窓から突っ込んだ。

「えーっと、ここらへんだよな」

「だ、誰だテメェ！」

なんか叫ばれたけど無視。

そこは昔工場だったかのような場所で、中には50人を超える男共
がいた。超むさい。

そして反対側の壁には ……

「おいコロネとアルス！ 大丈夫かよ！」

下着姿で上半身を裸にしたアルスとコロネがいた。

なるほど。そういうわけか。

「こりゃ、やられたね」

「おいマカロニさん……………」

ムカつく。腹が立つ。ふざけんなよ…………

「うん、わかってるよ」

マカロニさんは言わずとも同意する。

オレはコロネにローブをかける。

「ちょっとまってるよ」

マカロニさんもアルスに布をかける。

「ちょっと、やってくるよ」

「おい！ 無視してんじゃねえよ！ 誰だテメエら！」

と、そのときさっき叫んだヤツがまた叫んだ。

はん……笑わせる。

名乗る義理もねえってのにや。

「ぐはっ………」

オレは瞬間移動でもしたかのように数メートル先の奴の目の前に現れて腹に拳をうちこんだ。

「にやろっ!」

もう一人がオレに向かって鉄パイプを叩きつける。

が、そんなもの効くはずがない。

「甘えよ」

魔法障壁で受け止め、オレは電流を流す。

「うあっ………」

「くそ………雷を統べる精霊、神よ。束縛と衝撃の込めし衝撃を与えよ 雷属性呪文 サンダー!」

すると黒いローブの男が魔法を行使した。

詠唱しながらその男の周りに大きな魔法陣が形成され、男の腕から雷が放たれる。

オレは小さな結界魔法を召喚し、その雷を囲み、圧縮、破壊する。

「なにつ！」

あーもうめんどくせえ、一気に決めよう。

「重力魔法グラビトン！」

ズウウウウウ　　ン

その場のオレとマカロニさん意外の動きが止まる。

「魔剣ハルバード」

マカロニさんがハルバードを召喚する。

「歯ア……くいしばれ！」

そしてオレは、黒い魔術師の顔面に拳を放ち

「ウエーブインパクト」

周りの男達が全員壁に叩きつけられた。

「ふう………ちよろかつたな」

「だね」

二人がそう言葉をかまし、わたし達の方に寄ってきた。

「大丈夫か？」

ホタリンの言葉。

「大丈夫じゃ……ないわよ……」

危なかったんだから……

「うい、立てつか」

腕が差し伸べられる。

それを勢い良いよくひっぱり、立ち上がるとともにわたしは抱きついた。

「もう……おそいわよ……」

「ちよ、おま」

涙が恥ずかしくて顔をホタリンの肩にうずめた。

ホタリンは一瞬びっくりしたようだったが、すぐに落ちつき、わたしの背中に腕が回されてくる。

「もう、大丈夫だったの。帰るぞ」

そういい、わたし達は宿に帰ったのだった。

「でさー、コロナがほぼ裸でさ」

「ええええええ！」

時はその日の夜。

帰ってきたあと、リサに「なんでみんなそろって外出してたの！
ずるー！」なんて怒ってたからホタリンが状況をしているワケなん
だけど……

「んでアルスとか包帯解かれてさーもうボインがドバンってぶぶ
っ」

説明の仕方が超うざい。

あ、鼻血出した。

「そのあと抱きついてきぶぐふあー！」

とうとう我慢できなくなって枕を顔面にぶつける。

「いい加減にしなさいよ！ 恥ずかしいから！ あーもう、ちよっ
とでもかっこいいと思ったわたしがバカだった！」

「ちよ、いてえ！ え、オレかっこよかった？」

「もう、知らないわよー！」

このバカ。

残滅と救出（後書き）

たまには戦闘意外の話を書きたかったんですけど、なんかいろいろぐだぐだですね……

最終的に戦っちゃってますし。

作者自身の未熟さをなにかと痛感しました。

調體マークの眼帯（前書き）

なんか最近タイトルが思いつかなくなってきた……

髑髏マークの眼帯

腕に握りしめる氷でできた刀で魔物の群れをずばずばと切り裂いていく。

「ふっ はっ！」

となりでマカロニさんも頑張っている。

今マカロニさんが手に持っている両手剣はこの前作ったものらしい。オレが「ちょいクエ受けてくるわー」と言って部屋を出ようとしたら「ちょっとな練習したいから一緒にいくよ」とか言っけて付いてきたのである。

ちなみに受けたクエストは魔物の群れを討伐するクエストである。

「ふうー……はっ！」

オレは氷で槍を右手に召喚し、投球する。

3匹くらいを貫通して行き、最後に木に刺さり、粉々に割れたあと消えた。

すかさず左手に持ちかえてた刀で斬りつける。

「ホタリンなかなか慣れてきたね」

「そっちなもな！」

そう、今オレは氷魔法だけを使って戦っている。

話によると、魔法の属性ってのは1人1こが普通らしくて、2つ持ち以上は超貴重らしいじゃん。んで、オレはというと、なんていう

か、そこらへんパネエーのよ。

んで、変に目立っちゃうし、表向きは氷魔法使いとして通ろうかなあなんて思ったわけであって

「魔剣ハルバード！」

マカロニさんの助言でもあるのである。

「氷剣ハルバード！」

今更説明してもあれだが、なぜオレが氷魔法を使うのかというと、なにかと凡庸性が高く、楽しいからである。この通り、形だけならマネもできたり。

「まったく便利だねその魔法……はっ！」

「だよな〜……はっ！」

お、やべえ。

このサイズの大剣は使うのは初めてだけど、補助魔法で手足強化したら十分強いじゃん！

「うおおおおおお」

ぶん回す。

オレを囲んでいた魔物が全員吹っ飛んでゆく。

たぶんオレそこらへんの剣士よりも強いかも。

「ウェーブショックインパクト！」

マカロニさんを中心に10メートル圏内の魔物が爆発するように吹き飛ばす。

……………マカロニさんにはかなわないよな

「召喚ミラーブレイド」

ハルバードを解除し再び両手剣を召喚するマカロニさん。

「あ、そうだ。コロネのマネでもして見るか」

両腕に手裏剣とクナイを装備。

投球。

開いた腕に次々クナイや手裏剣を作りだし、投げまくる。次々に魔物に突き刺さり、周りを血に染める。

「次はリサみたいなの？」

両腕に短い剣を2本召喚する。

オレは補助魔法で両足を強化し、普段の数倍の速さで剣を振るう。獣が一匹、勢いよく突進してくる。

「お次はアルスっつと！」

左腕に巨大な盾を氷で作りだし、防ぐ。

はじき返すと同時にヒビが走り、砕け散って消える。
魔力で作った氷だから解けずに消えるのだ。

簡単に例えるなら、喉渴いてる時魔力で作った水を飲んでも意味がないっていう。

魔力で集めた水なら大丈夫だけだな。

「でも、やっぱりマネできるのは形だけみたいだね」

とマカロニさん、

だな

コロネのマネだってあいつみたいに分身できんし、リサはさっきのオレよりずっと早く動けるし、アルスはあんな攻撃じゃ盾は砕けない。

「でも、なんか楽しくね？」

氷でできたハルバードを振るう。

「んで、どうよ。その剣」

マカロニさんに聞いてみる。今気づいたけど彼には珍しく普通のサイズじゃんか。

「いい感じだね。大剣類と違って攻撃速度が速いから臨機応変って感じだよ。ただ、刀身で防げないのがあれだけど、ねっ!」

「まあ、そんなもんじゃ、ねっ！」

最後の一匹と思われる魔物を叩き斬る。

「ふう……………結構慣れたかも氷魔法」

やばい、なんかめっちゃオレTUEEEE感が……………！

「ならよかったよ」

と、そんな時

ガサツ

背後の草叢くさくから何か気配を感じ取った。

「誰かいんのか？」

「あー、見つかったぜ」

と、出てきたのは一人の女性だった。

青い髪をストレートに腰まで伸ばし、髑髏むくろマークの付いた眼帯を付けているすこし年上な感じの。

腰には曲がった剣が1本ぶらさがっていた。海賊が使いそうなアレだと思う。

「なんつーか、たまたま通りかかってさ。面白そうだったから影から見てたんだよ」

「へ、へえ……………」

会話する。

なんていうか、悪い人じゃーなさそうだ。

ふいにその女性が振り向き、舌うちしてからオレ達に向かって早口に言った。

「まだ生きてんのかよ……………ちょーめんど。んじゃ、私は行くぜ。後
はよろしくな、赤い魔法使いさんと変わった剣のお兄さん」

そのまま足早に去って行った。

直後

さっき女性がさっきまでたっていた場所から巨大なクマのような魔
物が飛び出してきた。
2メートルちょいもある。

「うわやばー!」

と、いそいで距離を取り、剣を腕に召喚したのだが。

バタン

と何もしてないのに倒れた。

「はっ?」

近寄って見てみる。

うん。息は無い。全身鋭い刃物で斬られたかのように血まみれで、全体の毛が濡れてるように湿っていた。

「な、なんかよくわかんねえけど、ラッキー。んじゃ、今度こそ帰るうぜ」

「うん、そうだね」

オレ達は言葉を交わし、その森を後にした。

今日のはかわったやつにであったなー

私は一人森を歩く。

理由は特になく、散歩してるだけだ。ここら辺は私が生まれ育った村があつた場所である。その村は私が子供のころ滅んだんだけど。

と、そんな時

「はあ……はあ……腹……減ったぜエ……」

と、何やら山賊らしきヤツらがぞろぞろふらふらと歩いているのを見つけた。

後にも子分らしきヤツがいる。

ん？

私はその中の親分らしき大男に目が行く。

あの灰色の髪……あの薄汚れた金属のオノ……あの服……

あいつは………

「アツシユ？ アツシユなのか！？ お前何やってんのそんなところで！」

「は、はア？ テメエは………アリアスかよオイ！？」

「兄貴知り合いつすか？」

「ああ、幼馴染みてエなもんよ………んでアリアス、なんでこんなところにいんだよ」

やっぱりアツシユだった。

こいつはアツシユ。ちなみに幼馴染であり、幼少期時代からの付き合いである。

その後私は海賊に、こいつは山賊になったみたいな感じ。

「暇つぶしに散歩してたんだよ。つか、大丈夫かよお前ら。町まで送ってやるぜ？」

「ああ、頼むぜエ………」

とりあえず私はここから一番近い町、ジャッパーンまで水魔法によって作られた馬車で全員を運んだのだった。

その後、私は森で拾った奴らに町の適当なところでメシをおごり（金ならたくさんあるから問題はなし）、なんであんなことになってたのか聞いてるところだった。

「ってなワケで俺様達今超貧乏なんだよオ。だからハイワードの大会に出ようと思ってよオ」

つまり、なんか魔法使いにぼこられて金欠で金がほしくて大会か。

うーん、いいね、そういうのちょーいいよ。

「たしかその大会ってタツグ戦だよね」

「そオなのか？」

「一緒に出る奴は決まってるの？」

「今んところは決まってるねエけど。つか決まってるワケねエだろ今知ったんだし俺様」

「んじゃ、私が出てやるぜ！」

グッ と親指を立ててつきだす。

「はア？」

きよとんという顔をされた。

ん？ 私なんか変なこと言った？

いいじゃんいいじゃん。私最近暇なんだよ。こつ、戦いに飢えてるっていうか。

しばらく顎に手を当てて少し考えるような仕草をした後、彼、アツシユは言った。

「オ、オウ仕方ねエな俺様が一緒に出てやらア」

と、超上から目線の返事が返ってくる。

変わってないな。

「おけ、んじゃ話は決まりだね。んじゃ私は行くよ」

「行くってどこにだよアリアス」

「いやほら、私も一船長だからね。船の仲間も心配してる」

「ああな。なんか、そのよオ……メシ、サンキューな。うまかったぜ」

「そういうのは手作りの時言ってほしいな。んじゃ、ハイワードで待ってるぜ！」

「じゃな！ ほら、お前らも言エ」

「「「お世話になりましたーッス！」」」

「おつ、じゃあな」

そう言葉を残し、私はジャッパーンを出た。

楽しみだなあ、ハイワードの大会。

わくわくするよ

小せエ復讐

あの後俺様達はアリアスにすこし貰った金を使ってジャツパインの宿に泊まることにした。子分は15人だから8部屋で銅5だから…
…えーっと

「なア、銅5で8部屋取ったらいくらだ？」

「1日銅40ツスおやびん」

「おおー…結構たけエな。まアいいか」

てなワケでとりあえず3日くらい泊れるから子分達全員を宿に止めてやった。俺様一回こーいう宿に泊ってみたかったのよ。

にしてもすげエよなこの宿。ジャツパイン独特の木造の家が5こ縦にくつついた感じじゃねエか。ちなみに俺様達が泊ったのは2階だ。2階に8部屋だから2階はほとんど俺様達が占拠したようなもんだな。

空を見る。

夕食の時間くれーだ。

でも飯はおごってもらったしな。食わなくてもいいだろう。というかアイツどんだけ金余ってんだろうな。この金持ちめ。

一人宿を出て、庭のような場所に移動し、壁に背を預ける。

夜の風つてのエア気持ちいよな。

一本吸うか。

俺様はポケットから葉巻を取りだし、指先に小さな炎を出して火をつける。

ちなみに俺様は炎属性がちょっとだけ使える。野宿とか葉巻とかのためにがんばって覚えたのだ。

葉巻を吸う。

やっぱりこういう時の葉巻ってのはうめエな。
ふうー。

一服。

と、その時

「お久しぶりですねアッシュ」

声をかけられた。

横に振り向くとそこには黒いローブをかぶったやつが立ってる。――見外見からはよくわからん感じだが俺様は声でわかった。

「アーランドかア？ 久しぶり」

こいつもアリアスと同じ幼馴染みてエなモンだ。こいつは気が弱く、臆病なヤツだが、魔法の才能があり、それと同時に賢い野郎だ。ただ卑怯でもある。

「どうして貴方がここに？」

俺様と同様壁に背を預けながら聞いてくる。

「いいだろ別に。深い意味はねエよ」

「変わってませんね」

ロープの頭を覆い隠す部分が風ですこしめくれ、顔が見えた。と、同時にガーゼが張ってあるのに気づく。

「どうしたよその傷。盗賊のアーランドともあるつものがよオ」

こいつって結構強くなかったか？

雷魔法を得意とするアーランドは盗賊としても結構優秀なはず。そんなこいつが顔に大きな傷を作っていた。

「いえ、この前女性を拉致った時にですね」

ふむ、なるほどなア。

要するに、襲ったんだけど助けを呼ばれてほこられたってことか。

「何負けてんだバカ野郎」

「すみません」

夜の冷たい風が目の前を吹いた。

「ところで、すこし手伝ってほしいんですよ山賊のアッシュユさん」
「なんだよ」

「そのですね……………」

アーランドは語りだした。なんとというかこの前ぼこぼこにされた野郎をブツ倒したらしい。そんで一緒にやんねエかということだった。

よーするに復讐、か。

小せエ、小せエ復讐だな。

だが、俺様はうーんと腕を組んで唸る。

迷うな。

俺様、あんまこいつと仲良くしてたワケでもねエんだよなア

でもまあ、2対1か。

ちなみにいうと俺様は5人で1人をぼこるとか10人で1人をボコるとかそついう腐った戦い方はきれエなんだよな。男らしくねエ。

んーでも、なア。

その時、俺様の頭があることにひらめいた。

「銅100枚でどオだ!」

俺様名案すぎだろ。

「……………わかりました」

しびしびながら金のはいった袋を渡してきた。よしよし。

つまり、明日の正午、こっから見えるあの廃墟っぽい建物にいぎや

まったくもー……

机につき、もう一杯水を飲みほしてからポォーとしたあと「あー」と一言つぶやいてホタリンはこんなことを言う。

「なんか暇だからギルドいくわー」

あ、そうだ

と、ここで1つ思い出した。

「ちょっと行く前に占やってみないー？ ギルドで教わったんだー」

「おー、まじでー？ どんななん？」

「それはねー……」

ポーチから花を出す。

それも10本くらい。これを持って願いながら落とす。その時の落ち方によってメッセージが伝わってくるというものだ。

「うーん、なんか難しそうだな。んじゃ、さっそくやってみようぜ」

ホタリンが花束をつかみ、「はあー………とう！」と言ってから机に落とした。

ふむふむ………この並び方はたしかー………

「『攪ひかわるる』らしいであります大佐」

「なんじゃそりゃ」

おかしいなあ……

「もっかいやってみよー」

「おう。あちよー!」

テーブルに散らばるお花達。

「『そして生まれる腐った友情』らしいであります大佐」

「んー……な、なんかよくわからんけど、気を付けるぜ……」

そのあと「じゃあなー」と言って部屋から出ていったのだった。

攫われる。そして生まれる腐った友情。

オレはさっきのリサの占い結果のことを思い出していた。

オレが攫われる？ そんなバナナ。まあ、占だしな。外れることだつてあるよな。

1階まで下りた。

そしてオレはいつも通り街に出てギルドへ向かう。ギルドまでは宿をでて正面にある気、大通りを右に曲がれば見えてくるのである。

と、大通りを歩いていた時、建物と建物の間、せまい路地からこつちにこいと腕でしゃべりかけるヤツがいた。オレは自分を指差し「

オレ?」というところ「うんうん」みたいに首を縦に振る。

なんとなく、そいつのほうへ行ってみた。暇ゆえの興味本位。その路地に入った時、後に人に殺気を含む人の気配を感じ取り、反射的に振り向いたが

「いてっ!」

なんかバチっとして意識が吹っ飛んだ。

は?

あー………なんかすっげえ嫌な予感すんだけど。

小せエ復讐（後書き）

なんか親分とホタリンって無駄に書きやすい

腐った友情(?) (前書き)

1月7日コメにてご指摘をいただいたので直さしていただきました。
ご指摘ありがとうございます^^

腐った友情(?)

意識が戻る。

えーっと、場所は……

ん、どこかで見えたような場所だなーここ、ええーっと……

あ、そうだ、コロネとアルスがボインでドバンだったところじゃん！

てか、これって『攫われた』ってこと？

リサの占すげえな。当たらないでいてほしかったけど。

「あれ？」

逃げようとしたら両手に変な枷がはめられていてその枷が壁に鎖で固定してある。そしてこの枷、なんか魔法陣刻まれてあるんだけど。

すっげえー、嫌な予感。

まずは、壊すか。

「火炎魔法ファイヤーボール……んあ？」

炎で溶かそうとしたら枷についていた魔法陣が光り、オレの魔法は不発に終わった。

あれ、これって対魔術師用だったりすんのか？

「……いいザマですね魔法使いさん」

と、そのとき、扉が音も無く開き、黒いローブの男が入ってきた。

えーっと、オレこいつになんかしたっけ……

「誰お前」

「……………」

おい、答える！ オレはお前なんて知らねえよ！

「復讐にやってきたのに覚えてないとはこれまたいかに……………おい、はいってこい」

ぞろぞろと10人ほどの男が現れる。

と、ここで思い出した。

「あー、お前らコロネとかに変なことした……………黒い野郎だな」

なるほどな、んで仕返しか。

「やれ」

「ぐふっ！」

男の一人がオレの鳩尾みぞおちに拳を入れてきた。くそ、魔法が使えないとオレは一般人レベルなんだぞ。

オレは無い筋肉を必死に固めて内蔵を守る。続けて数人も殴りかかってきる。

必死によけるも両腕を封じられた状態では勝てるはずもなく

「ぐはっ……ぶへっ！」

拳が顎にあたったり脇腹に入ったりやられたいほうだいなのである。

「ははは、いいザマですねエ！」

ローブ野郎がこちらに杖を向けて……雷魔法を放って来た。前は詠唱してたけど今回は無詠唱だったから威力は低いだろう。

「うっ……」

だが今のオレには十分すぎる威力だった。

あーくそ、魔法さえあれば……

「ははははははははは、死ねえ！」

くそ……くそっ！

ははは、気持ちがいい、気持ちがいいですね本当に

「お前のせいだ！ この！ このこのっ！」

思い切り蹴っ飛ばす。

魔法使いの僕でも蹴ることくらいはできる。常人より弱いけど。

その方が、すかつとしますし。

ははは、苦しめ……僕の邪魔をしたことを報いるがいい……！

アッシュはこないかな。

彼の理不尽な力技があればもっとたのしいことになりそうなのに。

ふと、足音

アッシュかな。よしよし。

「もうすこしで楽になれますよっつと！」

僕は思い切り蹴っ飛ばした。

ははは……最高ですよまったく。

もうすぐ昼くらいかアと来てみればなんだよおィ

目の前であるの赤髪が手枷付けられて鎖に繋がれてぼこすかにされて
らあ。

なるほど……な。

あいつがぼこられたのもあの赤髪で、リンチしてぼこぼこにして
楽しんでるっつーワケか。

ふっ………とんだクス野郎だぜ。

「よう、待たせたなこの野郎」

アーランドが待つてましたといわんばかりの笑顔で、赤髪野郎が驚いたような顔で俺様を見る。

「こいつか、こいつをやりやーいんだな」

「そうです、ええ」

「なんでお前ここにいんの!?!」

ゴチャゴチャうるせーな。

「ちょっと黙ってる赤髪」

俺様は斧を振り上げて……思い切り赤髪に分投げた。

コイツの手枷をめがけてな。

ガスッ

手枷に斧が回転しながら飛んでいき赤髪の手枷にぶち当たり、両腕が自由になる。

「え?」

何がおきてんだかわからないといった顔をする赤髪。

「な、なんのつもりです？」

「おるア！」

アールランドの腹に向かって思い切り拳を放つ。

数メートルふつとんで壁に激突し、その場に座りこむアールランド。その顔は苦痛と疑問で覆われていた。

「な、なぜだ！」

「はん、くだらねエ！！！」

俺様はアールランドに向かって言葉を吐きだした。

「雷のアールランドともいう二つ名も落ちたなアオイ！ テメエはリ
ンチなんかしてて楽しいのかよ！ おイ！！！」

壁を素手でぶん殴る。

重い激突音があたりに響き渡ると同時にヒビが入る。

「ましてや魔法も使えない束縛されたザコ野郎によオ！！ 男とし
てテメエなんざ風上にも置けねえくそ野郎だぜ！！！」

「お、お前……………」

赤髪が口から赤いラインを垂らしながら俺様の名を呼ぶ。名じゃないけどな。

ぼっこぼこだなこの野郎。俺様を負かしたんだからもうちょいがん

ばつとけやヴオケ。

「勘違いすんなよこの野郎。別に助けたワケじゃねエからな。ただム力つくからぶん殴るだけだ」

「お前つて意外と筋通つてんのな」

「うるせエ」

俺様は赤髪から目を離しクズ野郎とその他もろもろと対峙する。

「逃げとけ赤髪野郎。おいそこのクズ野郎！ 根性叩き直してやる」

「く、この最低のクズが！ やれえ！ かかれ！ ブツ殺せ！」

「うおおおおおおお」

俺様の拳とクズ野郎とその他諸々の野郎達の拳がぶつかった。

はあ……………はあ……………はあ……………

今、山賊の野郎と一緒に全員ブツ倒したところだ。

逃げるとか言われたけど、オレだけ逃げてられるかってんだよ。コ
ロネとかの分もまだ返したりなかったところだし。

手枷は完全に砕けてなかったからオレは肉弾戦だったんだけどな。

まあ、それでも手枷で両手が封じられてるときよりめっちゃマシだった。

立っていられなくて座りこむ。
体中汗まみれ傷まみれだった。

そのまま大の字に転がる。

「逃げろっていったろオが」

「……………おう。まあ、いいじゃんか。助けてくれてさんきゅーなこの野郎」

「はんっ！ 助けたとかじゃねエってんだよ！あと、テメエをブツ倒すのは俺様って決まってるんだよ」

ゲゲッ

一瞬背筋に寒気が走り、オレは下手はファイディングポーズを取る。

「へっ、いまは戦^やらねエよ。死にそんなヤツブツ潰してなにが楽しいんだよコルア」

「へえー、お前結構いいやつじゃん。名前教えろよ。山賊の野郎じや呼びにくい」

「……………どーでもいいだろ」

「いーじゃねえかー」

じろっ と睨まれた。

うわーこいつの顔だと迫力あんなー！

まあ、いいや、今日はまじで危なかった。つーかさ

「お前なんでここにいんの？」

「別にどうでもいいだろオが」

コイツが気絶しているアーランドだっけ？ っていう黒いローブ野郎に近づき、持ち物を物色し、金目になりそうなものを自分のポーチに入れ始めた。

「うわあ！ お前何やってんだよ！ いっけないんだいけななんだ」

「テメエにア言われたくねエよオイ！ 俺様の金奪いやがったくせに！！ 銀1枚だぜ？ 銀。大金だろオが！！」

「ん、そうだっけ？ もっと取ったような気がする」

「ブツ殺すぞゴルア！」

こういうヤツにカツアゲとかされたらさぞ怖いだろうなあ、っていうのが今のツツコミで分かった。うん。

「まあ、まじでさんきゅーなまじで。オレはもう帰るぜ」

「次合う時までくたばんなよ」

「そんなやわな体してねえよ！ じゃあな」

「はっ」

そうして、オレは一人宿に帰って行ったのである。

「ええええええ何があったのホタリン!!!!!!」

帰ってきてまずリサが叫んだ。あーそういうばオレ傷だらけだったな。あはははは

「いやーそのな、アレだよアレ」

「ちょっとひどい傷じゃない!」

「いやー、だからオレの話をだな?」

「たしかに、こことか痛そうだね」

ツンツ

マカロニさんが楽しそうな顔でオレの擦り傷を指で刺した。

「いてええええええええええ! 痛えよ!!!」

「あはは」

「何するんだよマカロニさん!」

このドS野郎!

「こつち来い。俺が治療してやる」

アルスが腕でこつちこつちをしている。うう……まじ天使。アルスに傷の治療（なんかバンソーコー的な張ったり）してもらってる間、オレは質問攻めにされた。

「ねえなにがあつたのー？」

「そうよ、なんか心配するじゃない」

女の子ってすつげえ心配性な印象あるんだけどオレ。まあ、テキト
ーに答えるかあゝ

「S Mプレイ」

「最低っ！ 人が心配してるのに！」

ベチン！

背中に張り手がクリーンヒットする。

「ぎゃあああああああ！」

「あははははは」

いてえよコロネ！ つかそこで笑うなマカロニさん！！ 人格疑う
わ！……！

「ねえS Mプレイって何？」

「あー、それはね、あの、あれよ。ホタリンが好きなやつなの」
リサは本当に中学生なのか!? っていうかおい、間違った知識吹き込むな。SMプレイってのはな?
と語ろうとしたらコロナに睨まれたのでやめた。まじで怖いわ。
アルスも純粹ってコロナから聞いたけどさ、こいつもなかなかの純粹じゃね。

「まあ、なんつーか、街の盗賊団ぼっこぼこにしてきたんすわ」
もう変なことって変なことに持ってかれるのもダルいのでオレは白状した。本当っていうか、本当だよな。前半がめっちゃ省略されてっけど。

「まあ、無理はするなよ」
アルスがバンソーコーらしきものをオレの腕にペタツとはると、氣遣いあふれることを言ってくれた。うおおおお、心にしみるう

「まあ、心配させないでよね」
ベシツつとオレの背中をたたくコロナ。
うおおおおそこは擦り傷がああああああ!
アルスと違ってこっちは身にしてみた。あれ、オレうまいこといったよな? まあ、とりあえず今はアルスの言った通りに無理なく休ましてもらっぜ。

「悪い悪い。ってことで寝かせてもらっぜー。おやすみっ!」
そう言い残しオレは布団にくるまったのだった。

女性陣（アルス除く）の質問攻めの対応があれなのもあったが一番はもちろん、普通に疲れてたからなのである。

というわけで寝るのに数秒かからなかった。

買い出し

「今日の昼までかー」

「そうだねー」

翌日、朝の会議にて今日の昼出発することが決まったのである。

今思えば長かったようでも短かったような気もするよーな1か月くらいだったわねーとか思ってた自分に曖昧すぎるでしょなんてツッコミをひそかに入れた。

「まあー、そういうことだから少し買いだめたほうがいいよね」

「だな」

「そうね」

そういうワケで、わたし達5人は最終日に買い物することになったのである。

「どこから寄ろうかな」

この街は結構広いから全てを回るわけにもいかないから3組に分かれた。

隣を見る。

あれ？ あいつどこいった？

と思つたら左側にある屋台みたいなところで

「それいくらつすか！」

なんていいながら店に並べられてある焼きイモを見つめていた。

……………迷子になつてもしらないんだから

あれ、デジャブ？ まあいいや。

そんなわたしの心配なんて知らないような顔でやってくる。
当たり前だけど。

「ん？ ふおーふいは？」（ん？ どうした？）

「いやべ、別に？」

「ふえー、ふはこぼねもこうぶへっほ！」（ふーん、つかコロネも
食うぶへっほ！）

あ、引っかけた。

「食べ終わってからしゃべりなさいよ！ まったくもー」

むせるホタリンの背中を叩いてあげる。
ちなみに数日前にした傷なんかは全て治っていた。もしかしたらわたし達も丈夫な体なのかもしれない。

「……………あー、死ぬかと思つた。ほい」

と紙に包まれた焼きイモを渡してくるホタリン。

「ありがとう」

うん、結構ほくほくしてて甘くておいしい。

いや、ちがう、出発するための買いだめに来たんだった。

「っていつかさ、保存の効くようなものさがしましょうよ」

「あー、だったな」

うーん、とうなった所で

「あ、あれとかよさそうじゃね？」

わたしはホタリンが指を指した方向にある店を見た。

『鮓屋のスッシーヤ』という看板がぶら下がってる。

「思いつきり生ものじゃない!」

「え、だめ？」

「だめ! っていうか腐っちゃうじゃん!」

「まじでか!?!」

はあ、とわたしはため息をついた。いや、つかされた。

「お、じゃああそこ行ってみようぜ」

『保存食屋のナガモッチー』

おお、ホタリンにしては珍しく普通の場所かも。っていつか保存食屋なんて店があるんだ。便利ね。

その店の棚には昆虫らしき生き物が日干しにされて綺麗に並べられていた。

……。

「食えるか!」

「いや、誘ったのアンタでしょ!」

「なんでやねん!」

「それこっちのセリフなんだけど!」

ああ……

先が思いやられる……

道を2人並んで歩く。並んで歩くと結構身長差って目立つよな。この場合だと兄妹みたいな感じか? まあ、年齢的にもそんな感じか。

「んー、買い出っしていつでも何買えばいいんだろー」

とリサが首をひねる。

それもそうだな。買い出しにいきこうとしか言われていない。うーん、まあ適当にほしいものを買っておけばいいだろう。ポーチがあるから邪魔にもならないしな。

「なんでもいいんじゃないか」

「へえー、じゃあ適当に歩こうかー」

ルンルンといった調子で街を歩くりサ。非常に楽しそうにしている。それから歩くこと1時間とすこし。

「あ、あれおいしそー」

「おー、あれうまいんだよおー」

「おおー、あれは!?!」

いつのまにか食べ歩きになってしまっていた。

食べ歩きならコロネとしたな。いや、こっちのほづが買いまくってるけど。

団子をくわえながら会話でもする。

「楽しそうだな。なんかあったか?」

「べっつに〜 はむっ」

幸せそうな顔だな。

「あ、あれうまそー！」

やれやれ………もうすでにお腹も膨れてきたぞ。一杯食べるなりサは。成長期か？

と、今度はタイ焼きみたいなものをくわえながら歩きだす。

「いっぱい食べるなりサは」

「まあねえ〜お年頃ですからあ〜………って、うおお！」

と、とある店でおもしろそうなことをやっている人がいた。

腰に刀を刺した普通の侍みたいな人が店の前で仁王立ちしているしながら声を張り上げていたのだ。

「おれっちに剣で勝てたらこの超高級のお茶ツ葉半年分あげちゃうよー！ 1回銅10枚！ どうでいー！」

あれだな、前姉と夏祭りに行った時「腕相撲1回100円で勝てたら300円」みたいな店を見たことある。姉が挑戦したけど秒殺で負けだった。当然といえば当然だったが。

それにしても、そういうやつって大抵自信過剰だよな。

「ねーアルスー。あの人と遊んでみていいー？」

「ああ」

よおーっし、と気合いを入れて銅貨を片手にその侍の元へ走ってい

くりサだった。

「たのもぁー！」

「お譲ちゃん、手加減はしねえーぜよ？」

「おうよーがってんだーい」

自信侍が仁王立ちしていた店の裏側に移動した後、リサは木刀を渡され、自信侍と対峙した。それを俺が近くにあった丸太に腰をおろしてのんびりみているという感じだ。数人、俺と同じくギャラリーらしき人もいる。

ちなみに自信侍というのは俺が決めた呼び名である。名前がわからないから脳内ではそう呼ぶことにした。ゼンマイ侍みたいだな。

「いくぜい！」

自信侍が足を踏み込み……リサの後側に出現し、木刀を上にも構えた。速いな。まるで瞬間移動したような速さだ。まぁりサのほうが早いだろうが。

「おぉー、なかなか早いねお兄さん」

右手の短い木刀で自信侍の木刀を受け止めた。

おぉーと歓声がわく。

ちなみにリサには大人サイズの木刀は重すぎるので、子供サイズの木刀を2本持っている。

「おおー、お兄さん驚いたぜよ。そい！」

自信侍が木刀を半回転させ、リサの剣をはじき、すかさず同じ場所に素早く木刀を振り下ろした。

倒してリサが左の木刀で受け止め、右手の木刀で自信侍の腹に突きを放つ。

その突きをギリギリで横に避け、木刀で薙ぎ払う。

それをリサはかがんで回避し、一瞬で肉薄し両腕の木刀をクロスさせるように斬撃を与える。

が、それも自信侍は受け止めて見せた。

さすが、腕に自信があるだけのことはあるな。よくもまあ、素早い攻撃をあんな重そうな剣で相手できるもんだ。

「ふ……………甘く見ていたぜお譲ちゃん！ うおおおおお！」

いきなり自信侍が発狂し出した。頭でも打ったのか？

「東国流奥義 一閃！」

スツ と横に木刀を一閃する。

はっ！ とリサが右手にもつ木刀を逆手にもってガードした。

どうやら斬撃を飛ばしたようだ。いつの間にか見物人が増えていたらしくさつきより大きな歓声が沸く。「おお！ あいつのあの技を防いだ！」「あの譲ちゃんは何者だ！」とかなんとか。この街の住人も暇だな。

「あはははははは」

「はっはっはっはっ！」

でもまあ、楽しそうな2人を見てみると早く終わらせるなんて言えないよな。

集合の正午までのんびり見とくか。

「ごめんごめんー、遅くなっちゃったー」

「悪い」

おお、アルスとリサじゃん。

アルスは両腕に紙袋を持っていた。何が入ってたんだ？

「まあ、いいじゃんいいじゃん。んで、もうそろったのー？」

「そうね」

よし、じゃああれだな

「出発と行きますかー！」

「イエー！ー！」

というわけで長くも短かったような気もしないでもなくなかない思
いで詰まったジャッパーンを出発することにしたのである！

うおおおおお！

馬車に揺られて

「あ~~~~~」

「い~~~~~」

なんとなく呻くとチャッピーにまたがっているリサもノリで返事してくれだ。

「う~~~~~」

「え~~~~~」

「お~~~~~」

.....。

「眠いな」

「うん」

半目になりながらも返事が返ってくる。

空を見上げる。

いい青色してやがるぜ〜。

眠。

眠い！

いえー！

「あんだどうしたの？ ボオーっとして」

「……………んあ？ ごめ、もっかい」

「どうしたの？ ボオーっとして」

「いや、超眠たいんだぜよい。今日は朝起きたしや」

「語尾がおかしいわよ語尾が」

ああー……………眠い。ちょー眠い。

馬の手綱を引きながらオレは思う。

眠い、と。

だってよ、ただでさえ眠いのにな、なんだよこの環境。空は青く、自分にさしかかる日差しが心地よい感じ。そんなもって周りは木が1本たりともない草原が全体にずらーって広がっている。地平線が見えるほどに。んで、こんだけ障害物がなけりゃー風も吹くつてもんだ。これがまた強風ならまだまじだがそよ風だ。寝ろって言うてるようなもんだ。

つてことで、オレが寝ても誰も文句いえないだろ。みたいな？

おお、文句言われねえじゃん。

オレ頭E!

よし寝るか。オヤスミ……………

ドサツ と馬車の前方から音が聞こえた。

「いまの音……………何？」

不思議に思っただけでホタリンがいるであろう場所に向かって呼びかけるも返事がない。

「ちよつと、返事なさいよ」

と、窓から顔を出してみた。

そこには……………

ホタリンが倒れていた。

え？

「ホ、ホタリン!？」

窓から飛び出し、ホタリンのもとに駆け寄り、状態を確かめた。

「すう……………すう……………」

寝ていた。

「心配したじゃない！」

「ぶへっ！」

まあそんなワケで今は कोरोनाが馬の綱を握っているところだ。リサも寝ていたらしく俺が後のほうに運んでおいた。

「あつたまくるなーもっ」

前方で कोरोनाの愚痴らしきものが聞こえてくるが仕方がないだろう。

横の席を見る。

気持よさそうに寝ているなホタリン。

ぐらっ　と首が傾いて、俺の肩によたれかかってきた。まあ、疲れ
てるんだろう。肩くらい貸してやる。

「アルスは人気者だね」

マカロニさんが紅茶を飲みながらそんなことを呟やいてくる。

まあ、この状況ならそう見えなくもないか。

横にはホタリンがいて、俺によたれかかっている。それでもって俺の膝の上ではリサが目と閉じているのだ。なんていうか、母性あふれる光景だろうな。

俺にはそんなもんじゃないだろうけど。

「そういえば、アルス達はお茶っ葉を大量に持ってきてたけど、どうしたの？」

ふいに開かれる。

うーん、どうしたの？ って言われてもな、なんというか、アレだろ。

「力づく」

「ずいぶんと手荒だね……………」

いや、結構正々堂々とした戦いだっただぞ。

「ジャツパーンの剣技ってすごいよな」

暇だしすることもないから会話でもしようか。といつことで俺は口を開いた。

「アルスも戦ってみたのかい？」

その口はお前も戦ったのか。

「リサといい勝負だったぞ」

「それはまた……………」

紅茶を一度口に含み、カップを下ろす。

「…………強い人だったみたいだね。僕じゃ勝てないかも」

「そうか？」

まあ、マカロニさんが勝てないっていったのはおそらく相性的な問題だろう。マカロニさんは素早い相手と相性が悪いのだ。まあ、人間相手なら一撃与えれば倒せると思うけどな。

シユゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

- - - - -

馬車の外から壮大な効果音が伝わってきた。

「結構魔物多いみたいだねこころへん」

「草原にもいるんだな」

「たぶん鳥類だと思うよ」

「なるほど」

そうだよな。あのビームが地上にぶつかったら普通に爆発するくらいするだろう。

「…………にしても、すごいよねあのビーム」

「…………ああ」

そのまま特に何も起きないまま何時間が立った。外も暗くなりつつある。

「今日はここくらいで野宿ね」

そうだな。

「そういえば、見張りとか決めなくていいかい？ 馬もぐっすりだし」

マカロニさんが流し眼に馬達を見ながら言った。うん、熟睡だ。

「うーん……………」

ここは……………

……………森の中か？

そして目の前にはなんかでっかい遺跡っぽいものがある。

なんじゃこりゃ

しばらく周辺をぐるりと回ってみる。

んー、なんかあれだな。古代遺跡みたいな感じだ。石でできた塀が四方を囲んでいて中心に像がある。そこに5つの何かをはめるような台があった。

ドラクウェアを思い出すぜ……………

あれおもしろいよなー！
え、そんなの知らないって？ ごめん。

しばらく中心の像を見てみるとうつすらとだか人影が見えた。
ところどころ透けていて、幽霊みたいな印象をもった。

そしてなんていうか……本を片手に黒いローブに如何にも魔法使いが
かぶりそうなハットをかぶっていていかにもな杖を持っていた。
たぶん魔法使いだろう。

その魔法使いが手に5色の光を宿し、台にそれぞれ埋めていく。
そして……

ん……

……

夢か。

続き気になるわー。あのあとどうなったんだろ。

「あ、おはようホタリン」

「おっ」

もう夜か。

昼寝しすぎちゃった感じですね。ええ。

「みんなもう寝んの？」

「そうよ。寝過ぎよあんな」

「あ〜」

「とこのことで見張り宜しくねホタリン」

馬車の中でマカロニさんが横になりつつもさわやかに言った。

まあー、別に良いけどさ。

たぶん、いやきつとどうせ眠れないし。

「了解す〜」

あ〜、なんだろうなあね。

まあ、夢だしいいか。

「あー、やっぱりヤツは気にせんか〜映像を夢として見せるの結構めんどろなのじゃがのう」

「まあしないだろうなとは思いますが、大丈夫だとは思いますがよ」

「じゃよな。つか気にしてくれないと困るんじゃよわし的にも」

「そついですね」

「まああと半年後くらいまではきこほしの」

「そついですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753y/>

暇な世界にさようなら

2012年1月12日00時17分発行